

(六)、飲酒過度、或は宿醉等。

類聚方廣義に云く

「霍亂、疝瘕、攻心腹痛シ、發熱、上逆シ、心悸シテ嘔吐セント欲シ、及び婦人ノ血氣痛、嘔シテ心煩シ、發熱、頭痛スル者ヲ治ス」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 麥門冬湯 バクモンドウタウ (金匱要略方)

麥門冬六・八 半夏三・四 人參 甘草各〇・六 粳米一・七 大棗〇・八

右六味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三、四回)。

此方、原本に在りては、麥門冬の分量多し。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

麥門冬湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○大逆、上氣し、咽喉利せざる證。(肺痿肺癰欬嗽上氣病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ心下痞ノ證有ルベシ」と。

#### 本方の作用

此方は、麥門冬以下の六味より成り、而して麥門冬は其量最も多く、半夏之に次ぎ、粳米また之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、人參、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の六味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

「心下痞シテ嘔吐セント欲シ、欬逆シ、咽喉乾燥、不利ナルハ、麥門冬湯之ヲ主ドル」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、肺結核、及び其類症にして、身體羸瘦、皮膚乾燥し、逆上感あり、咽喉乾燥して渴する症。

(二)、咯血の後、逆上し、或は渴する症。

(三)、喉頭結核、及び其類症。

類聚方廣義に云く

「消渴、身熱シ、喘シテ咽喉利セザル者ハ、天瓜粉ヲ加フ。大便燥結シ、腹微滿スル者ハ、調胃承氣湯ヲ兼用ス。

久咳、勞嗽、喘滿、短氣シ、咽喉不利、時ニ惡心、嘔吐スル者ヲ治ス」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 竹葉石膏湯 チクエフセキカウタウ (傷寒論方)

竹葉一・二 石膏四・八 半夏一・六 人參〇・八 甘草〇・六 粳米二・八 麥門冬三・

四

右七味、水二合を以て、先づ六味を煮て一合二勺を取り、後、粳米を入れ、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

#### 藥能

竹葉(チクエフ)の性能

古方藥品考に云く

「氣味辛、發ニシテ涼降、以テ虛火ノ上行、氣逆等ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味辛平、欸逆上氣ヲ主ドリ、煩熱ヲ除キ、痰ヲ消シ、嘔噦、吐血ヲ治ス」と。

#### 本方證

竹葉石膏湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○傷寒、解して後、虛羸、少氣し、氣逆して吐せんと欲する證。(陰陽易差後勞復病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ枯燥ノ證有ルベシ」と。

#### 本方の作用

此方は、竹葉以下の七味より成り、而して石膏は其量最も多く、麥門冬之に次ぎ、粳米また之に次ぎ、半夏また之に次ぎ、竹葉また之に次ぎ、人參また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

「陽病、虛羸、少氣シ、嘔逆シテ吐セント欲シ、其人大便鞭ク、大熱無ク、舌乾キテ渴スル者ハ、竹葉石膏湯之ヲ主ドル」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、熱性病、上逆し、喘咳し、食慾減退して口渴甚しく、精力衰憊し、脈數にして弱なる症。

(二)、熱性病、皮膚乾燥して、肌熱退かず、咳嗽、咯痰ありて煩悶する症。

(三)、肺結核、及び其類症にして、肌熱灼くが如く、或は煩渴甚しき症。

(四)、糖尿病、或は尿崩症等。

醫方選要に云く

「伏著、内外熱熾ンニシテ、煩躁シ、大渴スルヲ治ス」と。

又、傷寒選錄に云く

「陽明、汗多クシテ渴シ、衄シテ渴シ、水ヲ欲シ、水入レバ即チ差エ、後、渴スルニハ、即チ本方、湯成リテ滓ヲ去リ、生薑ノ自然汁三匙ヲ入レ、再煎スルコト一沸ニシテ服ス。神效アリ」と。

又、類聚方廣義に云く

「傷寒、餘熱退カズ、煩冤咳嗽シ、渴シテ心下痞鞭シ、或ハ嘔シ、或ハ噦スル者ヲ治ス。麻疹、痘瘡モ亦同ジ。

骨蒸勞熱、咳シテ上氣シ、衄血、唾血シ、燥渴、煩悶シ、眠ルコト能ハザル者ヲ治ス。

消渴、食飲止マズ、口舌乾燥シ、身熱シテ食セズ、多夢、寢汗、身體枯槁スル者ヲ治ス。若シ大便通ゼズ、腹微滿シ、舌上黒胎ノ者ハ、調胃承氣湯ヲ兼用ス」と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 吳茱萸湯 ゴシユユタウ (傷寒論及金匱要略方)

吳茱萸四・〇 人參 大棗各二・四 生薑四・八

右四味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

吳茱萸湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)穀を食して嘔せんと欲する證。(陽明病篇)。(二)少陰病、吐利し、手足厥冷し、煩躁する證。(少陰病篇)。(三)乾嘔して涎沫を吐し、頭痛する證。(厥陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○嘔して胸滿する證。(嘔吐噦下利病篇)  
等なり。

#### 本方の作用

此方は、吳茱萸以下の四味より成り、而して生薑は其量最も多く、吳茱萸之に次ぎ、人參、大棗は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「胸滿シ、心下痞鞭シテ、嘔吐スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、胸腹に膨満感あり、腹を按ずるに軟弱なり。而して或は嘔吐を發し、或は乾嘔し、其脈微緩なる症。
- (二)、心下部膨満して食慾缺損し、熱候なく、二便常態の症。
- (三)、胃部停滯の感ありて、或は心煩し、或は嘔吐を發し、脈微にして沈なる症。
- (四)、頭痛して乾嘔を發し、手足寒冷、尿利減少し、脈微にして細なる症。
- (五)、吃逆を發する症にして、陰證に屬する者。
- (六)、小兒の吐乳症等にして、手足寒冷の者。

肘後方に云く

『人、食シ畢ツテ、噫醋(吞酸)シ、及ビ醋心(嘈雜)スルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

「噦逆(即ち吃逆)ニハ、此方ニ宜シキ者有リ。

霍亂、吐セズ下ラズ、心腹劇痛シテ、死セント欲スル者ハ、先ヅ備急圓、或ハ紫圓ヲ用ヒ、繼イデ此方ヲ投ズレバ、則チ吐セザル者無シ。吐スレバ則チ下ラザル者無シ。已ニ快吐下ヲ得ルトキハ、則チ苦楚脱然トシテ除カン。其效至ツテ速ナリ。知ラズンバアル可ラズ。

又脚氣冲心、煩憤、嘔逆シ、悶亂スル者ヲ治ス』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

厚朴生薑半夏甘草人參湯 コウボクシヤウキヤウハンゲカンザウニンジンタウ

(傷寒論方)

厚朴 生薑各四・〇 半夏三・〇 人參〇・五 甘草一・〇

右五味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、成本に在りては、其方名、半夏、甘草を顛倒す。今、宋板に従ふ。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

厚朴生薑半夏甘草人參湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○發汗の後、腹滿する證。(太陽病中篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ吐逆ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、厚朴以下の五味より成り、而して厚朴、生薑は其量最も多く、半夏之に次ぎ、甘草また之に次ぎ、

人參は最も少量なり。即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。故に方極附言に云く

『胸腹滿チ、心下痞鞭シテ、嘔吐スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、疲勞シ、腹虛滿シテ嘔吐スル者ハ、厚朴生薑甘草半夏人參湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱候なく、腹虛滿して微煩し、食慾著しく減退する症。

(二)、熱候なく、胸腹膨滿を覺えて食を欲せず、其脈弦遲なる症。

張氏醫通に云く

『胃虛シテ嘔逆シ、痞滿シテ食セザルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『霍亂、吐瀉ノ後、腹猶ホ滿痛シ、嘔氣有ル者ヲ治ス。腹滿ハ、所謂實滿ニ非ザル也』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

半夏瀉心湯

ハンゲシヤシントウ

(傷寒論及金匱要略方)

半夏三・六 黄芩 乾薑 人參 甘草 大棗各一・八 黄連〇・六

右七味を一包と爲し、水二合を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

半夏瀉心湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○心下滿ちて痛まざる證。(太陽病下篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○嘔して腸鳴り、心下痞する證。(嘔吐噦下利病篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、心下痞ハ、當ニ心下痞鞭ニ作ルベシ』と。

本方の作用

此方は、半夏以下の七味より成り、而して半夏は其量最も多く、黄芩、乾薑、人參、甘草、大棗之に次ぎ、黄連は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心煩シ、心下痞鞭シ、腹中雷鳴シ、若クハ乾嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、飲食物停滯の感ありて、心下痞鞭する症。

(二)、嘔吐、或は下痢性疾患にして、心下痞し、或は時々腹中雷鳴を發する症。

(三)、吃逆等にして、心下痞鞭する症。

(四)、妊娠嘔吐等にして、心下痞する症。

(五)、神經衰弱性不眠症等にして、心下痞し、心悸亢進等ある者には、證に由り茯苓を加ふ。

千金方に云く

『老少ノ下利、水穀消セス、腹中雷鳴シ、心下痞滿シ、乾嘔シテ安カラザルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『痞瘕、積聚、痛、心胸ヲ侵シ、心下痞鞭シ、惡心、嘔吐、腸鳴シ、或ハ下利スル者ヲ治ス。若シ大便秘

スル者ハ、消塊丸、或ハ陷胸丸ヲ兼用ス』と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

生薑瀉心湯

シャウキヤウシャシントウ

(傷寒論方)

半夏三・六

甘草

人參

黃芩

大棗各一・八

黃連

乾薑各〇・六

生薑二・四

右八味を一包と爲し、水二合を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、半夏瀉心湯の去加方にして、即ち其原方に、乾薑を減量し、生薑を加味せるものなり。

本方證

生薑瀉心湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○胃中和せず、心下痞鞭し、食臭を乾噎し、脇下に水氣有り、腹中雷鳴し、下利する證。(太陽病下篇)なり。

本方の作用

此方は、半夏以下の八味より成り、而して半夏は其量最も多く、生薑之に次ぎ、甘草、人參、黃芩、大棗また之に次ぎ、黃連、乾薑は最も少量なり。

即ち此方は、半夏瀉心湯中の乾薑を減量し、更に之に加ふるに、生薑を以てせるものゝ如し。故に方極附言に云く

『半夏瀉心湯證ニシテ、嘔吐スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、心下痞シ、食臭ヲ噎シ、重キ者ハ嘔吐シ、脇下ニ水氣有り、腹中雷鳴シ、下利スル者ハ、生薑瀉

心湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、嘔吐、或は下痢性疾患にして、心下痞硬し、吞酸、嘈雜甚しき症。
- (二)、飲食停滯の感ありて、心下部痞し、或は嘈雜に苦しむ症。
- (三)、下痢すること頻々、心下部膨滿し、或は痛み、或は痛まらずして食慾無く、時々酸性液を吐出する等の症。

類聚方廣義に云く

『凡ソ噫氣、乾嘔ヲ患ヒ、或ハ嘈雜、吞酸シ、或ハ平日飲食スル毎ニ惡心、妨滿ヲ覺エ、脇下ニ水飲升降スル者ハ、其人多クハ心下痞硬シ、或ハ臍上ニ凝塊有リ。長ク此方ヲ服用シ、五椎ヨリ十一椎ニ至ルマデ、及ビ章門ニ灸スルコト、日ニ數百壯、消塊丸、消石大圓等ヲ兼用スレバ自然ニ效有リ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

甘草瀉心湯 カンザウシヤシントウ (傷寒論及金匱要略方)

半夏三・六 甘草二・四 黄芩 乾薑 人參 大棗各一・八 黄連〇・六

右七味を一包と爲し、水二合を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す(通常

一日三回)。

此方、傷寒論に在りては、人參無し。今、金匱要略に従ふ。

此方は、半夏瀉心湯の去加方にして、即ち其原方に、甘草を増量せるものなり。

本方證

甘草瀉心湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○醫、反つて之を下し、其人下利すること日に數十行、穀、化せず、腹中雷鳴し、心下痞硬して滿ち、乾嘔し、心煩して安きことを得ざる證。(太陽病下篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○默默として眠らんと欲し、目、閉づることを得ず、臥起安からず、食臭を聞くを惡み、聲、喝(即ち嘶)する證。(百合狐惑陰陽毒病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ急迫ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、半夏以下の七味より成り、而して半夏は其量最も多く、甘草之に次ぎ、黄芩、乾薑、人參、大棗また之に次ぎ、黄連は最も少量なり。

即ち此方は、恰も半夏瀉心湯に加ふるに、更に甘草を以てせるもの、如し。故に方極附言に云く

『半夏瀉心湯證ニシテ、急迫スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、下利スルコト日ニ數十行、或ハ穀化セズ、腹中雷鳴シ、心下痞シ、乾嘔シ心煩シテ安キコトヲ得ザル者ハ、甘草瀉心湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

尾臺榕堂氏曰く

『此方ハ、半夏瀉心湯方内ニ於テ、更ニ甘草一兩ヲ加フ。而シテ其主治スル所大ニ同ジカラズ。曰ク下利スルコト日ニ數十行、穀化セズト。曰ク乾嘔シ心煩シ、安キコトヲ得ズト。曰ク默默トシテ眠ラント欲シ、目閉ヅルコトヲ得ズ、臥起安カラザル者ト。此レ皆急迫スル所有リテ然ル者ナリ。甘草ノ君藥タル所以也』と。

應用

- (一)、下痢して心下滿悶し、氣急息迫し、脈沈弦なる症。
- (二)、瀉下劑を用ひて下痢を得、下痢續いて止まず、心下痞鞭し、食思缺損し、呼吸促迫する症。
- (三)、吐逆の症にして、心下痞鞭し、呼吸促迫し、小半夏湯を與ふるに、反つて嘔吐増劇する等の者。

傷寒六書に云く

『動氣上ニ在リ、之ヲ下セバ則チ腹滿シ、心痞シ、頭痛スルハ、甘草瀉心湯ニ宜シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『慢驚風ニハ、此方ニ宜シキ者有リ』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

甘草湯 カンザウタウ (傷寒論方)

甘草八・〇

右一味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方は、甘草瀉心湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

甘草湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○咽痛する證。(少陰病篇)

なり。

本方の作用

此方は、甘草一味を以て一方を成す。故に其作用は、主として諸般の急迫性疼痛を緩解するに在り。



此故に、方極附言に云く

『咽喉急痛シ、及ビ諸ロノ急迫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、炎症症候甚しからずして、咽痛を發する等の症。

(二)、聲音嘶啞等。

類聚方廣義に云く

『凡ソ紫圓、備急圓、梅肉丸、白散等ヲ用ヒテ、未ダ快吐下ヲ得ズ、惡心、腹痛シ、苦楚、悶亂スル者、

甘草湯ヲ用フルトキハ、則チ吐瀉俱ニ快ク、腹痛頓ニ安シ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桔梗湯 キキヤウタウ (傷寒論及金匱要略方)

桔梗四・〇 甘草八・〇

右二味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日二回)。

此方は、甘草湯の去加方にして、即ち其原方に、桔梗を加味せるものなり。

藥能

桔梗 (キキヤウ) の性能

藥徵に云く

『濁唾、腫膿ヲ主治スル也。旁ヲ咽喉ノ痛ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛溫、胸脇ノ痛、刀ニテ刺スガ如キヲ主ドリ、喉咽ノ痛ヲ療シ、痰ヲ消シ、癥瘕ヲ破リ、血ヲ養ヒ、膿ヲ排シ、竅ヲ利シ、嗽逆、口舌ニ瘡ヲ生ジ、赤目腫痛スルヲ治ス』と。

本方證

桔梗湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○咽痛し、甘草湯を與ふるも差えざる證。(少陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○欬して胸滿し、振寒して脈數、咽乾きて渴せず、時に濁唾の腥臭なるを出し、久久にして膿を吐する證。(肺痿肺癰欬上氣病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、粘痰、膿ノ如キ者、之ヲ主ドル』と。

本方の作用

此方は、桔梗、甘草の二味より成り、而して甘草は其量多く、桔梗は少量なり。即ち此方は、恰も甘草湯に加ふるに、更に桔梗を以てせるものゝ如し。故に類聚方廣義に云く

『甘草湯證ニシテ、腫膿有リ、或ハ粘痰ヲ吐スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、咽喉腫痛し、或は咳嗽し、咯痰粘稠にして、咯出困難なる症。

(二)、咽喉腫痛し、嚥下困難、或は聲音嘶啞等を現はす症。

醫聖方格に云く

『病人、咽痛スル者ハ、甘草湯ヲ與フ可シ。若シ差エズシテ、腫痛スル者ハ、桔梗湯ヲ與フ。若シ其人、懸膈ノ傍、腫レ起リ(即ち扁桃腺炎)、飲食入ルコト能ハズ、語言出デ難キ者ハ、急ニ當ニ之ヲ刺シ、少シク膿血ヲ去ルベシ、則チ頓ニ愈エン』と。

此説、前方及び本方運用上の参考と爲すべし。

乾薑人參半夏丸 カンキヤウニンジンハンゲグワン (金匱要略方)

乾薑 人參各三・〇 半夏六・〇

右三味を細末にし、生薑汁及び糊を以て丸と爲し、一回四・〇を服用す。

或は水煮し、生薑汁を合して服用するも、亦可なり(通常一日三回)。

此方は、小柴胡湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

生薑汁(シヤウキヤウジフ)の性能

古方藥品考に云く

『痰ヲ開キ、逆氣ヲ泄スノ功、最モ速カナリ』と。

又、古方藥議に云く

『冷ヲ去リ、痰ヲ除キ、胃ヲ開キ、一切ノ結實、胸膈ノ惡氣ヲ下シ、毒藥ヲ解ス』と。

本方證

乾薑人參半夏丸の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○妊娠、嘔吐止まざる證。(婦人妊娠病篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下痞鞭ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、乾薑以下の三味より成り、而して半夏は其量多く、乾薑、人參は少量にして、更に之に加ふるに、生薑汁の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『嘔吐止マズ、心下痞鞭スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、嘔吐頻發し、漸やく四肢に寒冷を覺ゆる等の症。

(二)、惡阻。

(三)、頑固なる嘔吐、及び惡阻等に在りては、伏龍肝の浸漬汁を以て、此方を煮服すれば效あり。

類聚方廣義に云く

『妊娠、惡阻殊ニ甚シク、湯藥ヲ服スルコト能ハザル者ハ、此方ヲ用ヒテ、徐徐ニ效ヲ收ムルヲ宜シト爲ス。大便不通ノ者ハ、大簇丸、黃鐘丸等ヲ間服ス。若シ虻(蛔蟲)ヲ兼ヌル者ハ、鷓胡菜丸ニ宜シ』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

大建中湯 ダイケンチュウタウ (金匱要略方)

蜀椒二・一 乾薑五・六 人參二・八

右三味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て八勺を取り、膠飴六四・〇を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

『一炊頃ニ如ビテ、粥二升ヲ飲ム可シ。(下略)』

此方は、小柴胡湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

蜀椒(シヨクセウ)の性能

古方藥品考に云く

『味辛、熱、芳烈ニシテ外發ノ力有リ。故ニ寒淫ヲ散ジ、胃中ヲ温メ、克ク虻蟲ヲ征スルノ能有リ。以テ大寒痛、食穀不和等ヲ療ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、中ヲ温メ、氣ヲ下シ、癥結ヲ破リ、胃ヲ開キ、腹中冷エテ痛ムヲ主ドル』と。

本方證

大建中湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○心胸中大寒痛し、嘔して飲食すること能はず、腹中寒え、上衝し、皮起り、出で見れ、頭足有りて上下し、痛みて觸れ近づく可らざる證。(腹滿寒疝宿食病篇)

なり。

本方の作用

此方は、蜀椒以下の三味より成り、而して乾薑は其量最も多く、人參之に次ぎ、蜀椒は最も少量にして、更に之に加ふるに、別に大量の膠飴を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『腹中大ニ痛ミ、嘔シテ飲食スルコト能ハズ、腹皮急リテ、頭足有ルガ如キ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『心胸中寒エテ痞シ、數バ痛ミテ嘔シ、飲食スルコト能ハズ、腹皮起リ出デ、頭足有ルヲ見スハ、大建中湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『胸腹滿チテ凝有リ。恰モ頭足有ルガ如ク、或ハ臍傍ニ塊物有リテ、手足有ルガ如ク、而シテ臍ノ上下ニ定所無ク、大ニ痛ム。頭足トハ、大小本末有ルヲ謂フ也。(下略)』と。

應用

(一)、劇烈なる腹痛等にして、殊に陽虛證に屬する者。

(二)、蛔蟲に因する腹痛等にして、熱性症候無き者。

(三)、腹部に虛滿を現はす等の症。

傷寒緒論に云く

『太陽病、重ネテ復タ汗ヲ發シ、陽虛シ、耳聾シ、而シテ又手シテ自カラ冒フ者ハ、慎ミテ小柴胡湯ヲ誤リ用フルコト勿レ。大建中湯ニ宜シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『小建中湯ハ、裏急シ、拘攣シ、急痛スルヲ治ス。此方ハ、寒飲升降シ、心服劇痛シ、嘔スルヲ治ス。故ニ疝瘕、腹中痛ム者ヲ治ス。又虵蟲ヲ挾ム者ヲ治ス』と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

柴胡桂枝湯 サイコケイシタウ (傷寒論及金匱要略方)

柴胡二・九 黃芩 人參 生薑 大棗 桂枝 芍藥各一・〇 甘草〇・七 半夏二・二

右九味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方、成本に在りては、柴胡加桂枝湯と名く。今、宋板及び金匱要略に従ふ。

此方は、小柴胡湯と桂枝湯との合方にして、即ち其桂枝湯に於ては、諸藥の半量を減じ、其小柴胡湯に於ては、柴胡、黄芩、人參、半夏の半量を減じ、而して甘草、生薑、大棗の重複藥を除けるものなり。

本方證

柴胡桂枝湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)發熱し、微惡寒し、支節煩疼し、微嘔し、心下支結して、外證未だ去らざる證。(太陽病下篇)。(二)汗を發すること多くして、亡陽し、譫語する證。(辨發汗後病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○心腹卒かに痛む證。(腹滿寒疝宿食病篇附方)なり。

本方の作用

此方は、柴胡以下の九味より成り、而して柴胡は其量最も多く、半夏之に次ぎ、黄芩、人參、生薑、大棗、桂枝、芍藥また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も小柴胡湯と、桂枝湯との二方を相合したるもの、如し。

故に方極に云く

『小柴胡湯ト桂枝湯ト、二方證相合スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『心下ニ物無ク、中脘ノ邊ニ凝有リ。此レ即チ支結也』と。

應用

(一)、熱性病、發汗劑を服して後、嘔氣ありて心悸亢進し、食欲減退し、頭痛、微惡寒等尙ほ解せざる症。

(二)、發熱し、汗出で、嘔氣あり、身體疼痛し、或は胸痛を覺ゆる症。

(三)、發汗劑を服して後、尙ほ發熱し、四肢煩疼し、汗出で、嘔し、或は頭痛し、或は惡寒し、脈浮なる症。

(四)、「マラリア」、及び其類症。

(五)、腸疝痛等にして、寒熱往來する症。

(六)、自汗、盜汗等ありて、其脈浮數なる症。

傷寒六書に云く

『陽明病、脈浮ニシテ緊ナルハ必ズ潮熱シ、發作、時有り。但ダ脈浮ナル者ハ、必ズ盜汗出ツ。柴胡桂枝湯ナリ』と。

又、證治準繩に云く

『瘧、身熱シテ汗多キヲ治ス』と。  
又、類聚方廣義に云く

『發汗、期ヲ失シ、胸脇滿チテ嘔シ、頭疼、身痛シ、往來寒熱シ、累日愈エズ、心下支撐シ、飲食進マザル者、或ハ汗下ノ後、病猶ホ解セズ、又敢テ加重セズ、但ダ熱氣纏繞シテ去ラズ、胸滿シ、微惡寒シ、嘔シテ食ヲ欲セズ、數日ヲ過ギテ、愈ユルガ如ク、愈エザルガ如キ者、間マ亦之レ有リ。當ニ其發熱ノ期ニ先ダチテ此方ヲ用ヒ、重覆シテ汗ヲ取ルベシ。

痲家、腰腹拘急シ、痛、胸脇ニ連ナリ、寒熱休作シ、心下痞硬シテ嘔スル者ヲ治ス。婦人、故無クシテ増寒、壯熱シ、頭痛、眩暈シ、心下支結シ、嘔吐、惡心シ、支體酸軟、或ハ瘧痺シ、鬱鬱トシテ人ニ對スルヲ惡ミ、或ハ頻頻トシテ欠伸スル者、俗ニ之ヲ血ノ道ト謂フ。此方ニ宜シ。或ハ兼テ瀉心湯ヲ服ス』と。此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

### 第六 橘皮湯類

此部門に於て説述する藥方は、橘皮湯及び其去加方、並に附方なり。

#### 橘皮湯 キツピタウ (金匱要略方)

橘皮四・〇 生薑八・〇

右二味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日二、三回)。

『咽ニ下レバ即チ愈ユ。』

#### 藥能

橘皮(キツビ)の性能

藥徵に云く

『吃逆ヲ主治スル也。旁ラ胸痺、停痰ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、逆氣ヲ主ドリ、嘔、欬ヲ止メ、痰涎ヲ消シ、胃ヲ開キ、水穀ヲ利シ、魚腥ノ毒ヲ解ス』と。

#### 本方證

橘皮湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○乾嘔し、噦し、若くは手足厥する證。(嘔吐噦下利病篇)なり。

#### 本方の作用

此方は、橘皮、生薑の二味より成り、而して生薑は其量多く、橘皮は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

「胸中痺シテ、嘔噦スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、胃部に停滯の感ありて、乾嘔を發する等の症。

(二)、吃逆等。

傷寒六書に云く

「痰逆シテ、惡寒スルヲ治ス」と。

又、聖濟總錄に云く

「霍亂ノ後、煩躁シ、臥シテ安ンゼザルヲ治ス」と。

此二説、共に本方運用上の参考と爲すべし。

橘皮竹筍湯 キツピチクジヨタウ (金匱要略方)

橘皮四・八 竹筍三・二 大棗一・六 生薑二・四 甘草一・四 人參〇・八

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方、原本に在りては、藥量と水率と相應せず。又他藥に比して、人參の用量甚だ少なし。今、方極附言の改むる所に従ふ。

此方は、橘皮湯の去加方にして、即ち其原方に、生薑を減量し、竹筍、大棗、甘草、人參を加味せるものなり。

藥能

竹筍(チクジヨ)の性能

古方藥品考に云く

「味淡ク苦クシテ、靖涼ナリ。故ニ能ク痰火、逆上ヲ降瀉ス」と。

又、古方藥議に云く

「味甘寒、嘔噦、寒熱、肺痿、唾血、傷寒ノ勞復ヲ主ドル」と。

本方證

橘皮竹筍湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○噦逆の證。(嘔吐噦下利病篇)

なり。

本方の作用

此方は、橘皮以下の六味より成り、而して橘皮は其量最も多く、竹筍之に次ぎ、生薑また之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、甘草また之に次ぎ、人參は最も少量なり。

即ち此方は、恰も橘皮湯中の生薑を減量し、更に之に加ふるに、竹筍、大棗、甘草、人參を以てせるもの

の如し。

故に類聚方廣義に云く

『胸中痺シ、嘔逆スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『嘔逆止マズ、食スルコト能ハズ、其人疲勞スルハ、橘皮竹筍湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『胸脹<sup>フ</sup>レテ、臍氣盡ク上行ス。故ニ吃逆ス』と。

應用

(一)、吃逆を發する諸症。

(二)、吃逆連綿として止まず、疲勞、衰弱漸やく加はれる者には、證に由り粳米、麥門冬を加ふ。

(三)、百日咳等には、證に由り半夏を加味す。

類聚方廣義に云く

『小兒ノ嘔乳、及ビ百日咳ニハ、此方ニ半夏ヲ加フレバ極メテ效有リ。腹症ニ隨ヒテ、紫圓、南呂丸ヲ兼用ス』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

橘皮枳實生薑湯

キツピキジツシヤウキヤウタウ

又橘枳薑湯

キツキキヤウタ

ウ (金匱要略方)

橘皮四・八 枳實二・四 生薑四・八

右三味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方、原本に在りては、橘皮の量多く、枳實の量稍や少なし。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、橘皮湯の去加方にして、即ち其原方に、生薑を減量し、枳實を加味せるものなり。

本方證

橘皮枳實生薑湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○胸中氣塞がり、短氣する證。(胸痺心痛短氣病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ嘔スルノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、橘皮以下の三味より成り、而して橘皮、生薑は其量多く、枳實は少量なり。



即ち此方は、恰も橘皮湯中の生薑を減量し、更に之に加ふるに、枳實を以てせるものゝ如し。故に方極に云く

『胸中痺シ、滿チテ、嘔スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『胸中氣塞ガリ、噦逆シ、或ハ嘔シ、心下堅キ者ハ、橘枳薑湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、食道狭窄、及び其類症。

(二)、吃逆頻發し、鎮止し難キ等の症。

類聚方集覽に云く

『吃逆ヲ主ドル。橘皮湯、橘皮竹茹湯モ亦皆同ジ。案ズルニ、當ニ心下痞鞭ノ證有ルベシ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

茯苓飲 ブクリヤウイン (金匱要略方)

茯苓 人參 白朮各二・四 枳實一・六 橘皮二・〇 生薑三・二

右六味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

『人ノ八九里ヲ行ク如リニシテ之ヲ進ム。』

此方は、橘皮湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

茯苓飲の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○心胸の中に、停痰、宿水有り、自から水を吐出し、後、心胸の間に虚氣滿ち、食すること能はざる證。

(痰飲欬嗽病篇附方)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下痞鞭ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、茯苓以下の六味より成り、而して生薑は其量最も多く、茯苓、人參、朮之に次ぎ、橘皮また之に次ぎ、枳實は最も少量なり。

即ち此方は、以上の六味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『心下痞鞭シテ悸シ、小便利セズ、胸滿シテ自カラ宿水ヲ吐スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、慢性の胃「カタル」及び其類症。
  - (二)、胃下垂症、及び其類症。
  - (三)、胃「アトニー」、及び其類症。
  - (四)、諸病、食欲減退し、漸やく衰弱加はらんとする等の症。
  - (五)、脚氣には、證に由り吳茱萸湯を合方す。
  - (六)、膽石には、證に因り、茵陳、或は半夏を加ふ。
- 類聚方廣義に云く

『胃反、吞酸、嘈噯等、心下痞硬シ、小便利セズ、或ハ心胸痛ム者ヲ治ス。又毎朝惡心シ、苦酸水或ハ痰沫ヲ吐スルヲ治ス。南呂丸、陷胸丸等ヲ兼用ス。老人、常ニ痰飲ニ苦シミ、心下痞滿シ、飲食消セズ、下利シ易キ者ヲ治ス。又小兒、乳食化セズ、吐下止マズ、并ニ百日咳、心下痞滿シ、咳逆甚シキ者ヲ治ス。俱ニ半夏ヲ加フレバ殊效有リ。若シ脇腹ニ癰塊有リ、或ハ大便難キ者ハ、紫圓ヲ兼用ス』と。

此說、本方運用上の參考と爲すべし。

橘皮大黃朴消湯 キツピダイワウボクセウタウ (金匱要略方)

橘皮二・四 大黃 朴消各四・八

右三味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

『即チ消ス。』

此方、原本に在りては方名無し。今、類聚方に従ふ。

此方は、橘皮湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

朴消(ボクセウ)の性能

古方藥品考に云く

『其味鹹クシテ微シク苦ク、性大寒ニシテ順降ナリ。故ニ能ク宿食ヲ消化シ、胃實ヲ瀉滌スルノ功尤モ速カナリ』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、寒熱、邪氣ヲ除キ、積聚、結固ヲ逐ヒ、能ク諸物ヲ消化ス。故ニ之ヲ消ト謂フ』と。

本方證

本方の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○なま鱸、之を食ひ、心胸の間に在りて化せず、吐すれども復た出でざる證。(禽獸魚蟲禁忌篇)なり。

本方の作用

此方は、橘皮以下の三味より成り、而して朴消、大黃は其量多く、橘皮は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『心胸ノ間ニ宿滯有リテ、結ボル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、種々の魚毒に因する蕁麻疹、或は癢痒を發する諸症。

(二)、諸般の魚中毒等。

(三)、鳥獸の肉類を食して消化せず、胃部停滯の感ありて苦悶する等の症。

類聚方廣義に云く

『飲食傷、吐下ノ後、心胸猶ホ爽快ナラズ、或ハ噎氣、吞酸スル者ヲ治ス。又痰飲家、心下、或ハ臍邊ニ塊有リ、平素飲食スル毎ニ痛ヲ作シ、或ハ吐食、吐飲シ、吐酸、嘈雜シ、大便難キ者ヲ治ス。(下略)』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

第七 括萋薤白白酒湯類

此部門に於て説述する藥方は、括萋薤白白酒湯及び其去加方、並に附方なり。

括萋薤白白酒湯 クワロウガイハクハクシユタウ (金匱要略方)

括萋實二・四 薤白九・六 白酒二合一勺 (今、尾臺榕堂氏に従ひ、水一合九勺に、米醋二勺を加へて、之に代ふ)

右三味、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

藥能

括萋實(クワロウジツ)の性能

藥徴に云く

『胸痺ヲ主治スル也。旁ラ痰飲ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦冷、胸痺ヲ主ドリ、心肺ヲ潤ホシ、咽喉ヲ利シ、胸膈ノ鬱熱ヲ去リ、痰結ヲ滌グ。嗽ヲ治スルノ要藥ト爲ス』と。

薤白(ガイハク)の性能

藥徴に云く

『心胸痛ミテ、喘息、咳唾スルヲ主治スル也。旁ラ背痛、心中ノ痞ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

「味辛温、中ヲ温メ、結ヲ散ジ、水氣ヲ去リ、久痢ヲ止メ、氣滯ヲ泄ス。心病ハ宜シク之ヲ食フベシ」と。  
米醋（ベイン）の性能

古方藥品考に云く

「其味酸、苦、收斂ニシテ、能ク下降ス。故ニ其力、毒氣ニ勝チ、瘡爛ヲ消ス」と。

又、古方藥議に云く

「味酸温、癰腫ヲ消シ、水氣ヲ散ジ、血運ヲ破リ、癥塊、堅積ヲ除キ、食ヲ消ス」と。

本方證

括萋薤白酒湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○胸痺、喘息、咳唾し、胸背痛み、短氣する證。（胸痺心痛短氣病篇）なり。

本方の作用

此方は、括萋實以下の三味より成り、而して白酒（今、米醋に代ふ）は其量最も多く、薤白之に次ぎ、括萋實は最も少量なり。

即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「胸中痺シテ胸背痛ミ、及ビ喘息、欬唾スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、狭心症、及び其類症。

(二)、心臓性喘息、及び其類症。

括萋薤白半夏湯　クワロウガイハクハンゲタウ　（金匱要略方）

括萋實二・四　薤白三・六　半夏七・二　白酒三合（前方に倣ひ、水二合七勺に、醋三勺を加ふ）

右四味、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、括萋薤白酒湯の去加方にして、即ち其原方に、薤白を減量し、白酒（米醋）を増量し、半夏を加味せるものなり。

本方證

括萋薤白半夏湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○胸痺、臥すことを得ず、心痛背に徹する證。（胸痺心痛短氣病篇）なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ嘔、或ハ胸腹鳴ルノ證有ルベシ」と。

本方の作用

此方は、括萋實以下の四味より成り、而して白酒（米醋）は其量最も多く、半夏之に次ぎ、薤白また之に次ぎ、括萋實は最も少量なり。

即ち此方は、恰も括萋薤白白酒湯中の薤白を減量し、白酒（米醋）を増量し、更に之に加ふるに、半夏を以てせるもの、如し。

故に類聚方廣義に云く

「括萋薤白白酒湯證ニシテ、嘔スル者ヲ治ス」と。

又、醫聖方格に云く

「喘欬シ、吐逆シテ臥スコトヲ得ズ、心痛背ニ徹スル者ハ、括萋薤白半夏湯之ヲ主ドル」と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、心臟神經痛、及び其類症。

(二)、狭心症、及び其類症。

(三)、心臟性喘息、及び其類症。

類聚方廣義に云く

「蛔痛（蛔蟲に因する腹痛）ニハ、間マニ方ノ症（前方及び本方）ニ疑似スル者有リ。然レドモニ方ニハ必ズ痰涎、短息ノ症有リ、且ツ痛必ズ背ニ徹ス。蛔痛ニハ必ズ清水或ハ白沫ヲ吐シ、或ハ惡心シ、或ハ痛ニ轉移有リ。此ヲ異レリト爲ス」と。

此説、宜しく前方及び本方運用上の參考と爲すべし。

枳實薤白桂枝湯 キジツガイハクケイシタウ（金匱要略方）

枳實 厚朴各二・八 薤白五・六 桂枝〇・七 括萋實一・四

右五味、水一合六勺を以て、先づ枳實、厚朴を煮て八勺を取り、後、餘藥を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、括萋薤白白酒湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

枳實薤白桂枝湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○胸痺、心中痞し、留氣結れて胸に在り、胸滿し、脇下より逆して心を搶く證。（胸痺心痛短氣病篇）なり。

本方の作用

此方は、枳實以下の五味より成り、而して薤白は其量最も多く、枳實、厚朴之に次ぎ、括萋實また之に次

ぎ、桂枝は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『胸中痺シ、滿チテ痛ミ、或ハ上衝スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『欬シテ痰飲ヲ唾シ、胸滿シ、脇下ヨリ逆シテ心ヲ捨キ、其人必ズ頭汗出ヅルハ、枳實薤白桂枝湯之ヲ主  
ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、心臟神經痛、及び其類症。

(二)、胃痙攣、及び其類症。

(三)、狭心症、及び其類症。

類聚方廣義に云く

『世ニ所謂痰勞トハ、咳嗽、胸滿シテ痛ミ、或ハ脇肋肩背攣痛シ、粘痰或ハ唾血スル者ナリ。此方ニ宜シ、  
當ニ胸滿、脇背攣痛ヲ以テ目的ト爲スベシ。南呂丸、或ハ姑洗丸ヲ兼用ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

小陷胸湯 セウカンキョウタウ (傷寒論方)

黄連二・四 半夏七・二 括蕒實三・二

右三味、水一合八勺を以て、先づ括蕒實を煮て九勺を取り、後、二味を入れ、再び煮て六勺を取り、一

回到温服す(通常一日三回)。

此方、原本に在りては黄連の分量少なし。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方、能く胸腹の結毒を陷下す。故に陷胸を以て方名と爲すと。

又、小と稱するは、其大陷胸湯に比して、作用緩和なるを以てなり。

此方は、括蕒薤白酒湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

小陷胸湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

○病、正に心下に在り、之を按すれば即ち痛み、脈浮滑なる證。(太陽病下篇)

なり。

本方の作用

此方は、黄連以下の三味より成り、而して半夏は其量最も多く、括蕒實之に次ぎ、黄連は最も少量なり。  
即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「病、正ニ心下ニ在リ、之ヲ按ズレバ痛ミ、心中煩シテ嘔シ、或ハ胸中痺スル者ヲ治ス」と。  
又、醫聖方格に云く

「所謂小結胸ハ、正ニ心下ニ在リ。之ヲ按ズレバ或ハ痛ミ、欬シテ涎沫ヲ唾シ、時ニ吐セント欲シ、心胸中煩シ、或ハ痛ム者ナリ。小陷胸湯之ヲ主ドル」と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

「心下ニ物有リ。之ヲ按ズレバ即チ痛ム」と。

應用

- (一)、心下軟くして胸膈痞滿し、或は發熱し、或は喘咳し、或は尿利減少し、其脈浮緩なる症。
- (二)、熱性症候著しからずして喘咳し、胸膈、及び心下部痞滿し、其脈浮なる症。
- (三)、熱候無くして心下部微痛し、喘咳して呼吸促迫し、尿利少なきも頻數なる症。
- (四)、胸痛ありて喘咳し、呼吸促迫して安穩ならず、其脈伏して緊なる症。
- (五)、小兒の吐乳症等。
- (六)、乾性肋膜炎等によりては、證に由り、本方に大小柴胡湯を合方す。

内臺方議に云く

「心下結痛シ、氣喘シテ悶ユル者ヲ治ス」と。

又、張氏醫通に云く

「凡ソ欬嗽シテ面赤ク、胸腹脇常ニ熱シ、惟ダ手足乍チニ涼ナル時有り、其脈洪ナル者ハ、熱痰膈上ニ在ル也。小陷胸湯ニ宜シ」と。

又、類聚方廣議に云く

「小兒ノ胸骨突起シ、龜胸ト稱スル者ヲ治ス。紫圓、或ハ南呂丸ヲ兼用ス」と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

第八 薏苡附子散類

此部門に於て説述する藥方は、薏苡附子散及び其去加方、並に附方なり。

薏苡附子散 ヨクイブシサン (金匱要略方)

薏苡仁八・八 附子三・二

右二味、混和、細末と爲し、水一合を以て、藥末二乃至四・〇を煮て六勺を取り、一回に服用す。

此方、原本に在りては、二味等分、散と爲して服す。今、方極附言の改むる所に従ふ。

本方證

薏苡附子散の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○胸痺、緩急（或は緩、或は急の謂）の證。（胸痺心痛短氣病篇）なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ惡寒、或ハ浮腫ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、薏苡仁、附子の二味より成り、而して薏苡仁は其量多く、附子は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『胸中痺シテ惡寒シ、及ビ浮腫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

此方は、實地上に應用せらるべき場合比較的稀なるも、之より出でたる去加方を解するに必要なり。

薏苡附子敗醬散

ヨクイブシハイシヤウサン（金匱要略方）

薏苡仁四・〇 敗醬二・〇 附子〇・八

右三味、混和、細末と爲し、水一合二勺を以て、藥末四・〇を煮て六勺を取り、溫服す。

『小便當ニ下ルベシ。』

此方は、薏苡附子散の去加方にして、即ち其原方に、附子を減量し、敗醬を加味せるものなり。

藥能

敗醬（ハイシヤウ）の性能

和漢三才圖會に云く

『氣味、微シク苦クシテ甘ヲ帶ブ。（中略）、善ク膿ヲ排シ、血（瘀血）ヲ破ル。（下略）』と。

又、古方藥品考に云く

『味甘ク、苦クシテ敗臭ヲ帶ブ。故ニ能ク水ヲ利シ、腫ヲ消シ、腸中ノ癰毒ヲ治ス』と。

本方證

薏苡附子敗醬散の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○腸癰、其身甲錯にして、腹皮急、之を按ずれば濡にして腫狀の如く、腹に積聚無く、身に熱無きも、脈

數なる證。（瘡癰腸癰浸淫病篇）

なり。

本方の作用

薏苡附子敗醬散



此方は、薏苡仁以下の三味より成り、而して薏苡仁は其量最も多く、敗醬之に次ぎ、附子は最も少量なり。

即ち此方は、恰も薏苡附子散中の附子を減量し、更に之に加ふるに、敗醬を以てせるものゝ如し。故に方極に云く

『身甲錯ニシテ、腹皮急、之ヲ按ズレバ濡ニシテ腫狀ノ如ク、腹ニ積聚無キ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、子宮内膜炎等にして、白帶下夥しく、其脈沈緊なる症。

(二)、蟲様突起炎(俗に所謂盲腸炎)にして、其慢性無熱の症、或は自潰排膿する等の症。

(三)、限局性鞏皮症等。

葦莖湯 キケイタウ (金匱要略方)

葦莖四・八 薏苡仁三・六 桃仁一・五 瓜瓣(今、尾臺榕堂氏に従ひ、冬瓜子を以て、之に代ふ)二・四

右四味、水三合を以て、先づ葦莖を煮て一合五勺を取り、後、餘藥を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に服用す。

『再服スレバ當ニ膿ノ如キヲ吐スベシ。』

此方は、薏苡附子散の附方と見做すべきものなり。

藥能

葦莖(キケイ)の性能

古方藥品考に云く

『性順降ナリ。故ニ能ク肺氣ヲ清フシ、水滿ヲ瀉ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘寒、霍亂、嘔逆、肺癰、煩熱、癰疽ヲ主ドル』と。

冬瓜子(トウグワシ)の性能

古方藥品考に云く

『味淡甘ニシテ滑降、故ニ能ク潤行ヲ致シ、以テ大小便ヲ通利ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、腹内ノ結聚ヲ主ドリ、膿血ヲ破潰ス。最モ腸胃脾内壅ノ要藥ト爲ス』と。

本方證

葦莖湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○欬して微熱有り、煩滿し、胸中甲錯(胸部の鞏化感を謂ふ)の證。(肺痿肺癰欬上氣病篇附方)

なり。

本方の作用

此方は、葦莖以下の四味より成り、而して葦莖は其量最も多く、薏苡仁之に次ぎ、瓜瓣（冬瓜子）また之に次ぎ、桃仁は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『腥臭ヲ歎睡シ、微熱有リテ煩滿シ、胸上甲錯ナルヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、腐敗性氣管枝炎、及び其類症。

(二)、輕症肺膿瘍、及び其類症。

(三)、輕症肺壞疽、及び其類症。

(四)、咯血等。

類聚方廣義に云く、

『當ニ膿血、臭痰ヲ吐スルヲ以テ目的ト爲スベシ。然レドモ多日多服ニ非ズンバ、其效ヲ見難シ。且ツ七日、十日毎ニ白散或ハ梅肉丸三五分ヲ用ヒテ、吐下ヲ取ルヲ佳ト爲ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

第九 瀉心湯類

此部門に於て説述する藥方は、瀉心湯及び其去加方、並に附方なり。

瀉心湯 シヤシントウ (金匱要略方)

大黃四・八 黃芩 黃連各二・四

右三味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

此方、能く心下の痞を瀉去す。故に之を瀉心湯と名くと。

本方證

瀉心湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

(一)、心氣不足(吉益 洞氏等は、千金に據て、不足を不定に改む)にして、吐血、衄血する證。(驚悸吐衄下血胸滿瘀血病篇)。(二)醫、反つて之を下し、心下即ち痞する證。(婦人雜病篇)なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量多く、黃芩、黃連は少量なり。即ち此方は、以上の

三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。  
故に方極に云く

『心氣不定、心下痞シ、之ヲ按ズルニ濡ナル者ヲ治ス』と。  
又、醫聖方格に云く

『吐血、衄血、諸血症ニシテ、其人心中痞鞭シ、鬱鬱トシテ熱煩シ、大便鞭ク、劇シキ者ハ舌黄ニシテ、  
面目赤シ。瀉心湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、腦充血、及び其類症。
- (二)、腦溢血、及び其類症にして、脈浮大、數なる症。
- (三)、吐血、衄血、及び爾餘の出血諸症にして、心煩し、安靜ならざる症。
- (四)、驚悸、或は發狂等の症。
- (五)、齒痛、或は齒齦腫痛を發し、顔面潮紅せる等の症。
- (六)、口内炎。
- (七)、打撲、或は爾餘の外傷に因する眩暈、或は失神等にして、顔面潮紅を呈する症。
- (八)、痔疾の疼痛、或は出血等。

(九)、火傷後の發熱等。

(十)、宿醉。

(十一)、熱性黃疸には、證に由り茵陳を加ふ。

(十二)、若し吐血止み難き者には、證に由り犀角を加ふ。

外臺秘要に云く

『黃疸、身體、面目皆黄ナルヲ療ス』と。

又、醫林集要に云く

『欬逆シテ、大便軟利スル者ヲ治ス』と。

又、名醫方考に云く

『心膈實熱シ、狂躁シテ面赤キ者ヲ治ス』と。

又、痘瘡寶筏に云く

『痘瘡ニハ、胃實シ、聲啞スル者有リ。必ズ口渴シ、熱盛ニシテ、大便秘結シ、其瘡起發ヲ欠ク。三黃湯  
(即ち本方)ニ宜シ。又大便秘結シ、脹悶シ、痘發スルコト齊シカラズ、並ニ起長セズ、形色赤紫ナルハ  
三黃湯ヲ用ヒテ、以テ之ヲ通ズレバ、則チ痘起リ易ク、而シテ色、順ニ轉ズ』と。  
又、類聚方廣義に云く

『中風(腦溢血の類)、卒倒シテ人事ヲ省ミズ、身熱シ、牙關緊急シ、脈洪大ニシテ、或ハ鼾睡、大息シ、

頻頻トシテ欠伸スル者、及ビ省後ノ偏枯（半身不隨）、癱瘓不遂、緘默不語、或ハ口眼喎斜シ、言語蹇澁シ、流涎、泣笑シ、或ハ神思恍惚、機轉木偶人ノ如キ者ハ、此方ニ宜シ。能ク宿醒ヲ解ス。甚ダ妙ナリ。

酒客、鬱熱シ、下血スル者、腸痔、腫痛シ、下血スル者、痘瘡、熱氣熾盛ニシテ、七孔出血スル者、産前  
後、血量、鬱冒シ、或ハ狂ノ如キ者、眼目焮痛シ、赤脈怒張シ、面熱シテ醉ヘルガ如キ者、齟齬疼痛シ、  
齒縫出血シ、口舌腐爛シ、唇風、走馬疔（水瘡の類）、喉痺、焮熱、腫痛シ、重舌、痰胞、語言スルコト能  
ハザル者、此二證ハ、鉞針ヲ以テ横割シ、惡血ヲ去リ、瘀液ヲ取ルヲ佳ト爲ス。  
癰疔内攻シ、胸膈冤熱シ、心氣恍惚タル者、發狂、眼光熒熒トシテ、倨傲、妄語シ、晝夜牀ニ就カザル者、  
以上ノ諸症ニシテ、心下ノ痞、心中煩悸ノ症有ルヤ、瀉心湯ヲ用フレバ、其效響クガ如シ」と。  
此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

### 大黃黃連瀉心湯 ダイワウワウレンシヤシンタウ（傷寒論方）

大黃六・四 黃連三・二

右二味を一包と爲し、沸湯六勺を以て之を漬し、須臾にして絞り、一回に溫服す（通常一日二回）。  
此方は、瀉心湯の去加方にして、即ち其原方中、黃芩を去れるものなり。

#### 本方證

大黃黃連瀉心湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば  
（一）心下痞し、之を按ずれば濡、其脈浮なる證。（太陽病下篇）。（二）大に下して後、復た發汗し、心下痞し、  
其表解せる證。（同上）  
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心悸ノ證有ルベシ』と。

#### 本方の作用

此方は、大黃、黃連の二味より成り、而して大黃は其量多く、黃連は少量なり。  
即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心中煩悸シ、心下痞シ、之ヲ按ズレバ濡ナル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『心下痞鞭シ、之ヲ按ズレバ痛ミ、其人心煩シ、或ハ面目赤ク、大便鞭キ者ハ、大黃黃連瀉心湯之ヲ主ト  
ル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

- (一)、胸部に鬱塞の感ありて煩悶し、便秘の傾向ありて逆上し、其脈浮なる症。
  - (二)、腦充血等にて暈倒し、省後尙ほ未だ神思明瞭ならず、心悸亢進ありて、脈浮大なる症。
  - (三)、顔面潮紅するも、四肢微しく厥冷し、心下部痞滿し、脈浮なる症。
  - (四)、精神鬱塞し、沈黙して人に對するを厭ひ、兩便秘澁の傾向あり、其脈浮なる症。
- 類聚方廣義に云く

『此方ニ甘草ヲ加ヘテ、甘連大黃湯ト名ク。小兒生下セバ、之ヲ與ヘテ以テ胸腹ノ汚穢ヲ吐下ス可シ。若シ血色黯濁ナル者ハ、更ニ紅花ヲ加フ。若シ酷毒壅閉シ、吐下スルヲ得ザル者ニ至リテハ、紫圓ヲ與フ可シ。驚風、直視、上竄シ、口噤、搐搦シ、虛里跳動スル者、及ビ疳疾、胸滿シ、心下痞シ、不食或ハ吐食シ、或ハ好ンデ生米、炭、土等ヲ食ヒ、痞癰シテ痛ヲ作ス者、又驚口、白爛、重舌、木舌、弄舌ヲ治ス。並ニ梔子、麩皮ヲ加フ。疳眼、雲翳ヲ生ジ、或ハ赤脈縱橫、或ハ白眼ニ青色ヲ見ハシ、羞明シテ日ヲ怕ル、者、癩家、鬱鬱トシテ顧忌多ク、毎夜睡ラズ、臆中跳動シ、心下痞シ、急迫スル者、以上ハ皆甘連大黃湯ニ宜シ』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

附子瀉心湯 プシシヤシントウ (傷寒論方)

大黃四〇 黃連 黃芩各二〇 附子二〇 (注意を要す)

右四味、先づ沸湯六勺を以て三味を漬し、須臾にして絞り、別に水六勺を以て、附子を煮て二勺を取り、之を合して一回に温服す(通常一日二回)。

此方、原本に在りては、附子の煮法詳かならず。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

此方は、瀉心湯の去加方にして、即ち其原方に、附子を加味せるものなり。

本方證

附子瀉心湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○心下痞して、復つて惡寒し、汗出づる證。(太陽病下篇)なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の四味より成り、而して大黃は其量多く、黃連、黃芩、附子は少量なり。即ち此方は、恰も瀉心湯に加ふるに、更に附子を以てせるもの、如し。故に方極に云く

『瀉心湯證ニシテ、惡寒スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、心下部に閉塞の感ありて、精神鬱憂し、食思起らず、四肢に冷感ありて、脈浮弱なる症。

(二)、脈浮弱にして、心下痞鞭し、便秘の傾向あり、通身熱狀なくして唯だ惡寒し、時々脱汗を現はす症。  
(三)、半身不隨等にして、嗜眠の傾向あり、或は手足微冷なる症。  
類聚方廣義に云く

『老人ノ停食ニシテ、昏悶、暈倒シ、人事ヲ省ミズ、心下滿チ、四肢厥冷シ、面ニ血色無ク、額上冷汗アリ、脈伏シテ絶スルガ如ク、其狀中風(腦溢血)ニ髣髴スル者ハ、之ヲ食鬱、食厥ト稱ス。附子瀉心湯ニ宜シ』と。  
此說、本方運用上の參考と爲すべし。

### 黃連阿膠湯 ワウレンアケウタウ (傷寒論方)

黃連四・八 黃芩一・二 芍藥二・四 鷄子黃(卵黃)一個の三分一 阿膠三・六

右五味、水一合五勺を以て、先づ三味を煮て六勺を取り、後、阿膠を入れ溶解し、少しく冷えて卵黃を入れ、攪和して一回に服用す(通常一日三回)。

此方、宋板に在りては、黃芩の量稍や多し。今、成本に従ふ。

此方は、瀉心湯の附方と見做すべきものなり。

#### 藥能

鷄子黃(ケイシワウ)の性能

古方藥品考に云く

『其味甘クシテ厚シ。故ニ能ク虚損ヲ補フ』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、心ヲ鎮メ、血ヲ補ヒ、咽ヲ清フシ、音ヲ開キ、熱ヲ散ジ、驚ヲ定<sup>ヤス</sup>ンジ、嗽ヲ止メ、利ヲ止ム』と。

#### 本方證

黃連阿膠湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○心中煩して臥すことを得ざる證。(少陰病篇)なり。

#### 本方の作用

此方は、黃連以下の五味より成り、而して鷄子黃は其量最も多く、黃連之に次ぎ、阿膠また之に次ぎ、芍藥また之に次ぎ、黃芩は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心中悸シテ煩シ、臥スコトヲ得ザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陽病、發熱シ、心中煩シテ安臥スルヲ得ズ、或ハ腹痛シ、或ハ便血スル者ハ、黃連阿膠湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑録に云く

「心下煩悶シテ志氣尤モ安ンゼズ、吐血ニ此證多シ」と。

應用

(一)、下痢の後、水分缺損し、心煩して安靜ならず、脈微にして浮なる症。

(二)、疲勞ありて煩熱し、心下部滿悶を覺え、安臥するを得ず、脈數急なる症。

(三)、濕疹等にして、諸種の治療に抵抗し、瘙癢、煩熱に堪へざる症。

類聚方集覽に云く

「淋家、心煩シテ小便利セザル者ヲ治ス」と。

又、類聚方廣義に云く

「久痢、腹中熱痛シ、心中煩シテ眠ルコトヲ得ズ、或ハ膿血ヲ便スル者ヲ治ス。

痘瘡内陷シ、熱氣熾盛ニシテ、咽燥、口渴シ、心悸シ、煩躁シ、清血(下血の意)スル者ヲ治ス。

諸失血ノ症、胸悸、身熱シ、腹痛、微利シ、舌乾キ、唇燥キ、煩悶シテ寐ヌルコト能ハズ、身體困憊シ、

面ニ血色無ク、或ハ面熱シ、潮紅スル者ヲ治ス」と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

葛根黃連黃芩湯 カツコンワウレンワウゴントウ (傷寒論方)

葛根六・四 甘草一・六 黃連二・四 黃芩二・四

右四味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日二回)。

此方、成本に在りては、黃芩の分量少なし。今、宋板に従ふ。

此方は、瀉心湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

葛根黃連黃芩湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○桂枝湯の證、反つて之を下し、利遂に止まず、脈促、喘して汗出づる證。(太陽病中篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ項背強急、心悸ノ證有ルベシ」と。

本方の作用

此方は、葛根以下の四味より成り、而して葛根は其量最も多く、黃連、黃芩之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『項背強急シ、心中悸シテ痞シ、下利スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、下痢性疾患にして、裏急後重あり、熱性症候盛にして、心下部滿悶し、汗出で、脈浮數なる症。
  - (二)、微熱ありて下痢頻發し、心下部閉塞の感あり、或は疼痛する症。
  - (三)、身熱劇しくして心煩し、或は暴瀉數行、其脈浮數なる症。
  - (四)、發汗の後、病解せず、下痢、日に十餘行、心下部痞滿し、汗出で、脈浮數なる症。
  - (五)、宿醉等。
  - (六)、火傷後の發熱等。
  - (七)、艾灸後の發熱等。
  - (八)、丹毒、及び其類症。
  - (九)、口内炎等。
- 保嬰撮要に云く  
 『疹後、身熱除カザルヲ治ス』と。  
 又、醫聖方格に云く

『陽病、發熱シ、項背強リ、鬱鬱トシテ心煩シ、或ハ下利後重スル者ハ、葛根黃連黃芩湯ニ宜シ』と。  
又、類聚方廣義に云く

『平日項背強急シ、心胸痞塞シ、神思悒鬱ニシテ舒暢セザル者ヲ治ス。或ハ大黃ヲ加フ。  
項背強急シ、心下痞塞シ、胸中冤熱シテ、眼目、牙齒疼痛シ、或ハ口舌腫痛、腐爛スル者ニ、大黃ヲ加フ  
レバ其效速カナリ』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

第十 白頭翁湯類

此部門に於て説述する藥方は、白頭翁湯及び其去加方なり。

白頭翁湯 ハクトウヲウタウ (傷寒論及金匱要略方)

白頭翁三〇 黃連 黃蘗 秦皮各三〇

右四味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す。

『愈エズンバ更ニ一升(即ち一回分)ヲ服ス。』

此方、傷寒論に在りては、白頭翁の分量少なし。今、金匱要略に従ふ。

藥能

第十 白頭翁湯類



白頭翁（ハクトウウ）の性能  
藥徴に云く

『熱利、下重ヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味苦温、血ヲ逐ヒ、痛ヲ止メ、毒痢ヲ療ス』と。

黄蘗（ワウバク）の性能

古方藥品考に云く

『氣味極メテ苦クシテ、寒降ナリ。以テ皮間ノ鬱熱、黄疽ヲ治シ、二腸中ノ結熱ヲ除ク』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、結熱、黄疽ヲ主ドリ、洩痢ヲ止メ、虻ノ心痛、鼻洪、腸風、瀉血ヲ治ス』と。

秦皮（ジンビ）の性能

古方藥品考に云く

『味苦寒ニシテ收瀉ナリ。故ニ其能、滑瀉ヲ固有シ、腸間ノ結熱ヲ除ク』と。

又、古方藥議に云く

『味苦、微寒、風寒、濕痺ヲ主ドリ。熱ヲ除キ、目ヲ明カニシ、熱利、下重ヲ治ス』と。

本方證

白頭翁湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)熱利(熱性下痢)、下重(後重)する證。(厥陰病篇)。(二)下利して水を飲まんと欲する證。(同上)なり。

又、金匱要略に於けるものは

○熱利、下重する證。(嘔吐臑下利病篇。此證傷寒論に同じ)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心悸ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、白頭翁以下の四味より成り、而して其分量は皆同一なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心中悸シ、熱シテ利シ、下重シ、或ハ渴シテ水ヲ飲マント欲スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『下利、後重シ、水ヲ飲マント欲シテ煩シ、小便赤クシテ能ク利スルハ、白頭翁湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱發あるも、渴甚しからず、心煩し、精神稍や明瞭を缺き、下痢頻數なる症。
  - (二)、身體に微熱あり、腹滿して痛み、尿利減少し、大便澁痢する症。
  - (三)、赤痢様下痢にして、腹痛し、脈微浮にして、渴する症。
  - (四)、熱稍や去ると雖も、食慾漸次減退し、大便澁痢し、脈尙ほ數なる症。
  - (五)、赤痢、及び其類症にして、裏急後重殊に甚しき者には、證に由り大黃を加味す。
- 類聚方廣義に云く

『熱痢下重シ、渴シテ水ヲ飲マント欲シ、心悸シ、腹痛スル者ハ、此方ノ主治也。

眼目鬱熱シ、赤腫、陣痛シ、風涙止マザル者ヲ治ス。又洗蒸劑ト爲スモ、亦效有リ』と。

此說、本方運用上の参考と爲すべし。

白頭翁加甘草阿膠湯 ハクトウヲウカカンザウアケウタウ (金匱要略方)

白頭翁一・六 黃連 黃蘗 秦皮各二・四 甘草 阿膠各一・六

右六味、水一合七勺を以て、先づ五味を煮て六勺を取り、後、阿膠を入れ、溶解せしめ、一回に溫服す

(通常一日三回)。

此方は、白頭翁湯の去加方にして、即ち其原方に、白頭翁を減量し、甘草、阿膠を加味せるものなり。

本方證

白頭翁加甘草阿膠湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○産後の下利、虚極の證。(婦人産後病篇)  
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、産後ト曰フト雖モ、唯ダ産後ノミヲ言フニ非ズ。當ニ血證ヲ以テ準ト爲スベシ。又按ズルニ、當ニ急迫ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、白頭翁以下の六味より成り、而して黄連、黄蘗、秦皮は其量多く、白頭翁、甘草、阿膠は少量なり。

即ち此方は、恰も白頭翁湯中の白頭翁を減量し、更に之に加ふるに、甘草、阿膠を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『白頭翁湯證ニシテ、便血シ、急迫スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、下痢性疾患にして、心煩し、安臥するを得ざる症。

- (二)、赤痢、及び其類症にして、腹痛殊に甚しく、或は漸やく疲憊に就かんとする症。
- (三)、重症赤痢、及び其類症にして、腹痛、粘液血便等甚しく、日數を重ぬるも治癒に赴かざる症。
- (四)、産後の下痢性疾患等。

類聚方廣義に云く

『痔疾、肛中焮熱、疼痛シ、或ハ便血スル者、若クハ大便燥結スル者ハ、大黃ヲ加フ。産後、下痢、腹痛シ、荏苒トシテ已エズ、羸瘦シ、食セズ、心悸シ、身熱シ、唇口乾燥シ、便血シ、急迫シ、或ハ惡露猶ホ止マザル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

### 第十一 梔子湯類

此部門に於て説述する藥方は、梔子鼓湯及び其去加方、並に附方なり。

#### 梔子鼓湯 シシシタウ (傷寒論及金匱要略方)

梔子三・二 香鼓八・〇

右二味、水一合六勺を以て、先づ梔子を煮て一合を取り、後、香鼓を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す。

『吐ヲ得ル者ハ、(下略)』

#### 藥能

梔子(シシ)の性能

藥徵に云く

『心煩ヲ主治スル也。旁ラ發黃ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、胸心大小腸ノ大熱、心中ノ煩悶ヲ療シ、小便ヲ通ジ、五種ノ黃病ヲ解シ、大病、勞復ヲ起スヲ治ス』ト。

香鼓(カウシ)の性能

藥徵に云く

『心中ノ懊懣ヲ主治スル也。旁ラ心中ノ結痛、及ビ心中滿チテ煩スルヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、煩躁、滿悶ヲ主ドリ、氣ヲ下シ、中ヲ調へ、毒藥ニ中ルヲ治シ、並ニ犬咬ヲ治ス』と。

#### 本方證

梔子鼓湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)發汗吐下の後、虚煩して眠ることを得ず、若し劇しければ反覆顛倒(輾轉反側の意)し、心中懊懣す

る證。(太陽病中篇)。(二)發汗し、若くは下して、煩熱し、胸中窒<sup>ふさ</sup>がる證。(同上)。(三)大に下して後、身熱去らず、心中結痛する證。(同上)。(四)之を下して、胃中空虛に、客氣膈に動じ、心中懊憹し、舌上胎ある證。(陽明病篇)。(五)之を下し、結胸せず、心中懊憹し、餓えて食すること能はず、但だ頭に汗出づる證。(同上)。(六)下利の後、更に煩し、之を按じて心下濡<sup>な</sup>なる證。(厥陰病篇)なり。

又、金匱要略に於けるものは

○下利の後、更に煩し、之を按じて心下濡なる證(嘔吐噦下利病篇。此證傷寒論に同じ)なり。

### 本方の作用

此方は、梔子、香豉の二味より成り、而して香豉は其量多く、梔子は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心中熱シテ、懊憹スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

尾臺榕堂氏曰く

『此方ハ、梔子、香豉ノ二味ノミ。然レドモ之ヲ其症ニ施セバ、其效響クガ如シ。親カラ之ヲ病者ニ試ミ

ルニ非ズンバ、焉<sup>いづ</sup>ゾ能ク其功ヲ知ランヤ』と。

### 腹證

腹診配劑錄に云く

『心中苦煩シテ眠ルコトヲ得ズ、或ハ心下痞滿シテ痛ム。然レドモ之ヲ按ズレバ力無シ。(下略)』と。

### 應用

(一)、汗下の後、腹虛滿し、脈微浮にして心煩あり、二便に異常なき症。

(二)、汗下の後、尙ほ微熱あり、脈緩にして數<sup>かず</sup>、胸中滿悶を覺ゆる症。

(三)、氣鬱して煩悶し、食を欲せず、其脈弦細なる症。

(四)、熱性症候無く、胸部支痛して煩悶し、其脈遲なる症。

(五)、睡眠し難く、或は睡眠すれば夢多く、飢<sup>う</sup>ゆと雖も、然かも食味無く、漸やく疲勞に陥らんとする症。

(六)、下後、腹部軟弱となれるも、微熱去らず、呼吸促迫し、心煩、苦惱し、其脈弦にして遲なる症。

肘後百一方に云く

『霍亂、吐下ノ後、心腹煩滿スルヲ治ス』と。

又、類聚方集覽に云く

『大病差<sup>い</sup>エテ後、食シ<sup>フ</sup>已ツテ胸中微煩シ、昏沈スル者、之ヲ主ドル』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

梔子甘草鼓湯 シシカンザウシタウ (傷寒論方)

梔子 甘草各三・二 香鼓八・〇

右三味、水一合六勺を以て、先づ梔子、甘草を煮て一合を取り、後、香鼓を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す。

『吐ヲ得ル者ハ、(下略)。』

此方は、梔子鼓湯の去加方にして、即ち其原方に、甘草を加味せるものなり。

本方證

梔子甘草鼓湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○發汗吐下の後、虚煩し、眠るを得ずして、少氣(氣息微少の貌)する證。(太陽病中篇)なり。

本方の作用

此方は、梔子以下の三味より成り、而して香鼓は其量多く、梔子、甘草は少量なり。即ち此方は、恰も梔子鼓湯に加ふるに、更に甘草を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『梔子鼓湯證ニシテ、急迫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、胸中鬱悶し、呼吸促迫し、時に緩急あり、二便に異常なく、其脈微緩なる症。

(二)、汗下の後、脈緩弱にして胸中に苦惱あり、飢ゆと雖も、食欲起らず、腹軟弱にして時に痛む症。

梔子生薑鼓湯 シシシャウキヤウシタウ (傷寒論方)

梔子二・六 香鼓 生薑各六・〇

右三味、水一合六勺を以て、先づ梔子、生薑を煮て一合を取り、後、香鼓を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す。

『吐ヲ得ル者ハ、(下略)。』

此方は、梔子鼓湯の去加方にして、即ち其原方に、生薑を加味せるものなり。

本方證

梔子生薑鼓湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○發汗吐下の後、虚煩し、眠るを得ずして、嘔する證。(太陽病中篇)なり。

本方の作用

此方は、梔子以下の三味より成り、而して香鼓、生薑は其量多く、梔子は少量なり。即ち此方は、恰も梔子鼓湯に加ふるに、更に生薑を以てせるもの、如し。故に方極附言に云く

『梔子鼓湯證ニシテ、嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、汗下の後、微熱未だ去らず、或は悪心し、或は乾嘔を發する症。

(二)、熱性症候なくして、脈緩弱、胸痛みて背部に徹し、或は悪心し、或は嘔吐する症。

醫聖方格に云く

『虚煩シテ眠ルコトヲ得ズ、若シ劇シキ者ハ、必ズ反覆轉倒シ、心中懊懣ス。梔子鼓湯之ヲ主ドル。若シ微煩シテ止マズ、更ニ少氣スル者ハ、梔子甘草鼓湯之ヲ主ドル。若シ嘔スル者ハ、梔子生薑鼓湯之ヲ主ドル』と。

此説、宜しく三方運用上の参考と爲すべし。

枳實梔子鼓湯 キジツシシシタウ (傷寒論方)

枳實二・四 梔子一・六 香鼓九・六

右三味、醋二勺、水二合を以て、空煮して一合二勺と爲し、先づ二味を入れ、煮て六勺を取り、後、香鼓を入れ、五六沸して一回に服用す(通常一日二回)。

『覆フテ微似汗ヲ取ル。(下略)』

此方、原本に在りては、清漿水を以て藥味を煮る。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

此方は、梔子鼓湯の去加方にして、即ち其原方に、香鼓を増量し、枳實、清漿水(今、米醋を以て之に代ふ)を加味せるものなり。

本方證

枳實梔子鼓湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○大病差えて後、勞復(辛勞に因て再發するの意)する證。(陰陽易差後勞復病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心中懊懣、胸滿ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、枳實以下の三味より成り、而して香鼓は其量最も多く、枳實之に次ぎ、梔子は最も少量にして、更に之に加ふるに、清漿水(米醋)の多量を以てす。

即ち此方は、恰も梔子鼓湯中の香鼓を増量し、更に之に加ふるに、枳實、米醋を以てせるもの、如し。

故に類聚方廣義に云く

『梔子豉湯證ニシテ、胸滿スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、心下堅ク、之ヲ按ジテ痛マズ、而シテ心中懊懣スル者ハ、枳實梔子豉湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、汗下の後、胸部及び心下部に鬱塞を感じて煩悶し、嘔せず、渴せず、便通稍や澁滯の傾向ある症。若し便閉するものは、證に由り大黃を加ふ。

(二)、胸部に閉塞の感ありて煩悶し、便通整順ならず、其脈遅なる症。

若し便秘するものは、また證に由り大黃を加ふ。

(三)、虚羸にして、鬱熱の状あり、心下痞し、或は痛み、嘔せず、渴せず、便通澁滯し、其脈浮沈定まらざる症。

若し便秘せば、また證に由り大黃を加味す。

類聚方廣義に云く

『凡ソ大病新ニ差<sup>イ</sup>ニ、血氣未ダ復セザルニ方リ、勞動、飲啖度ニ過グルトキハ、則チ或ハ心胸滿悶ヲ作シ、或ハ煩熱ヲ作ス。此方ヲ與ヘテ、將養スレバ則チ愈ユ。若シ大便通ゼズ、宿食有ル者ハ、枳實梔子大黃豉

湯ニ宜シ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

梔子乾薑湯 シシカンキヤウタウ (傷寒論方)

梔子 乾薑各六・〇

右二味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す。

『吐ヲ得ル者ハ、(下略)』

此方は、梔子豉湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

梔子乾薑湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○傷寒、大に下し、身熱去らず、微煩する證。(太陽病中篇)なり。

尾臺榕堂氏曰く

『當ニ乾嘔ノ症有ルベシ。微煩モ亦虚煩ノミ』と。

本方の作用

此方は、梔子、乾薑の二味より成り、而して其分量は同一なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。故に方極に云く

『心中微煩スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、下利シ、身熱去ラズ、微煩シ、或ハ嘔スル者ハ、梔子乾薑湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、微熱あるも其脈弱、心煩し、或は胸部微痛し、大便滑痢し、尿利澁滯し、食慾に異常なき症。
- (二)、心煩ありて眠るを得ず、尿利減少し、時に嘔し、其脈緩弱なる症。
- (三)、四肢に熱感あり、胸部に鬱塞の感あり、尿利減少し、食思なく、脈浮虚なる症。
- (四)、吐瀉の後、尙ほ熱感あり、唯だ腹中のみ寒冷を覺え、身體倦怠にして頭重く、其脈緩弱なる症。
- (五)、汗下の後、熱感尙ほ去らず、心煩ありて脈浮弱なる症。

茵陳蒿湯 インチンカウタウ

又茵陳湯 インチンタウ (寒傷論及金匱要略方)

茵陳蒿七・二 梔子二・四 大黃二・四

右三味、水二合を以て、先づ茵陳を煮て一合二勺を取り、後、二味を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『小便當ニ利スベシ。尿、皂角汁ノ狀ノ如ク、色正ニ赤シ。一宿ニシテ腹減ズ。黃、小便ヨリ去ル也。』此方は、梔子鼓湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

茵陳蒿湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)頭に汗出で、身に汗無く、小便利せず、渴して水漿を飲み、瘵熱、裏に在りて身に黃を發する證。(陽明病篇)。(二)身黃<sup>は</sup>み 梔子の色の如く、小便利せず、腹微滿する證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

○寒熱して食せず、食すれば即ち頭眩し、心胸安からず、久久にして黃を發する證。(黃疸病篇)なり。

本方の作用

此方は、茵陳蒿以下の三味より成り、而して茵陳蒿は其量多く、梔子、大黃は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。故に類聚方廣義に云く

『一身發黃シ、心煩シ、大便難ク、小便不利ノ者ヲ治ス』と。



此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱性症候劇しからず、腹滿あるも能く食し、尿赤澁にして糞便軟く、汗なくして煩悶する症。
- (二)、汗下の後、寒性症候なく、腹滿ありて糞便黒く、時々蒜臭を自覺し、煩悶し、然かも反つて能く食する症。
- (三)、發汗の後、腹滿し、譫語し、或は時に狂狀を發し、尿不利、大便難、其脈微にして沈なる症。
- (四)、黃疸等にして、少しく腹滿ある症。

大黃消石湯 ダイワウセウセキタウ (金匱要略方)

大黃 黃藥 消石各三・二 梔子二・〇

右四味、水一合二勺を以て、先づ三味を煮て六勺を取り、後、消石を入れ、溶解せしめて頓服す。

此方、原本に在りては、消石を滑石に作る。今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方は、梔子鼓湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

消石(セウセキ)の性能

古方藥品考に云く

『其味苦辛ニシテ性寒降、故ニ能ク積熱ニ勝チ、胃中ノ結實ヲ降瀉シ、以テ腹間ノ結熱、腹滿、堅塊等ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味寒鹹、邪氣ヲ除キ、小便ヲ利シ、血(瘀血)ヲ破リ、堅結ヲ破散シ、黃疸ヲ治ス』と。

本方證

大黃消石湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○黃疸、腹滿し、小便利せずして赤く、自汗出づる證。(黃疸病篇)なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の四味より成り、而して大黃、黃藥、消石は其量多く、梔子は少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『發黃シ、小便利セズ、腹中ニ塊有ル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、黃疸等にして、裏實、腹滿の證あり、尿不利にして色赤く、便秘する症。

(二)、血尿等にして、脈數なる症。  
醫聖方格に云く

『黃疸、腹滿シ、二便利セズ、發熱シ、自汗出デ、起臥安カラザル者ハ、當ニ之ヲ下スベシ。大黃消石湯ニ宜シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『嘈囉、胸中煎熬シ、腹滿シテ塊有リ、二便利セズ、或ハ口中ニ苦辛酸鹹等ノ味ヲ覺ユル者ヲ治ス。此症、後必ズ膈噎ト成ラン。早ク此方ヲ用ヒテ、以テ之ヲ防グ可シ』と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 梔子蘘皮湯 シシバクヒタウ (傷寒論方)

梔子四・八 甘草二・〇 黃蘗四・〇

右三味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方は、梔子鼓湯の附方と見做すべきものなり。

#### 本方證

梔子蘘皮湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○身黃<sup>きは</sup>み、發熱する證。(陽明病篇)

なり。

#### 本方の作用

此方は、梔子以下の三味より成り、而して梔子は其量最も多く、黃蘗之に次ぎ、甘草は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『一身黃<sup>きは</sup>ミ、發熱シ、心煩スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『熱病、身黃ミ、發熱シ、微煩スル者ハ、梔子蘘皮湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、發汗の後、微熱尙ほ去らず、胸中鬱塞の感ありて煩悶し、頭のみ汗出で、尿黄色を呈する症。

(二)、黃疸等にして、發熱し、煩悶する症。

(三)、蒸々として發熱し、衄血を發する症。

證治準繩に云く

『小兒ノ衄血ヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

「眼球黃赤、熱痛甚シキヲ洗ヘバ、效有リ。又胞臉糜爛、痒痛シ、及ビ痘瘡落痂以後、眼猶ホ開カザル者ニハ、枯礬少許ヲ加ヘテ之ヲ洗フ。皆妙ナリ」と。  
此二説、本方運用上の參考と爲すべし。

### 梔子厚朴湯 シシコウボクタウ (傷寒論方)

梔子二・四 厚朴四・八 枳實四・八

右三味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す。

『吐ヲ得ル者ハ、(下略)。』

此方は、梔子豉湯の附方と見做すべきものなり。

#### 本方證

梔子厚朴湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○傷寒、下して後、心煩、腹滿し、臥起安からざる證。(太陽病中篇)なり。

尾臺榕堂氏曰く

「心煩ハ、當ニ虚煩ト做シテ看ルベシ。腹滿モ亦實滿ニ非ズ」と。

#### 本方の作用

此方は、梔子以下の三味より成り、而して厚朴、枳實は其量多く、梔子は少量なり。

即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『胸腹煩滿スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『熱病、心下堅ク、腹微滿シ、煩シテ起臥安カラザル者ハ、梔子厚朴湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、熱性症候劇しからずして心煩あり、頭のみ汗出で、腹滿し、食慾なく、輾轉反側する症。

(二)、脈浮、胸腹微滿して心煩し、腹部の按擦を好む症。

(三)、胸中閉塞の感あり、或は痛み、腹滿あるも、時々増減あり、脈候に著變なき症。

### 第十二 大陷胸丸類

此部門に於て説述する藥方は、大陷胸丸、及び其附方なり。

### 大陷胸丸 ダイカンキョウグワン (傷寒論方)

大黃三二・〇 葶藶 杏仁各二四・〇 消石四〇・〇 甘遂二四・〇

右五味、細末にし、鍊蜜を以て丸と爲し、瓶中に蓄へ置き、用に臨み、白湯を以て約四・〇を頓服す。若し病重きものは、更に増量して六・〇に至る。

此方、原本に在りては、其用法煩雜なり。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

藥能

葶藶(テイレキ)の性能

藥徴に云く

『水病ヲ主治スル也。旁ラ肺癰、結胸ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛寒、癥瘕、積聚、結氣、飲食、寒熱ヲ主ドリ、堅ヲ破リ、邪ヲ逐ヒ、水道ヲ通利シ、喘急ヲ止ム』と。

甘遂(カンズキ)の性能

藥徴に云く

『利水ヲ主ドル也。旁ラ掣痛、咳煩、短氣、小便難、心下滿ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、大腹ノ疝瘕、腹滿、面目浮腫、留飲、宿食、癥堅、積聚ヲ主ドリ、水穀道ヲ利ス』と。

本方證

大陷胸丸の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○結胸(病邪胸中に結ばれ、一種の心下鞭滿を發する證)にして、項も亦強<sup>こほ</sup>ばる證。(太陽病下篇)なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の五味より成り、而して消石は其量最も多く、大黃之に次ぎ、葶藶、杏仁、甘遂は最も少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『結胸ニシテ、項背強<sup>コボ</sup>ル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、濕性肋膜炎等にして、頗ぶる強實、毫も虚狀なき症。

(二)、脚氣衝心等にして、強實なる症。

總て本方は、極めて強實なる者に非ざれば、輕しく投與するを得ざるなり。

醫宗金鑑に云く

「水腫、腸澀ノ初起、形氣俱ニ實ナルヲ治ス。(下略)」と。  
又、醫聖方格に云く

「所謂結胸ハ、病、胸中ニ結ボレ、氣塞ガリ、短氣シ、胸高ク起リ、項モ亦強<sup>コバ</sup>バリ、仰イデ俛スコト能ハズ、瘰ノ狀ノ如ク、欬逆、喘鳴シ、其人舌黃焦ニシテ、心下鞭滿シ、手モ近ヅク可ラザル者ナリ。之ヲ下セバ則チ和ス。大陷胸丸ニ宜シ」と。

又、類聚方廣義に云く

「痰飲、疝瘕、心胸痞塞、結痛シ、痛、項背臂膊ニ連ナル者ヲ治ス。或ハ湯藥其宜シキニ隨ヒ、此方ヲ以テ兼用ト爲スモ、亦良シ」と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 葶藶大棗瀉肺湯 テイレキタイサウシャハイタウ (金匱要略方)

葶藶二・〇 大棗一・一・〇

右二味、水一合八勺を以て、先づ大棗を煮て一合二勺を取り、後、葶藶を入れ、再び煮て六勺を取り、頓服す。

類聚方廣義に云く

「葶藶ニハ、甜苦ノ二種有リ。苦キ者ヲ良シト爲ス。炒リテ用フ。油氣ノ發スルヲ以テ度ト爲ス(下略)」

と。

此方は、大陷胸丸の附方と見做すべきものなり。

#### 本方證

葶藶大棗瀉肺湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

(一)肺癰、喘して臥すことを得ざる證。(肺痿肺癰欬嗽上氣病篇)。(二)肺癰、胸滿脹し、一身面目浮腫し、鼻塞がり、清涕出で、香臭酸辛を聞かず、欬逆上氣し、喘鳴迫塞する證。(同上)。(三)支飲、息するを得ざる證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

#### 本方の作用

此方は、葶藶、大棗の二味より成り、而して大棗は其量多く、葶藶は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

「浮腫、咳逆シ、喘鳴迫塞シ、胸滿、強急スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、腐敗性氣管枝炎、及び其類症にして、喘咳甚しく、爲めに安眠するを得ざる等の症。

(二)、氣管枝炎、及び其類症にして、特に胸滿の感甚だしき等の症。  
聖濟總錄に云く

「傷寒ノ後、上氣シテ喘<sup>ゲ</sup>兪シク、身面腫レ、小便澁ルヲ治ス」と。

又、類聚方集覽に云く

「水氣心胸ニ聚マリ、而シテ腹中空虛ニ、喘咳シテ臥スコトヲ得ザル者ハ、之ヲ主ドル」と。

又、類聚方廣義に云く

「肺癰云云ノ二症ニ、此方ヲ用フルハ、其膿未ダ成ラザルニ乗ジテ、之ヲ奪フ者也。若シ發熱、惡寒、煩渴等ノ症有ル者ハ、當ニ越婢加半夏湯、麻杏甘石湯、麻杏薤甘湯、大青龍湯等ヲ撰ビ用フベシ。兼テ十棗湯ヲ服シ、時ニ紫圓、白散等ヲ以テ、之ヲ攻ムレバ治スルヲ得ン」と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

### 已椒蘆黃丸 イセウレキワウグワン (金匱要略方)

防已 椒目 葶蘆 大黃各八・〇

右四味、細末にし、蜜にて丸と爲し、白湯を以て、一回約四・〇を服用す(通常一日三回)。

「稍ヤク増ス。(下略)。」

此方は、大陷胸丸の附方と見做すべきものなり。

### 藥能

防已(パウイ)の性能

藥徵に云く

「水ヲ治スルコトヲ主ドル也」と。

又、古方藥議に云く

「味辛平、邪ヲ除キ、大小便ヲ利シ、腠理ヲ通ジ、癰腫、惡結ヲ散ジ、脚氣ヲ洩シ、血中ノ濕熱ヲ瀉ス。

風水氣ヲ療スルノ要藥ナリ」と。

椒目(セウモク)の性能

和漢三才圖會に云く

「苦寒、小便ヲ利シ、十二種ノ水腫、脹滿、及ビ腎虛ノ耳鳴、聾ヲ治ス」と。

又、古方藥品考に云く

「下降ニシテ、水ヲ腸中ニ利ス」と。

### 本方證

已椒蘆黃丸の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○腹滿し、口舌乾燥する證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

本方の作用

此方は、防已以下の四味より成り、而して其分量は皆同一にして、更に之に加ふるに、蜂蜜の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸薬互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『腹滿シ、口舌乾燥シ、二便澁滯スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『腹滿シテ喘シ、或ハ浮腫シ、腸間ニ凝滯有リ、而シテ舌黄ナル者ハ、已椒藶黄丸之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、水腫性脚氣、及び其類症。

(二)、腎炎等。

(三)、腹水等には、證に因り、芒消を加味す。

第十三 大陷胸湯類

此部門に於て説述する薬方は、大陷胸湯及び其變方、並に附方なり。

大陷胸湯 ダイカンキョウタウ (傷寒論方)

大棗六・四 芒消四・〇 甘遂一・二

右三味、水一合八勺を以て、先づ大黃を煮て六勺を取り、後、芒消を入れ、溶解せしめ、更に甘遂末を入れて頓服す。

『快利ヲ得バ、後服ヲ止ム。』

此方、原本に在りては、芒消の分量特に多し。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

薬能

芒消 (パウセウ) の性能

薬徴に云く

『堅ヲ軟グルコトヲ主ドル也。故ニ能ク心下ノ痞堅、心下ノ石鞭、小腹ノ急結、結胸、燥屎、大便鞭ヲ治シ、而シテ旁ヲ宿食、腹滿、小腹ノ腫痞等、諸般ノ解シ難キ毒ヲ治スル也』と。

又、古方薬議に云く

『味辛苦ニシテ大寒、五臓ノ積聚、久熱、胃閉ヲ主ドリ、邪氣ヲ除キ、留血ヲ破リ、大小便ヲ利ス』と。

本方證

大陷胸湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一) 結胸、膈内拒<sup>たが</sup>ひ痛み、胃中空虚に、客氣膈に動じ、短氣(呼吸短促)、躁煩し、心中懊惱し、陽氣内に陥り、心下因て鞭<sup>たが</sup>き證。(太陽病下篇)。(二) 結胸、熱實し、脈沈にして緊、心下痛み、之を按じて石のごとく鞭<sup>たが</sup>き證。(同上)。(三) 但だ結胸して大熱無く、頭のみ微汗出づる證。(同上)。(四) 太陽病、重ねて汗を發し、而して復つて之を下し、不大便五六日、舌上燥きて渴し、日晡所(午後四時の頃) 少しく潮熱有り、心下より少腹に至るまで鞭<sup>たが</sup>滿して痛み、近づく可らざる證。(同上)。(五) 心下滿ちて鞭<sup>たが</sup>痛する證。(同上) なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量最も多く、芒消之に次ぎ、甘遂は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『結毒、胸ニ在リ、心下ヨリ小腹ニ至ルマデ鞭<sup>たが</sup>滿シテ痛ミ、近ヅク可ラザル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『心下ヨリ小腹ニ至ルマデ、石ノ如クニ鞭<sup>たが</sup>滿シテ痛ミ、手ヲ近ヅク可ラザル也。(下略)』と。

應用

- (一)、熱性病、時に少しく寒熱あり、或は嘔吐を發し、或は呼吸促迫し、脇胸痛ありて脈沈なる症。
- (二)、少しく熱發あり、口舌乾燥して渴し、胸中滿悶を覺え、心下部鞭<sup>たが</sup>痛して堪へ難く、其脈伏して緊なる症。
- (三)、胸痛あり、時々發熱して口渴し、其脈弦なる症。
- (四)、少しく喘咳あり、吸氣に因て胸痛を覺え、口舌乾燥するも、甚しく水を欲せず、其脈澁にして緊なる症。
- (五)、發汗の後、舌黄色に變じ、胸中滿悶し、或は痛み、食慾減退し、尿利頻數、發熱甚しからざる症。
- (六)、脚氣等にして、強實の症。

類聚方廣義に云く

『肩背強急シ、言語スルコト能ハズ、忽然死セントスル者ハ、俗ニ早打肩<sup>ハヤウチカサ</sup>ト稱ス。急ニ鉞針ヲ以テ放血シ、此方ヲ與ヘテ峻瀉ヲ取ラバ、以テ一生ヲ九死ニ回ス可シ。』

脚氣冲心(衝心の意)、心下石ノゴトク鞭<sup>たが</sup>ク、胸中大ニ煩シ、肩背強急シ、短氣ニシテ息スルヲ得ザル者、産後ノ血量、及ビ小兒ノ急驚風、胸滿シ、心下石ノゴトク鞭<sup>たが</sup>ク、咽喉ニ痰潮シ、直視、癩<sup>癩</sup>シ、胸動、奔馬ノ如キ者、真心痛、心下鞭<sup>たが</sup>滿シ、苦悶シテ死セント欲スル者、以上ノ諸症ハ、治法神速、方劑駿快ニ非ズンバ、救フコト能ハズ、此方ニ宜シ。是レ摧堅應變ノ兵ナリ。用フル者ノ能ク其肯綮ヲ得テ、樞機ヲ執ルニ在ルノミ』と。



此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 大黃甘遂湯 ダイワウカンズキタウ (金匱要略方)

大黃五・六 甘遂(注意を要す) 阿膠各二・八

右三味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

『其血當ニ下ルベシ。』

此方は、大陷胸湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

大黃甘遂湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○婦人、少腹滿つること敦(古の食器)狀の如く、小便微難にして、渴せざる證。(婦人雜病篇)なり。

#### 本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量多く、甘遂、阿膠は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『小腹滿ルコト敦狀ノ如ク、小便微難ニシテ、或ハ經水調ハザル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

- (一)、婦人、産後に於て、下腹部膨滿シ、疼痛を覺え、或は四肢に微腫を現はす症。
- (二)、月經異常ありて、下腹部膨滿シ、手足に微腫ありて、尿利減少する症。
- (三)、諸種の尿閉にして、他の利尿劑を用ひて效なき症に、此方能く奏效することあり。

類聚方廣義に云く

『按ズルニ、大黃甘遂湯ト、抵當湯(後出)トハ、皆小腹滿ル者ヲ主ドル。而シテ抵當湯ノ症ハ、鞭滿シテ小便自利ス。此方ノ症ハ、小腹膨滿スルモ、而モ甚シク鞭カラズ、小便微難ナリ。斯レ以テ瘀血ト、水血結滯トノ異ルヲ見ル可シ。』

此方ハ、特リ産後ノミナラズ、凡ソ經水不調、男女ノ癱閉(尿閉)ニシテ、小腹滿痛スル者、淋毒ノ沈滯、微淋(悪性淋の意)、小腹滿痛シテ忍ブ可ラズ、膿血ヲ洩スル者ハ、皆能ク之ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 甘遂半夏湯 カンズキハンゲタウ (金匱要略方)

甘遂〇・八 半夏四・八 芍藥四・〇 甘草二・〇

右四味、水一合六勺を以て、煮て四勺を取り、蜜四勺を入れ、再び煮て六勺を取り、頓服す。

此方は、大陷胸湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

甘遂半夏湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○病者、脈伏し、其人自利せんと欲し、利すれば反つて快く、利すと雖も心下續いて堅滿なる證。(痰飲欬嗽病篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、芍藥甘草湯加減ノ方也。故ニ當ニ攣急ノ證有ルベシ』と。

又、雉問子炳氏曰く

『按ズルニ、當ニ嘔ノ症有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、甘遂以下の四味より成り、而して半夏は其量最も多く、芍藥之に次ぎ、甘草また之に次ぎ、甘遂は最も少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜の多量を以てす。

即ち此方は、恰も芍藥甘草湯中の甘草を減量し、更に之に加ふるに、甘遂、半夏、蜂蜜を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『芍藥甘草湯證ニシテ、心下鞭滿シ、或ハ嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

尾臺榕堂氏曰く

『此方ノ妙ハ蜜ヲ用フルニ在リ。故ニ若シ蜜ヲ用ヒザルトキハ、則チ特リ效ヲ得ザルノミナラズ、瞑眩インケン(此瞑眩は中毒の謂)シテ變ヲ生ズル者有リ。宜シク古法ヲ遵守スベシ』と。

應用

(一)、水腫性脚氣等にして、強實なる症。

(二)、脚氣衝心等にして、氣急息迫、喘鳴し、脈實なる症。

(三)、腹水等にして、脈緊實なる症。

類聚方廣義に云く

『飲家、心下滿痛シ、嘔吐セント欲シ、或ハ胸腹攣痛スル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

第十四 腎氣丸類

此部門に於て説述する藥方は、腎氣丸及び其附方なり。

腎氣丸 ジンキグワン 又八味丸 ハチミグワン 又八味腎氣丸 ハチミジンキグワン (金匱要略方)

乾地黄四・〇 山茱萸 薯蕷各二・〇 澤瀉 茯苓 牡丹皮各一・五 桂枝 附子各〇・五  
右八味、細末にし、煉蜜を以て丸と爲し、一回二或は三・〇を酒にて服用す(通常一日二回)。

藥能

乾地黄(カンヂワウ)の性能

古方藥品考に云く

『主トシテ血ヲ滋シ、虚ヲ補フ』と。

又、古方藥議に云く

『味甘寒、寒熱、積聚ヲ除キ、痺ヲ除キ、大小腸ヲ利シ、血脈ヲ通ジ、驚悸、勞劣、吐血、鼻衄、婦人ノ崩中、血運ヲ治ス』と。

山茱萸(サンシユユ)の性能

古方藥品考に云く

『其味酸澆、微温ニシテ、質ハ滋潤ナリ。故ニ能ク肝氣ヲ温メ、腎氣ヲ固有シ、以テ小便ノ頻數、及ビ腰痛等ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味酸平、中ヲ温ムルコトヲ主ドリ、寒濕痺ヲ逐ヒ、腰膝ヲ暖メ、水道ヲ助ケ、小便ノ利、及ビ老人ノ尿節ナラザルヲ止メ、耳鳴、頭風ヲ療ス』と。

薯蕷(ジョヨ)の性能

古方藥品考に云く

『味甘温ニシテ、滑澤ナリ。故ニ元氣ヲ調へ、精ヲ益シ、虚損ヲ補復スルノ能有リ』と。

又、古方藥議に云く

『味甘寒、寒熱、邪氣ヲ除キ、腰痛、洩痢ヲ止メ、痰涎ヲ化シ、虚勞、羸瘦ヲ主ドル』と。

本方證

腎氣丸の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

(一)脚氣上り入り、小腹不仁なる證。(中風歴節病篇附方)。(二)虚勞、腰痛し、小腹拘急し、小便不利の證。(血痺虚勞病篇)。(三)短氣(呼吸短促)にして微飲(停水)ある證。(痰飲欬嗽病篇)。(四)消渴、小便すること反つて多き證。(消渴小便淋病篇)。(五)胞系了戾(輸尿系捻戾の謂)するが故に溺するを得ざる證。(婦人雜病篇)なり。

本方の作用

此方は、乾地黄以下の八味より成り、而して乾地黄は其量最も多く、山茱萸、薯蕷之に次ぎ、澤瀉、茯苓、牡丹皮また之に次ぎ、桂枝、附子は最も少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜、及び清酒の若干量を以てす。即ち此方は、以上の諸薬互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『臍下不仁ニシテ、小便利セザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『少腹不仁ニシテ小便難ク、必ズ大便微溏シ、或ハ身體麻痺シ、或ハ腰脚疼ミ、或ハ虚腫シ、其人舌和シ、喜ンデ衣被ヲ厚ウスル者ヲ治ス』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

### 腹證

腹診配劑錄に云く

『臍下拘急シテ、之ヲ撫スルモ知ラズ。此レ所謂不仁也』と。

### 應用

- (一)、腰神經痛、及び其類症にして、下腹部拘急し、尿利減少する者。
- (二)、妊婦の尿閉症等。
- (三)、尿閉等にして、脚部特に寒冷を覺ゆる症。

(四)、糖尿病、及び尿崩症等にして、其脈微なる者。

(五)、諸種の貧血性疾患にして、脈微弱、尿濁を呈する症。

(六)、輕症脚氣等にして、下腹部軟弱、麻痺特に著しき症。

(七)、遺精等にして、下肢に冷感あり、手掌に煩熱を覺ゆる症。

(八)、小兒の遺尿症等にして、下肢寒冷なる者。

證治大還に云く

『陰痿シテ振ハザルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『此ニ脚氣上リ入り、小腹不仁ト云フハ、其初、脚部麻痺シ、或ハ痿弱、微腫シ、小便利セザル等ノ症、遂ニ小腹不仁ト作ル者ニシテ、本ト險症ニ非ズ、故ニ治モ亦難カラザル也。若シ腹中ニ瘵毒充滿シ、單イテ四支ニ及ビ、遂ニ水氣ヲ見ハス者ニ至ツテハ、小腹不仁、小便利等ノ症有リト雖モ、此方ノ能ク功ヲ立ツル所ニ非ザル也。急ニ大承氣湯ヲ與ヘテ、以テ之ヲ下ス可シ。若シ疑殆シテ決セズ、姑息ノ治ヲ爲ストキハ、則チ短氣、煩躁シ、衝心シテ死セン(下略)。

産後ノ水腫、腰脚冷痛シ、小腹不仁ニシテ、小便利セザル者ヲ治ス。水煮シテ服ス。

淋家、小便晝夜ニ數十行、便シ了レバ微痛シ、居常、便心(尿意)斷エズ、或ハ屙ニ上ラント欲スレバ則チ已ニ遺シ、咽乾、口渴スル者ハ、氣淋ト稱ス。老夫婦人ニ斯症多シ。此方ニ宜シ。又陰痿、及び白濁症、

小腹不仁ニシテ力無ク、腰脚酸軟、或ハ痺痛シ、小便頻數ナル者ヲ治ス。婦人ノ白沃（即ち白帶下）甚シキ者モ、亦此方ニ宜シ」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 括萋瞿麥丸 クワロウクバクダワン (金匱要略方)

括萋根二・〇 茯苓 薯蕷各三・〇 附子 瞿麥各一・〇

右五味、細末にし、煉蜜を以て丸と爲し、一回二・〇を服用す（通常一日三回）。

『小便利シ、腹中温マルヲ以テ、知ルト爲ス。』

此方は、腎氣丸の附方と見做すべきものなり。

#### 藥能

瞿麥（クバク）の性能

古方藥品考に云く

『其味微苦、微辛、能ク尿道ヲシテ通瀉セシメ、膀胱ノ濕邪ヲ逐ヒ、以テ小便ノ不利、及ビ淋瀝等ヲ治ス』

又、藥性提要に云く

『苦寒、小腸ヲ利シ、膀胱ノ邪熱ヲ逐ヒ、淋ヲ治ス』と。

#### 本方證

括萋瞿麥丸の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○小便不利、水氣有り、若くは渴する證。（消渴小便利淋病篇）

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下悸ノ證有ルベシ』と。

#### 本方の作用

此方は、括萋根以下の五味より成り、而して茯苓、薯蕷は其量最も多く、括萋根之に次ぎ、附子、瞿麥は最も少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『心下悸シ、小便利セズ、惡寒シテ渴スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、輕症脚氣等にして、下肢に冷感あり、口中乾燥するも、敢て水を欲せず、尿利減少し、微しく心悸亢進を覺ゆる症。

(二)、産後の脚氣等。

### 第十五 防已湯類

此部門に於て説述する藥方は、木防已湯及び其去加方、並に附方なり。

#### 木防已湯 モクバウイタウ (金匱要略方)

木防已二・四 石膏六・四 桂枝一・六 人參三・二

右四味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

#### 本方證

木防已湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○ 膈間の支飲にして、喘滿し、心下痞堅、面色黧黑、其脈沈緊なる證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ煩渴ノ證有ルベシ』と。

#### 本方の作用

此方は、木防已以下の四味より成り、而して石膏は其量最も多く、人參之に次ぎ、木防已また之に次ぎ、

桂枝は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『水腫、心下痞鞭シ、煩渴シテ上衝スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、心臟瓣膜病等。

(二)、心臟瓣膜病に因る代償機障碍(證に由り、茯苓四・〇を加ふ)。

(三)、水腫性諸疾患。

(四)、脚氣等。

(五)、心臟性喘息、及び其類症。

(六)、氣管枝喘息には、證に由り桑白皮、蘇子、生薑を加味す。

類聚方廣義に云く

『水病、喘滿シ、心下痞堅、上氣シテ渴スル者ヲ治ス。陷胸丸、或ハ難竇丸ヲ兼用ス。喘滿ノ症無キ者ハ

效少ナシ。學者驗ミヨ』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

### 木防已去石膏加茯苓芒消湯 モウバウイキヨセキカウカブクリヤウバウセウタウ

(金匱要略方)

木防已二・四 桂枝一・六 人參 茯苓各三・二 芒消四・八

右五味、水一合八勺を以て、先づ四味を煮て六勺を取り、後、芒消を入れ、溶解せしめて一回に服用す  
(通常一日二回)。

此方は、木防已湯の去加方にして、即ち其原方に、木防已を減量し、石膏を去り、茯苓、芒消を加味せるものなり。

今、類聚方に従ひて、木防已を減量せず。

#### 本方證

木防已去石膏加茯苓芒消湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○膈間の支飲、喘滿し、心下痞堅、面色黧黑、其脈沈緊にして、實なる證。(痰飲欬嗽病篇)  
なり。

#### 本方の作用

此方は、木防已以下の五味より成り、而して芒消は其量最も多く、人參、茯苓之に次ぎ、木防已また之に次ぎ、桂枝は最も少量なり。

即ち此方は、恰も木防已湯中の石膏を去り、更に之に加ふるに、茯苓、芒消を以てせるものゝ如し。故に方極附言に云く

『木防已湯證ニシテ、痞鞭劇シク、煩渴セザル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

- (一)、心臟瓣膜病に因る代償機障礙等にして、脈緊實なる症。
- (二)、水腫性諸疾患にして、實證に屬する者。
- (三)、脚氣等にして、脈實なる症。
- (四)、喘息等にして、心下部堅く、便秘して脈緊實なる症。
- (五)、尿閉症等。

類聚方廣義に云く

『脚氣、一身、面目浮腫シ、心下石ノゴトク鞭ク、喘滿、氣急シ、咽燥口渴シ、二便利セズ、胸動甚シキ者ヲ治ス。鐵砂煉、陷胸丸、難賓丸等ヲ兼用ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 防已茯苓湯 バウイブクリヤウタウ (金匱要略方)

防已 黃耆 桂枝各二・四 茯苓四・八 甘草一・六

右五味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す（通常一日三回）。此方は、木防已湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

防已茯苓湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○皮水、四肢腫れ、水氣皮膚中に在り、四肢<sup>せぶく</sup><sub>（微動の貌）</sub>として動く證。（水氣病篇）なり。

本方の作用

此方は、防已以下の五味より成り、而して茯苓は其量最も多く、防已、黃耆、桂枝之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『四肢腫レ、聾聾トシテ動キ、上衝スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『水病、四肢腫レ、水氣皮膚中ニ在リ、四肢聾聾トシテ動ク者ハ、防已茯苓湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、脚氣等にして、四肢に微腫あり、脚部に冷感あり、其脈浮弱なる症。

(二)、諸種の貧血性疾患にして、顔面、四肢に微腫を呈する症。

醫聖方格に云く

『此湯、又陰病にして微腫し、身疼重シ、或ハ麻痺スル者ヲ治ス（下略）』と。

又、類聚方廣義に云く

『宜シク症ニ隨ヒテ、朮、附ヲ加フベシ』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

防已黃耆湯 バウイワウギタウ (金匱要略方)

防已二・四 黃耆三・〇 甘草一・二 朮 生薑 大棗各一・八

右六味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す（通常一日三回）。

此方、原本に在りては、其用法煩雜なり。今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方は、木防已湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

防已黃耆湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば



(一)風溼、脈浮にして、身重く、汗出で、惡風する證。(瘧濕腸病篇並に水氣病篇。水氣病篇には、風濕を風水に作る)。(二)風水、脈浮、或は頭に汗出で、表に他病無く、但だ下重く、腰より以上は和し、(調和せるの意)、腰以下は腫れて陰に及び、以て屈伸し難き證。(水氣病篇附方)なり。

本方の作用

此方は、防已以下の六味より成り、而して黃耆は其量最も多く、防已之に次ぎ、朮、生薑、大棗また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の六味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『水病、身重ク、汗出デ、惡風シ、小便不利ノ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『身體疼重シ、汗出デ、微腫シテ惡風シ、小便少キ者ハ、防已黃耆湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、諸般の貧血性疾患にして、利尿減少し、下肢に微腫あり、其脈弱なる症。

(二)、神経痛、及び其類症にして、發汗し易く、或は微腫を現はし、或は四肢に冷感あり、其脈細弱なる症。

類聚方廣義に云く

『防已茯苓湯ハ、專ラ肌表ニ水有ル者ヲ主ドリ、此方ハ、表裏ニ水有ル者ヲ治ス。故ニ防已、黃耆ハ、皆防已茯苓湯ヨリ多シ。風毒腫、附骨疽、穿踝疽、稠膿已ニ歇ミ、稀膿止マズ、或ハ痛ミ、或ハ痛マズ、身體瘦削シ、或ハ浮腫ヲ見ハス者ヲ治ス。若シ惡寒シ、或ハ下利シ、盜汗アル者ハ、更ニ附子ヲ加フルヲ佳ト爲ス。伯州、應鐘、七寶等ヲ兼用ス。凡ソ附骨疽、久シク治セズ、或ハ治シテ復タ發スル者ハ、毒ノ根蒂除カザルヲ以テ也。此ノ若キ者ハ、宜シク瘡口ヲ翻開シ、抉剔シテ以テ病根ヲ除キ盡スベシ。治セザル者無シ』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

第十六 抵當湯類

此部門に於て説述する藥方は、抵當湯及び其變方、並に附方なり。

抵當湯 テイタウタウ (傷寒論及金匱要略方)

水蛭 蠪蟲 桃仁各一・六 大黃四・八

右四味を一包と爲し、水一合を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

『下ラズンバ再ビ服ス。』

此方、直ちに其當に攻むべきの所に抵る。故に之を抵當湯と名くと。

藥能

水蛭（スキシツ）の性能

藥徴に云く

『血證ヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味鹹平、瘀血、月閉ヲ逐フコトヲ主ドリ、血積、積聚ヲ破ル』と。

蠱蟲（パウチュウ）の性能

藥徴續篇に云く

『瘀血、少腹鞭滿ヲ主治シ、兼テ發狂、瘀熱、喜忘、及ビ婦人ノ經水不利ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、瘀血ヲ逐フコトヲ主ドリ、積聚、堅痞、癥瘕、寒熱ヲ破リ、血脈、及ビ九竅ヲ通利シ、賊血ノ胸腹、五臟ニ在ル者ヲ除ク』と。

本方證

抵當湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一) 脈微にして沈、狂を發し、少腹鞭滿し、小便自利する證。(太陽病中篇)。(二) 身黃<sup>きは</sup>み、脈沈結にして

少腹鞭く、小便自利し、狂の如き證。(同上)。(三) 喜忘(即ち健忘の類)し、尿鞭しと雖も、大便すること反つて易く、其色必ず黒き證。(陽明病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○婦人、經水利下せず、また男子、膀胱滿急し、瘀血有る證。(婦人雜病篇)

等なり。

本方の作用

此方は、水蛭以下の四味より成り、而して大黃は其量多く、水蛭、蠱蟲、桃仁は少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『小腹鞭滿シ、小便快利シ、或ハ腹滿タザルニ、其人我レ滿テリト言ヒ、或ハ尿鞭シト雖モ、大便スルコト反ツテ易ク、其色必ず黒キ者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『臍下ヨリ横骨、大横(共に經穴の名、下腹部にあり)ノ邊ニ至ルマデ鞭滿シ、而シテ小便自利シ、大便必ズ黒シ。此レ瘀血ノ候也。凡ソ瘀血無クシテ小腹鞭キ者ハ、必ズ小便利セズ。知ラズンバアル可ラズ』

と。

應用

- (一)、精神明瞭を缺き、或は譫妄に陥り、腹痛あり、尿利快通し、其脈沈緊なる症。
- (二)、譫語を發し、或は精神錯亂し、四肢煩疼し、時々身熱を現はし、下腹部鞭滿し、之を按するに鞭き症。
- (三)、譫語し、腹痛し、口舌乾燥し、尿利快通し、熱候なく、脈緊にして澁滯する症。
- (四)、婦人、常に憂鬱し、月經の色黒くして、時期定まらず、下腹部及び腰部絞痛し、全身に倦怠を覺ゆる症。
- (五)、月經閉止し、下腹部鞭滿する症。

醫宗必讀に云く

『血、胸ニ結ボレ、譫語シ、小腹滿チ、水ニテ嗽グモ嘔ムコトヲ欲セザルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『婦人、經水不利ノ者、棄テ置キテ治セザレバ、後必ズ胸腹煩滿シ、或ハ小腹鞭滿シ、善饑、健忘、悲憂、驚狂等ノ症ヲ發シ、或ハ偏枯、癱瘓、勞瘵、鼓脹、膈噎等ノ症ヲ釀成シ、遂ニ不起ニ至ラン。早ク此方ヲ用ヒテ血隧ヲ通暢シ、以テ後患ヲ防グ可シ。墮撲折傷、瘀血凝滯シ、心腹脹痛シ、二便通ゼザル者、經閉シ、少腹鞭滿シ、或ハ眼目赤腫シ、疼痛シ、瞻視スルコト能ハザル者、經水閉滯シ、腹底ニ癥有リ、腹皮

青筋ヲ見ハス者ハ、並ニ此方ニ宜シ。若シ煮服スルコト能ハザル者ハ、丸ト爲シ、温酒ヲ以テ送リ下スモ亦佳ナリ』と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

下瘀血湯 ゲオケツタウ (金匱要略方)

大黃一六・〇 桃仁二十枚 蟅蟲二十枚

右三味、細末にし、蜜にて四丸と爲し、酒八勺を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

『新血下ルコト豚肝ノ如シ。』

尾臺榕堂氏曰く

『按ズルニ、新血ハ、疑フラクハ乾血ノ誤ナラン』と。

此方は、抵當湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

蟅蟲(シヤチユウ)の性能

藥徵續篇に云く

『乾血ヲ主治ス。故ニ兼テ小腹滿痛、及ビ婦人ノ經水不利ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味鹹寒、心腹ノ寒熱洗洗、血積、癥瘕ヲ主ドリ、堅ヲ破リ、血閉ヲ下ス』と。

本方證

下瘀血湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○産婦の腹痛、腹中に乾血有りて、臍下に著くの證。また經水不利の證。(婦人産後病篇)なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量多く、桃仁、蟅蟲は少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜及び清酒の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『臍下毒痛シ、及ビ經水不利ノ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

下腹部微しく實滿し、臍下に凝滯あり。或は小塊一二を認むることあり。之を按ずれば即ち痛む。

應用

(一)、月經痛等にして、平日便秘の傾向ある症。

(二)、諸種の月經不順にして、下腹部に微滿、拘攣を認むる等の症。

(三)、月經閉止等。

(四)、産後の腹痛等にして、下腹部結實、拘攣する症。

類聚方廣義に云く

『下瘀血湯ニ、乾漆二兩ヲ加へ、蕎麥ノ糊ニテ丸ト爲シ、小兒ノ疳疾、癍塊、諸藥效無ク、羸瘦、腹滿シ、飲食ヲ欲セズ、面身痿黃、浮腫シ、唇舌刮白、或ハ殷紅ニシテ、肌膚索澤、巨里跳動シ、黃胖ノ如ク、兼テ虻蟲有ル者ヲ治スルニ、奇效有リ。乾漆ハ、黑色、光亮ナル者ヲ佳ト爲ス。

産後、腹中結實、拘攣シ、或ハ煩滿シテ痛ム者ハ、當ニ枳實芍藥散ヲ用ヒテ之ヲ和スベシ。若シ愈エザル者ハ、其人必ズ乾血有ル也。下瘀血湯ニ宜シ。乾血ハ、久瘀血也』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

大黃蟅蟲丸 ダイワウシヤチュウゲワン (金匱要略方)

- 大黃八・五    黃芩七・〇    甘草一〇・〇    桃仁一七・〇    杏仁一八・〇    芍藥一三・五
- 乾地黄三四・〇    乾漆三・四    蠹蟲八・〇    水蛭一七・〇    蟻螯一七・〇    蟅蟲一〇・〇

右十二味、細末にし、煉蜜にて丸と爲し、一回二乃至四・〇を酒にて服用す(通常一日三回)。

此方は、抵當湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

乾漆（カンシツ）の性能

古方藥品考に云く

『其質大温ナリ。故ニ陽氣ヲ益シ、諸ロノ内傷ヲ療ス』と。

又、藥性提要に云く

『辛温ニシテ毒有リ。血ヲ行ラシ、蟲ヲ殺シ、年深ク堅結スルノ積滯ヲ削ル』と。

蜻蛚（セイサウ）の性能

神農本草經に云く

『味鹹、微温、惡血、血瘀、痺氣、破折シテ血脇下ニ在リ、堅滿痛、月閉、目中淫膚、青翳、白膜ヲ主ド  
ル』と。

又、古方藥品考に云く

『排達ニシテ、滿ヲ除キ、血ヲ行ラス』と。

本方證

大黃廔蟲丸の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○虚の極、羸瘦し、腹滿して飲食すること能はず、内に乾血有り、肌膚甲錯にして、兩目黯黒なる證。

（血痺虚勞病篇）

なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の十二味より成り、而して乾地黄は其量最も多く、杏仁之に次ぎ、桃仁、水蛭、蜻蛚また之に次ぎ、芍藥また之に次ぎ、甘草、廔蟲また之に次ぎ、大黃また之に次ぎ、羸蟲また之に次ぎ、黄芩また之に次ぎ、乾漆は最も少量にして、更に之に加ふるに、蜂蜜及び清酒の若干量を以てす。即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『病人、虚ノ極、羸瘦シ、肌膚甲錯、髒髒トシテ熱痞シ、腹滿シテ飲食スルコト能ハズ、唇口乾燥ス。内ニ乾血有レバ肌膚甲錯ス。中ヲ緩メ、虚ヲ補フニハ、大黃廔蟲丸之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、諸種の貧血性疾患。
- (二)、慢性腹膜炎、及び其類症。
- (三)、女子の經閉に因する諸症等。

此他、諸種の呼吸器疾患、循環器疾患、消化器疾患、神経系統疾患、血液病、及び新陳代謝異常等に、此

方を兼用すべき場合頗る多し。  
類聚方廣義に云く

『婦人、經行利セズ、漸ヤク心腹脹滿ヲ爲シ、煩熱、咳嗽シ、面色煤黃、肌膚乾キ、皮細起シ、狀、麩片ノ如ク、目中曇暗ニシテ或ハ赤澀、羞明シ、日ヲ怕ル、者ヲ治ス。』

小兒、疳眼ニテ雲翳ヲ生ジ、臉爛レテ羞明シ、物ヲ視ルコト能ハザルヲ治ス。並ニ雀目ヲ治ス』と。  
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 第十七 芎歸膠艾湯類

此部門に於て説述する藥方は、芎歸膠艾湯、及び其附方なり。

#### 芎歸膠艾湯 キユウキケウガイタウ (金匱要略方)

芎藭 阿膠 甘草各一・二 艾葉 當歸各一・八 芍藥二・四 乾地黄三・六

右七味、水一合、酒一合を以て、先づ六味を煮て六勺を取り、後、阿膠を入れ、溶解せしめて一回に温服す(通常一日三回)。

『差エズンバ更ニ作ル。』

此方、原本に在りては、乾地黄の分量を明記せず。今、類聚方に従ふ。

#### 藥能

芎藭(キユウキユウ)の性能

古方藥品考に云く

『其氣味辛温ニシテ芳烈ナリ。故ニ上、頭腦ニ達シ、下、瘀血ヲ破リ、氣血ヲ順ラスノ能有リ。以テ頭痛、腹中疔痛、經閉、諸ロノ瘡毒ヲ療ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、頭痛、金瘡、血閉、心腹ノ堅痛、半身不遂、鼻洪、吐血及ビ溺血ヲ主ドリ、膿ヲ排シ、氣ヲ行ラシ、鬱ヲ開ク』と。

艾葉(ガイエフ)の性能

古方藥品考に云く

『氣味苦ク、收斂ニシテ芳達ナリ。故ニ疝痢ヲ療シ、妄血ヲ止ムルノ能ニ取ル』と。  
又、古方藥議に云く

『味苦温、下痢、吐血、婦人ノ漏血、帶下ヲ主ドリ、腹痛ヲ止ム。主トシテ百病ニ灸ス』と。

#### 本方證

芎歸膠艾湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○婦人の漏下、半産後の下血、妊娠中の下血、妊娠腹痛の證。(婦人妊娠病篇)

なり。

本方の作用

此方は、芍薬以下の七味より成り、而して乾地黄は其量最も多く、芍薬之に次ぎ、艾葉、當歸また之に次ぎ、芎藭、阿膠、甘草は最も少量にして、更に之に加ふるに、清酒の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸薬互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『漏下、腹中痛ミ、及ビ吐血、下血スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、凡ソ吐血、下血、諸血症ヲ治スルハ、男子、婦人ヲ別タズ』と。

應用

(一)、腸出血等にして、熱性症候を缺く者。

(二)、子宮出血等にして、熱候無き症。

(三)、子宮内膜炎等にして、赤白の分泌物斷續する症。

(四)、痔出血等にして、顔色蒼白、四肢に冷感ある症。

(五)、血症等。

(六)、外傷後、内出血の疑ある症。

(七)、諸種の貧血症等。

類聚方廣義に云く

『妊婦顛躓シ、胎動イテ心ニ冲シ、腹痛シテ腰股ニ引キ、或ハ胎萎縮ノ狀ヲ覺エ、或ハ血ヲ下シテ止マザル者ハ、此方ヲ用フ可シ。胎殞チザル者ハ即チ安ク、若シ胎殞ツル者ハ即チ産ス。

腸痔、下血綿綿トシテ止マズ、身體痿黃、起テバ即チ眩暈シ、四肢ニ力無ク、少腹刺痛スル者ヲ治ス。若シ胸中煩悸シ、心氣鬱塞シ、大便燥結スル者ハ、黃連解毒湯、瀉心湯ヲ兼用ス。

血痢止マズシテ、腹滿、熱實ノ症無ク、唯ダ腹中變痛シ、唇舌乾燥スル者ハ、此方間マ效有リ』と。此説、本方運用上の参考と爲すべし。

溫經湯 ヲンケイタウ (金匱要略方)

吳茱萸〇・八 當歸 芍薬 芍薬 人參 桂枝 阿膠 牡丹皮 生薑 甘草各〇・

六 半夏一・六 麥門冬三・四

右十二味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方は、芎歸膠艾湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

溫經湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

(一)婦人、下利して止まず、暮には即ち發熱し、少腹裏急し、腹滿し、手掌煩熱し、唇口乾燥し、瘀血、少腹に在りて去らざる證。(婦人雜病篇)。(二)婦人、少腹寒えて久しく受胎せず、或は崩中(子宮出血の意)、或は月水過多、或は期に至るも來らざる證。(同上)なり。

本方の作用

此方は、吳茱萸以下の十二味より成り、而して麥門冬は其量最も多く、半夏之に次ぎ、吳茱萸また之に次ぎ、當歸、芍藥、芍藥、人參、桂枝、阿膠、牡丹皮、生薑、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『婦人、帶下ト稱スル者ハ、赤白ヲ泄シ、少腹裏急シ、或ハ腹虛滿シ、手掌煩熱シ、唇口乾燥シ、其人心下痞シ、嘔逆シ、或ハ欬唾ニ血ヲ帶ル者ナリ。當ニ溫經湯ヲ以テ之ヲ主ドルベシ』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、月經不順等にして、常に腰脚に冷感あり、曾て孕妊せざる症。

(二)、下肢寒冷にして、虛熱逆上の症狀あり、時に屢ば子宮出血を起す症。

(三)、月經不順にして、熱候無く、白帶下斷續する等の症。

(四)、下肢寒冷にして、手掌煩熱し、冬季に入れば、時々腰腹痛を發する等の症。

以上の諸症にして、冷感殊に甚だしき者には、證に由り、本方に附子を加味す。

當歸芍藥散 タウキシヤクヤクサン (金匱要略方)

當歸一・〇 芍藥五・六 茯苓 白朮各一・四 澤瀉二・八 芍藥一・〇

右六味、混和細末にし、散劑と爲し、一回四・〇を酒にて服用す(通常一日三回)。

此方は、芍歸膠艾湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

當歸芍藥散の證として、金匱要略に擧ぐる所は

(一)婦人、懷妊し、腹中疝痛する證。(婦人妊娠病篇)。(二)婦人、腹中諸疾痛の證。(婦人雜病篇)なり。

本方の作用

此方は、當歸以下の六味より成り、而して芍藥は其量最も多く、澤瀉之に次ぎ、茯苓、朮また之に次ぎ、當歸、芍藥は最も少量にして、更に之に加ふるに、清酒の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。



故に醫聖方格に云く

『婦人、懷妊シ、腹中疝痛シ、其人心下ニ支飲有リテ小便少ナク、或ハ胃（眩胃の意）スル者ハ、當歸芍藥散之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、妊婦の腹痛等にして、下腹部攣急し、尿利減少する症。
  - (二)、産後に眩暈を發し、顔面蒼白、四肢厥冷し、尿量減少する症。
  - (三)、平常、頭重を感じ、手足に冷感あり、時に子宮出血を現はす症。
  - (四)、男子の腹痛等にして、腹筋攣急し、四肢に冷感あり、尿利頻數、或は尿量減少する症。
  - (五)、痔疾ありて時々出血し、疼痛劇甚なる症。
  - (六)、輕症腎炎等。
  - (七)、輕症脚氣等。
- 三因方に云く
- 『産後ノ血量、内虚シ、氣乏シク、崩中、久痢ヲ治ス。常ニ服スレバ、血脈ヲ通暢シ、癰瘍ヲ生ゼズ、痰ヲ消シ、胃ヲ養ヒ、目ヲ明カニシ、津ヲ益ス』と。
- 又、類聚方廣義に云く

妊娠無効也

『妊娠、産後、下利、腹痛シ、小便利セズ、腰脚麻痺シテ力無ク、或ハ眼目赤痛スル者。若シ下利止マズ、惡寒スル者ハ、附子ヲ加フ。若シ下利セズ、大便秘スル者ハ、大黃ヲ加フ。

婦人經斷エテ、已ニ三四月、之ヲ診スルニ、腹中攣急シ、胎、手ニ應ゼズ、或ハ腹中疝痛シ、血痕ニ類シ、妊否ヲ決シ難キ者有リ。此方加大黃ヲ用フルトキハ、則チ二便快利シ、十日ヲ過ギズシテ腹中鬆軟シ、若シ懷妊セル者ハ、胎氣速カニ張ル。又懷妊スルコト已ニ累月、胎萎縮シテ長ゼズ、腹中拘急スル者モ、亦此方ニ宜シ。

婦人ノ血氣痛ニシテ、小便利ノ者、此方ニ宜シキ者有リ。

眼目赤痛ノ症、其人心下ニ支飲有リ、頭眩、涕淚シ、腹拘攣スル者、又此方ニ宜シ。

脱肛、腫痛シ、水ヲ出シテ止マザル者ニ、奇效有リ』と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

黄土湯 ワウドタウ (金匱要略方)

甘草 乾地黄 白朮 阿膠 黄芩各一・六 附子一・六(注意) 竈中黄土四・〇

右七味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方は、芎歸膠艾湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

黄土（ソウド）の性能

古方藥品考に云く

『性濟ニシテ沈墜ナリ。故ニ能ク逆氣ヲ降シ、專ラ吐血、下血、及ビ諸ロノ妄血ヲ治ス』と。  
又、古方藥議に云く

『味微温、效逆、吐血、鼻洪、腸風、帶下、尿血ヲ止ムルコトヲ主ドル』と。

本方證

黄土湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○下血、先に便あり、後に血ある證。亦吐血、衄血の證。（驚悸吐衄下血胸滿瘀血病篇）  
なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の七味より成り、而して黄土は其量多く、甘草、乾地黄、朮、阿膠、黄芩、附子は共に少量なり。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『下血、及ビ諸血症、其人心中惡熱シ、時ニ襟ヲ解カント欲シ、舌反ツテ和シ、或ハ胎無クシテ乾キ、但ダ嗽ス、ガント欲シテ嘔ノ、ウンコトヲ欲セズ、四肢冷エ、小便少ナク、大便溏ルキ者ハ、黄土湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、衄血、或は吐血の諸症にして、手掌煩熱し、下肢に冷感あり、其脈細弱なる症。

(二)、腸「チフス」に於ける腸出血等にして、體温俄然として下降し、手足厥冷し、虚煩し、其脈微細なる症。

(三)、痔出血止まず、顔色蒼白、四肢寒冷にして、心煩あり、其脈細遅なる等の症。

(四)、子宮出血等にして、其脈沈細なる症。

(五)、子宮内膜炎等にして、血性分泌物斷續し、下肢寒冷にして虚熱上逆し、其脈細小遅なる症。

類聚方廣義に云く

『吐血、下血、久久ニシテ止マズ、心下痞シ、身熱、惡寒シ、面青ク、體瘦セ、脈弱ニシテ舌色刷白サツバク、或ハ腹痛、下利シ、或ハ微腫スル者ヲ治ス。

臟毒、痔疾、膿血止マズ、腹痛、濡瀉ナシヤシ、小便利セズ、面色痿黃ニシテ、日ニ漸ヤク羸瘠シ、或ハ微腫スル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

第十八 承氣湯類

此部門に於て説述する藥方は、大承氣湯及び其去加方、變方、變方の去加方、變方の變方、並に大承氣湯の附方等なり。

### 大承氣湯 ダイジヨウキタウ (傷寒論及金匱要略方)

大黃二・四 厚朴四・八 枳實三・〇 芒消三・六

右四味、水三合を以て、先づ二味を煮て一合五勺を取り、後、大黃を入れ、再び煮て六勺を取り、更に芒消を入れ、溶解せしめて一回に温服す(通常一日二回)。

『下ルヲ得バ、餘ハ服スルコト勿レ。』

此方、腹中の熱實を瀉下し、以て上下の氣を承順せしむ。故に承氣を方名と爲すと。又、大と稱するは、其小承氣湯に比して、作用猛烈なるを以てなり。

#### 本方證

大承氣湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)陽明病、脈遲にして、身重く、短氣、腹滿して喘し、潮熱有り、手足濇然として汗出づる證。(陽明病篇)。(二)潮熱し、大便微しく硬き證。(同上)。(三)傷寒、若くは吐し、若くは下して後、解せず、大便せざること五六日より、上りて十餘日に至り、日晡所(午後四時の頃)潮熱を發し、獨語して鬼を見る狀の如く、劇しきは、發するときは則ち人を識らず、循衣摸牀し、懼れて安からず、微喘直視し、脈弦、

若し證候微なれば、但だ發熱、讞語する證。(同上)。(四)讞語して潮熱有り、燥屎有る證。(同上)。

(五)汗出で、讞語する證。(同上)。(六)潮熱を發し、手足皴皴として汗出で、大便難くして讞語する證。

(同上)。(七)陽明病、之を下し、心中懊憹して煩し、燥屎有る證。(同上)。(八)煩熱し、汗出づれば則ち解し、又瘡狀の如く、日晡所發熱し、脈實なる證。(同上)。(九)大に下して後、六七日大便せず、煩解せず、腹滿痛する證。(同上)。(十)小便不利、大便乍ちに難く乍ちに易く、時に微熱有り、喘冒して臥すこと能はざる證。(同上)。(十一)目中了了たらず、睛和せず、大便難く、身に微熱有る證。(同上)。

(十二)陽明病、發熱して汗多き證。(同上)。(十三)發汗して解せず、腹滿痛する證。(同上)。(十四)腹滿減せざる證。(同上)。(十五)脈滑にして數、宿食有る證。(同上)。(十六)口燥き咽乾く證。(少陰病篇)。

(十七)清水を自利して、色純青、心下必す痛み、口乾燥する證。(同上)。(十八)腹脹れて大便せざる證。(同上)。(十九)腹中滿痛し、實する證。(辨可下病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

(一)下利、脈平(平常の意)、之を按じて心下硬き證。(嘔吐瀉下利病篇)。(二)下利、脈遲にして滑、内實する證。(同上)。(三)下利、食を欲せず、宿食有る證。(腹滿寒疝宿食病篇)。(四)下利、差えて後、復た發し、病盡きざる證。(嘔吐瀉下利病篇)。(五)下利し、脈反つて滑なる證。(同上)。(六)瘧病にして、胸滿し、口噤み、脚攣急し、齧齒する證。(瘧濕喝病篇)。(七)産後七八日にして、太陽の證無く、少腹堅痛し、惡露盡きず、大便せずして煩燥、發熱し、脈微しく實、再び倍す發熱し、日晡時に煩躁し、食

第十八 承氣湯類

するときは則ち讞語し、夜に至つて即ち愈ゆる證。(婦人産後病篇)等なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の四味より成り、而して厚朴は其量最も多く、芒消之に次ぎ、枳實また之に次ぎ、大黃は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『腹堅滿シ、或ハ臭穢ヲ下利シ、若クハ燥屎アル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『腹候、堅滿シテ、臍下ノ右傍磊ライラ何トシテ囊石ヲ探ルガ如ク、而シテ臍上水分スイブン(經穴名、臍上一寸の部に在り)ノ邊ニ動氣有り。然レドモ其證劇シキトキハ、則チ臍下ノ左右皆堅滿シ、囊石ニシテ之ヲ探ルガ如シ。此レ即チ燥屎ノ候也。總テ承氣ノ證ハ、皮膚枯燥シテ紙子ヲ按ズルガ如ク、亦手足或ハ頸以上漑然トシテ汗出ヅ』と。

應用

(一)、熱性病にして大に汗出で、身體重く、煩躁し、脈數急、腹痛して便閉する症。

(二)、壯熱解せず、腹滿ありて苦惱し、其脈實にして緊なる症。

(三)、煩躁して口渴し、手足厥冷して腹痛し、裏急後重を發する症。

(四)、脈數にして熱臭甚しく、口中恰も煤煙を含むが如く、腹痛して下痢せんとするの状ある症。

(五)、汗出づること油の如く、喘鳴あり、身體自由ならず、或は安靜に、或は擾亂し、其脈微しく滑なる症。

(六)、下痢して後、手足厥冷し、心下部痛み、尿利滯滞し、心煩して起臥自由ならず、其脈滑なる症。

(七)、微痢すること頻々、時に精神昏憤して醉狀の如く、或は目瞤動し、或は視線動かす、其脈弦なる症。

(八)、下痢し、精神昏み、眼球潤澤を失ひ、累日絶食し、唯だ少量の水を與ふれば之を嚙下し、其脈沈實なる症。

(九)、蒸々として發熱し、煩滿して食を欲せず、腹堅痛し、屢ば上廁するも糞便硬固なる症。

(十)、自痢すること數回にして、外熱甚しからず、腹中絞痛し、俯仰すべからず、舌乾燥して厚苔を被むる症。

(十一)、四肢強直して上擧する能はず、口を噤み、直視し、或は切齒し、其脈弦なる症。

古今醫統に云く

『癩狂、熱壅ガリ、大便秘結スルヲ治ス』と。

又、仁齋直指方に云く

「熱厥ハ、初メ身熱ヲ病ミ、然ル後ニ厥ヲ發ス。其人熱ヲ畏レ、手ヲ揚ゲ足ヲ擲チ、煩躁シテ水ヲ飲ミ、頭汗シ、大便秘シ、小便赤ク、佛鬱昏憤蓋シ。當ニ下スベクシテ下ヲ失シ、血氣通ゼズ。故ニ四肢厥冷ス。所謂熱深ケレバ則チ厥モ深ク、所謂下證悉ク具リテ厥逆ヲ見ハス者、此レ也。大承氣湯ヲ與フ」と。又、小青囊に云く

「舌、四邊微紅ニシテ、中央灰黑色ヲ見ハスヲ治ス。此レ下ヲ失スルニ由リテ致ス。本方ヲ用ヒテ之ヲ退ク。又舌黃ヲ見ハシテ、黒點亂生スル者ヲ治ス。其證必ズ渴シ、譫語ス。又舌灰黑色ヲ見ハシテ黒紋有リ、脈實ナル者ヲ治ス」と。

又、類聚方廣義に云く

「凡ソ痼毒壅滯ノ症、其人腹中堅實ニシテ、或ハ鞭滿シ、大便難ク、胸腹動悸シ、或ハ喜怒常無ク、或ハ不寐、驚惕シ、健忘、怔忡シ、或ハ身體不仁ニシテ、或ハ戰曳、癱瘓シ、筋攣骨痛シ、或ハ言語蹇澀シ、緘黙シテ偶人ノ如ク、而シテ飲啖常ニ倍シ、或ハ數十日食セズシテ饑エザル等、變怪百出シ、名狀ス可ラズ、世ニ或ハ狂ト稱シ、或ハ癩ト稱シ、或ハ中氣、中風ト稱シ、或ハ心脾ノ虛ト稱スル者、能ク其脈狀、腹症ヲ審カニシ、以テ此方ヲ與ヘ、眞武湯、附子湯、桂枝加苓朮附湯、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯ヲ交モ用ヒ、更ニ七寶丸、十幹丸ノ類ヲ間服シ、寛猛並ビ行ヒ、犄角以テ攻ムルトキハ、則チ罷癘ヲ安全ニ回シ、横天ヲ垂絶ニ救フ可シ。

脚氣、胸腹脹滿シ、一身浮腫シ、胸動、怒濤ノ如ク、短氣シテ嘔シ、二便閉澀スル者ハ、衝心ノ基也。此方ニ非ズンバ、其迅劇ノ勢ヲ折衝シ、結轆ノ毒ヲ蕩滌スルコト能ハザル也。

脚氣症、其人胸中跳動シ、心下堅ク、短氣、腹滿シ、便秘シテ脈數ナル者ハ、假饒其狀緩症ニ似タルモ、決シテ輕視ス可ラズ。必ズ不測ノ變有ラン。早ク此方ヲ用ヒ、以テ鬱毒ヲ逐除スルトキハ、則チ大患ニ至ラズシテ治セン。ヒヲ執ル者、忽諸ニスル勿レ。痘瘡、麻疹、惡熱、腹滿シ、煩躁、譫語シ、黒胎、燥裂シ、大便セズシテ渴シ、或ハ自利臭穢ノ者ハ、死、須臾ニ在リ。此方ニ宜シ。痿躄、腹中ニ堅塊有リ、便秘シテ口燥キ、脈實ニシテ力有ル者、此方ニ非ズンバ治スルコト能ハザル也。附子湯、眞武湯等、交替互用スルモ、亦佳ナリ。

痢疾、大熱、腹滿シ、痛、錐ニテ刺スガ如ク、口舌乾燥シ、或ハ破裂シ、大便日ニ數十百行、或ハ便膿血ノ者ヲ治ス。

狂症、大言罵詈シ、晝夜眠ラズ、飲啖常ニ過ギ、胸腹滿チ、大便通ゼザル者ヲ治ス。疝積、留飲、痛忍ブ可ラズ、胸腹煩滿シ、心下堅硬、二便不利、或ハ時ニ黒物ヲ吐下スル者ヲ治ス。

急驚風、心下堅ク、腹滿、口噤シ、肢體強急シ、脈數實ノ者ハ、此方ニ宜シ。

破傷風、其暴劇ノ者ハ、舉體強直シ、直視、不語、胸腹鞭滿シ、二便利セズ、其死、踵ヲ旋ラサズ。此方以テ一生ヲ僥倖ス可シ。若シ服スルコト能ハザル者ハ、紫圓ニ宜シ。平居便秘シ、腹滿、上逆スル者、或ハ酷暑祁寒ヲ冒シ、或ハ鯨飲、過食ヲ爲シ、則チ眼目昏暗ニシテ、赤脈四起シ、忽然トシテ瞻視ヲ失スル

者有り。急ニ此方ヲ與ヘテ之ヲ下ス可シ。速カニ愈ユ。  
 病者、飲食味無ク、或ハ食中、食後、頻リニ白沫ヲ吐シ、或ハ嘔噎シテ胸ヲ刺シ、或ハ食物停觸シ、胸膈ニ痛ヲ爲シ、或ハ食後惡心シ、懊懣シテ安カラズ、或ハ吐ヲ得テ反ツテ快ク、腹裏弦靱ニシテ癥塊有ル者ハ、膈噎（食道癌、及ビ其類症の意）ノ漸也。若シ其精氣未ダ衰ヘズ、疾苦未ダ深カラザルニ<sup>ト</sup>迨ビ、嚴ニ世事ヲ絶チ、酒食ヲ慎ミ、専ラ靜養調攝ヲ爲シ、此方ヲ以テ弦靱ヲ柔和シ、癥結ヲ削平シ、灸スルコト五椎ヨリ十四五椎ニ至リテ怠ラザルトキハ、則チ大患ニ至ラズシテ治セン。消石大圓、大黃消石湯モ、亦撰用ス可シ」と。  
 此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

厚朴三物湯 コウボクサンモツタウ (金匱要略方)

厚朴五・六 枳實三・三 大黃二・八

右三味、水二合四勺を以て、先づ二味を煮て一合を取り、後、大黃を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す。

『利スルヲ以テ度ト爲ス。』

此方は、大承氣湯の去加方にして、即ち其原方に、芒消を去れるものなり。

本方證

厚朴三物湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○痛んで閉さず（便閉の意）證。（腹滿寒疝宿食病篇）なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、小承氣湯證ニシテ、腹滿甚シ』と。

本方の作用

此方は、厚朴以下の三味より成り、而して厚朴は其量最も多く、枳實之に次ぎ、大黃は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『腹滿シ、痛ンデ閉ザス者ハ、厚朴三物湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、腹滿ありて便秘し、脈沈實なる等の症。
  - (二)、胸腹部滿悶し、二便通せず、脈實なる症等。
- 類聚方廣義に云く

『諸病、大承氣湯ヲ服スルコト能ハザル者ハ、宜シク此湯ヲ以テ消塊丸ヲ送下スベシ。每服一錢（約四）グ

ヲムシ。

痢疾、腹滿甚シクシテ、裏急後重スル者ヲ治ス」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 小承氣湯 セウジヨウキタウ (傷寒論及金匱要略方)

大黃四・八 厚朴三・六 枳實三・六

右三味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日二回)。

「初、湯ヲ服スレバ、當ニ更衣(便通)スベシ。爾ラザル者ハ、盡ク之ヲ飲ム。若シ更衣スル者ハ、之ヲ服スルコト勿レ。」

此方、原本に在りては、厚朴の量稍や少なし。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、大承氣湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

小承氣湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

- (一)陽明病、腹大滿して通せざる證。(陽明病篇)。(二)陽明病、發熱し、大便鞭くして少なき證。(同上)。(三)汗多くして胃中燥き、大便鞭くして譫語する證。(同上)。(四)譫語して潮熱を發し、脈滑にして疾なる證。(同上)。(五)太陽病、若くは吐し、若くは下し、若くは發汗し、微煩して小便數<sup>しげ</sup>く、大

便因て鞭き證。(同上)。(六)下利し、譫語し、燥尿(乾燥せる糞塊)有る證。(厥陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

- (一)下利し、譫語し、燥屎有る證。(嘔吐臟下利病篇。此證傷寒論に同じ)。(二)大便通せず、噦<sup>しげ</sup>し、數ば譫語する證。(嘔吐臟下利病篇附方)等なり。

#### 本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量多く、厚朴、枳實は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『腹滿シテ、大便鞭キ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

- (一)、諸般の熱性病、胸腹部膨滿し、二便俄かに閉止し、煩悶、躁擾して安からず、其脈實なるも、尙ほ少しく浮の傾向ある症。
- (二)、發汗過多、流汗止まず、便閉して煩悶、擾亂し、其脈實なるも、尙ほ少しく浮を帶べる症。
- (三)、脚氣等にして、腹滿し、便秘する症。

- (四)、頭痛ありて便閉し、腹部微滿する症。
  - (五)、吃逆を發し、或は譫語し、便秘して脈實なる症。
  - (六)、小兒の吐乳病等にして、腹滿し、便閉する症。
  - (七)、大便秘結し、腹部微滿する症。
- 入門良方に云く

『痢ノ初發、積氣甚ダ盛ニシテ、腹痛忍ビ難ク、或ハ脹悶ヲ作シ、裏急後重シ、數<sup>シ</sup>ハ<sup>ン</sup>間ニ至ルモ、而モ通ズルコト能ハズ、窘迫スルコト甚シキヲ治ス』と。

又、傷寒緒論に云く

『少陰病、手足厥冷シ、大便秘シ、小便赤ク、脈沈ニシテ滑ナルハ、小承氣湯ナリ』と。

又、小青囊に云く

『痘、冷ヲ飲ミテ食ニ傷ラレ、腹痛甚シキ者ヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『傷寒、噦逆(吃逆)ノ症ハ、熱閉、邪實ニ屬スル者有リ、寒飲、精虛ニ屬スル者有リ、又虵蟲ニ因ル者有リ、宜シク精診甄辨シ、以テ方ヲ措クベシ。世醫皆吃逆ヲ懼ル、故ニ一タビ噦症ヲ見レバ、則チ以テ胃寒、虛脫ト爲シ、概ネ治噦ノ劑ヲ用ユ、粗ト謂フ可シ。王宇泰ハ瀉心湯、小承氣湯、調胃承氣湯、桃仁承氣湯等ヲ用ヒ、龔廷賢ハ黃連解毒湯、白虎湯ヲ用ユ、具眼ノ士ト謂フ可シ』と。

以上の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 調胃承氣湯 テウキジヨウキタウ (傷寒論方)

大黃六・四 甘草 芒消各三・二

右三味、水一合八勺を以て、先づ二味を煮て六勺を取り、後、芒消を入れ、溶解せしめて一回或は二回に溫服す。

此方、原本に在りては芒消の分量多し。今、吉益東洞氏の改むる所に従ふ。

此方は、大承氣湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

調胃承氣湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

- (一)胃氣和せずして、譫語する證。(太陽病上篇)。(二)發汗の後、惡寒せず、但だ熱する證。(太陽病中篇)。(三)傷寒解せず、之を誤下して後、自下利し、脈反つて調和し、内實する證。(同上)。(四)太陽病、過經十餘日、心下溫温として吐せんと欲し、胸中痛み、大便反つて溏<sup>ゆる</sup>く、腹微滿し、鬱滯として微煩し、先に自から吐下を極めし證。(同上)。(五)陽明病、吐せず、下さず、心煩する證。(陽明病篇)。(六)太陽病、發汗して解せず、蒸蒸として發熱する證。(同上)。(七)吐して後、腹脹滿する證。(同上)等なり。



本方の作用

此方は、大黃以下の三味より成り、而して大黃は其量多く、甘草、芒消は少量なり。即ち此方は、恰も後に出づる大黃甘草湯に加ふるに、更に芒消を以てせるものゝ如し。故に方極に云く

『大黃甘草湯證ニシテ、實スル者ヲ治ス』と。

又、類聚方に云く

『按ズルニ、但ダ急迫シテ大便通ゼザル者、之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『燥屎、臍下ノ氣海（經穴名、臍下一寸五分の部に位す）、石門（同、臍下二寸の部に位す）ノ邊ニ在リ。大承氣湯に比ブレバ、燥屎稍ヤ少ナクシテ、表熱（表證の意に非ず）有リ。又臍下悸スル者之レ有リ』と。

應用

- (一)、諸般の熱性病にして、心煩あり、胸腹部微滿し、或は腹痛し、尿濃厚にして赤き症。
- (二)、發熱ありて下痢、腹痛し、其脈沈にして數、食慾尙ほ未だ著しく減退せざる症。
- (三)、頭痛發熱し、食慾減退し、或は時々腹痛あり、心煩、微喘する症。

- (四)、發熱し、自汗出づるも惡寒せず、心煩し、腹滿し、脈緊にして遲なる症。
- (五)、頭痛發熱し、胸腹部微滿し、心煩、微喘あり、脈數急なる症。
- (六)、發汗の後、熱退かず、心下部滿悶し、時々腹痛あり、大便澀痢し、其脈緊なる症。
- (七)、脈遲にして尙ほ發熱し、腹滿して食慾減退し、心煩ありて微しく渴する症。
- (八)、身熱去らず、食すれば嘔せんと欲し、胸腹部微滿して時に痛み、尿利頻繁、脈洪にして遲なる症。
- (九)、脚氣等にして、便秘し、其脈沈實なる症。
- (十)、糖尿病、及び其類症にして、便秘の傾向あり、其脈實なる者。
- (十一)、下痢性疾患にして、腹痛、裏急後重甚しく、其脈實なる症。
- (十二)、妊娠嘔吐等にして、大便秘結する症。
- (十三)、腹痛、腹滿し、大便秘結する症。

活人書に云く

『大抵斑ヲ發スルニハ、表藥（發表劑の意）ヲ用フ可ラズ。表虛裏實ノ者ニ、若シ汗ヲ發シテ開泄スレバ、更ニ斑爛ヲ増ス也。下ス可キ者ハ、調胃承氣湯ヲ與フ』と。

又、衛生寶鑑に云く

『傷寒、狂ヲ發シテ煩躁シ、面赤ク、脈實ナルヲ治ス』と。

又、口齒類要に云く

『中熱、大便通ゼズ、咽喉腫痛シ、或ハ口舌ニ瘡ヲ生ズルヲ治ス』と。  
又、玉機微義に云く

『齒痛、血出デ、止マザルヲ治ス。調胃承氣湯ヲ以テ末ト爲シ、蜜ニテ丸トシ服ス』と。  
又、類聚方廣義に云く

『痘瘡、麻疹、癰疽、疔毒、内攻、衝心シ、大熱、讞語シ、煩躁、悶亂シ、舌上燥裂シ、大便セズ、或ハ下利シ、或ハ大便綠色ナル者ハ、此方ニ宜シ。』

牙齒疼痛、齒齦腫痛、齶齒枯折、口臭等ハ、其人多クハ平日大便秘閉シテ衝逆ス。此方ニ宜シ。

胃反、膈噎、胸腹痛ミ、或ハ妨滿シ、腹中ニ塊有リ、咽喉乾燥シ、鬱熱、便秘スル者、消渴、五心煩熱シ、肌肉燥瘠シ、腹中凝結シ、二便不利ノ者ハ、皆此方ニ宜シ。或ハ兼用方ト爲スモ亦良シ。

膈噎ノ症、其人少壯ヨリ腹裏ニ癥結ヲ生ジ、而シテ年ト共ニ長ジ、常ニ胃腑ノ消化、血清灌培ノ妨碍ヲ作シ、積ミテ老境ニ至レバ斯症始メテ萌ス。蓋シ年齒漸ク高ケレバ、則チ癥結愈ヨ痼ク、血液因テ以テ涸レ、精神隨ヒテ衰フ。是レ必然ノ勢也。加フルニ勤勞、酒色ノ過度ヲ以テシ、而シテ後ニ斯症始メテ成ル。然レドモ初起能ク藥餌ヲ勤メ、世紛ヲ謝リ、情慾ヲ絶チ、以テ治療ニ就カバ、猶ホ或ハ一生ヲ庶幾ス可シ。若シ姑息ニ治ヲ爲シ、放恣縱情シ、病勢皇張シ、精氣衰脱シ、身體枯槁シ、飲食一切咽ヲ下リ難キニ至ツテハ、決シテ救フ可ラザル也』と。

以上の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 桃核承氣湯

### タウカクジヨウキタウ

(傷寒論方)

桃仁二・四

桂枝

芒消

甘草各二・〇

大黃四・〇

右五味、水一合五勺を以て、先づ四味を煮て六勺を取り、後、芒消を入れ、溶解せしめて一回に温服す

(通常一日三回)。

『當ニ微利スベシ。』

此方は、調胃承氣湯の去加方にして、即ち其原方に、桃仁、桂枝を加味せるものなり。

#### 本方證

桃核承氣湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○熱、膀胱に結ばれ、其人狂の如く、少腹急結する證。(太陽病中篇)  
なり。

#### 本方の作用

此方は、桃仁以下の五味より成り、而して大黃は其量最も多く、桃仁之に次ぎ、桂枝、芒消、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。  
故に方極に云く

「血證、小腹急結シ、上衝スル者ヲ治ス」と。  
此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、脈少しく浮にして熱候あり、時に譫語を發し、下腹部急結し、尿利異常なき症。
- (二)、舌面暗黒色、汗出で、少しく渴し、精神明瞭を缺き、時に腹痛し、或は腰股部攣痛し、其脈微浮なる症。
- (三)、熱性病、譫語を發すること狂人の如く、或は下血し、或は下腹部急結して痛む症。
- (四)、婦人、月經通せず、下腹部滿痛する症。
- (五)、産後、腹痛を發し、或は下腹部より心下部に上衝し、或は眩暈を發する症。
- (六)、月經痛等。
- (七)、吐血等にして、胸内壓迫の感あり、脈實なる症。
- (八)、「ロイマチス」性疾患にして、其晝夜に入れば特に甚しき症。
- (九)、下痢、腹痛し、紫血を下し、下腹部緊滿し、脈實なる症。
- (十)、腰痛等にして、便秘の傾向あり、其脈實なる症。
- (十一)、嘗て打撲等を受け、後年腰痛を發し、荏苒として癒えざる症。
- (十二)、種々の花柳病、殊に軟性下疳等。

(十三)、痔疾患等。

類聚方集覽に云く

「赤白帶下ハ、之ヲ主ドル。並ニ痢疾、打撲、瘀血ノ者、小腹急結シテ塊有ル者ハ、男子モ亦此方ニ宜シ」と。

又、類聚方廣義に云く

「産後、惡露下ラズ、少腹凝結シテ、上衝、急迫シ、心胸安カラザル者ヲ治ス。凡ソ産後ノ諸患ハ、多クハ惡露盡キザルノ致ス所也。早ク此方ヲ用フルヲ佳ト爲ス。

經水不調、上衝甚シク、眼中ニ厚膜ヲ生ジ、或ハ赤脈怒起シ、臉胞赤爛シ、或ハ齶齒疼痛シ、小腹急結スル者ヲ治ス。又打撲損傷眼ヲ治ス。

經閉、上逆、發狂シ、或ハ吐血、衄血、及ビ赤白帶下、小腹急結シ、腰腿攣痛スル者ヲ治ス。痢疾、身熱シ、腹中拘急シ、口乾キ咽燥キ、舌色殷紅ニシテ、膿血ヲ便スル者ヲ治ス。血行利セズ、上衝、心悸シ、少腹拘急シ、四肢瘡痺シ、或ハ痲冷ナル者ヲ治ス。

淋家、少腹急結シ、痛、腰腿ニ連リ、莖中疼痛シ、小便涓滴シテ通ゼザル者ハ、利水劑ノ能ク治スル所ニ非ザル也。此方ヲ用フレバ則チ二便快利シ、苦痛立ロニ除ク。小便癱閉シ、小腹急結シテ痛ム者、打撲疼痛シ、轉側スルコト能ハズ、二便閉滯スル者モ亦良シ」と。

以上の二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 大黃甘草湯 ダイワウカンザウタウ (金匱要略方)

大黃六・四 甘草三・二

右二味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方、原本に在りては、甘草の分量少なし。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、調胃承氣湯の變方と見做すべきものなり。

#### 本方證

大黃甘草湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○食し已つて即ち吐する證。(嘔吐噦下利病篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ急迫ノ證有ルベシ』と。

#### 本方の作用

此方は、大黃、甘草の二味より成り、而して大黃は其量多く、甘草は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『大便秘閉シ、急迫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、胃加答兒、及び其類症にして、或は胃痛を發し、或は嘔吐を發し、便秘する症

(二)、胃「アトニー」、及び其類症。

類聚方廣義に云く

『胃反、嘔噎、心胸痛ミ、大便難キ者ヲ治ス。鷓鴣菜(即ち海人草)ヲ倍加シテ、鷓鴣菜湯ト名ク。蛇蟲、

心腹痛ミ、惡心、唾沫シ、小兒ノ蛔症、及び胎毒、腹痛、夜啼、頭瘡、疳眼ヲ治ス。

小兒、好ンデ生米、茶、炭、壁泥ヲ食ヒ、或ハ偏ニ五味ヲ嗜ム者ハ、蛔蟲ニ屬ス。此方ニ宜シ。

小兒二三歳以上、五七歳以内ニシテ、眼面痿黃シ、飲食ノ好惡多ク、時時卒倒シ、人事ヲ省ミズ、直視、

痙攣シ、驚風ノ狀ノ如クニシテ、白沫ヲ吐スル者ハ、癩癩ノ基也。早ク鷓鴣菜湯ヲ用ヒ、蛇蟲ヲ殺伐シ、

腸垢ヲ蕩滌スレバ、以テ後患ヲ免ル可シ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 厚朴七物湯 コウボクシチモツタウ (金匱要略方)

厚朴三・二 甘草 大黃各一・二 大棗一・〇 枳實二・〇 桂枝〇・八 生薑二・〇

右七味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。  
『嘔スル者ハ、半夏五合ヲ加フ。(下略)』  
此方は、大承氣湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

厚朴七物湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば  
○腹滿、發熱し、脈浮にして數、飲食故の如き證。(腹滿寒疝宿食病篇)  
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、此方ハ、厚朴三物湯、桂枝去芍藥湯ヲ合シテ、生薑二兩ヲ加フル也。是ニ由テ之ヲ觀レバ、當ニ二方ノ證ニシテ、上逆シ、嘔スルノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、厚朴以下の七味より成り、而して厚朴は其量最も多く、枳實、生薑之に次ぎ、甘草、大黃また之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、桂枝は最も少量なり。  
即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。  
故に方極附言に云く  
『腹滿、發熱シ、上衝シテ嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、腹部膨滿して煩悶し、脈浮にして數なる症。
  - (二)、下痢性疾患にして、腹部膨滿し、或は發熱を兼ねる症。
  - (三)、鼓脹ありて便秘する症。
  - (四)、腹膜炎、及び其類症にして、便秘の傾向ある症。
- 類聚方廣義に云く  
『傷食吐下ノ後、胸中爽快ナラズ、乾嘔シ、腹滿シ、或ハ頭痛シテ熱有ル者ヲ治ス。痢疾、腹滿、拘急シ、發熱シ、腹痛劇シクシテ嘔スル者ヲ治ス。芍藥、或ハ芒消ヲ加フルモ亦良シ』と。  
此説、本方運用上の參考と爲すべし。

大黃牡丹皮湯 **ダイワウボタンピタウ** (金匱要略方)

大黃三・二 牡丹皮二・四 桃仁二・〇 瓜子三・二 芒消三・六  
右五味、水二合八勺を以て、先づ四味を煮て六勺を取り、後、芒消を入れ、溶解せしめて頓服す。  
『膿有レバ當ニ下ルベシ。如シ膿無ケレバ當ニ血ヲ下スベシ。』

此方、原本に在りては大黃牡丹湯と稱し、且つ其藥量之と異れり。今、方名は類聚方に從ひ、藥量は類聚

方廣義に従ふ。

此方は、大承氣湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

本方の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○腸癰（即ち蟲様突起炎及び其類症）、小腹腫痞し、之を按ずれば即ち痛み、小便自から調ひ、時時發熱し、自汗出で、復つて惡寒し、其脈遲緊にして、膿未だ成らざる證。（瘡癰腸癰浸淫病篇）なり。

本方の作用

此方は、大黃以下の五味より成り、而して芒消は其量最も多く、大黃、瓜子（冬瓜子）之に次ぎ、牡丹皮また之に次ぎ、桃仁は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『臍下ニ結毒有リ、之ヲ按ズレバ即チ痛ミ、及ビ膿血ヲ便スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、蟲様突起炎（俗に所謂盲腸炎）等にして、未だ衰憊加はらず、其脈緊にして、下すべき症。

(二)、赤痢様疾患にして、腹痛甚しく、魚腸の如きものを下し、未だ衰憊加はらざる症。

(三)、婦人の月經痛等。

(四)、月經閉止等。

(五)、痔疾患。

(六)、臀部、及び下肢等に發する疔疽。

(七)、淋疾、及び淋毒性副辜丸炎等。

(八)、痔瘻等には、證に由り伯州散を兼用す。

(九)、種々の微毒性疾患には、證に由り水銀劑を兼用す。

類聚方集覽に云く

『此方、獨リ腸癰ヲ治スル而已ナラズ、專ラ能ク無名ノ惡瘡、癰疔、腫塊、癩癰、流注、楊梅便毒、及び一切膿有ル者、及ビ淋疾、帶下、痔漏、痢疾等ヲ治ス。數年ニ及ブ者ト雖モ皆奇功有リ』と。

又、類聚方廣義に云く

『諸癰疽、疔毒、下疳、便毒、淋疾、痔疾、臟毒、癩癰、流注、陳久ノ疥癬、結毒瘰癧、無名ノ惡瘡、膿血盡キズ、腹中凝閉シ、或ハ塊有リ、二便利セザル者ヲ治ス。症ニ隨ヒテ伯州散、七寶丸、十幹丸等ヲ兼用ス。』

産後、惡露下ラズ、小便不利、血水壅遏シ、少腹滿痛シ、通身浮腫シ、大便難キ者、又産後、惡露盡キズ、

數日ヲ過ギ、寒熱交互モ作り、脈數急、小腹或ハ腰髀ノ痛劇シキ者ハ、癰ヲ發スルノ兆也。能ク病ノ情機ヲ審カニシ、早ク此方ヲ以テ之ヲ下ス可シ。已ニ膿潰スル者モ、亦此方ニ宜シ。經水不調、赤白帶下、赤白痢疾、小腹凝結シ、小便赤澀シ、或ハ水氣有ル者ヲ治ス」と。此二説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

### 排膿散 ハイノウサン (金匱要略方)

枳實 芍藥各四・八 桔梗一・六

右三味、細末にし、散劑と爲し、約四・〇を以て鷄子黃一個に混和し、白湯にて一回に服用す。

此方、原本に在りては其藥量之と異れり。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、大承氣湯の附方と見做すべきものなり。

#### 本方證

金匱要略には、本方ありて其證無し。是れ恐くは散逸せしものならん(瘡癰腸癰浸淫病篇)。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、瘡癰有リテ、胸腹拘滿スル者、之ヲ主ドル』と。

#### 本方の作用

此方は、枳實以下の三味より成り、而して枳實、芍藥は其量多く、桔梗は少量にして、更に之に加ふるに、

卵黃の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『諸瘡、胸腹拘滿シテ、濁唾、吐膿シ、或ハ膿血ヲ便スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『瘡家、結腫シテ痛ミ、膿有ル者ヲ治ス』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、痔瘻、及び其類症。

(二)、癰癤、及び其類症。

(三)、諸種の炎性腫瘍等にして、膿潰せる症。

張氏醫通に云く

『内癰ニシテ、膿、便ヨリ出ヅルヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『骨槽風(齒根骨膜炎の類)、膿潰ノ後、口ヲ收メザル者ハ、毒ノ根蒂必ズ齒根ニ著ク。故ニ其齒ヲ拔去スルニ非ンバ、決シテ全治スルヲ得ザル也。須ラク先ヅ其齒ヲ拔去シ、而ル後ニ此方ヲ與フベシ。必ズ效

有ラン。伯州散ヲ兼用シ、時ニ梅肉(散)ヲ以テ之ヲ下ス。  
 産後惡露壅滯シ 小腹癰、腎癰等ヲ發シ、腹拘滿シテ痛ミ、大便泄利シ、心下痞塞シ、飲食ヲ欲セズシテ、嘔有リ、咳有ル者モ、亦此方ニ宜シ。伯州散ヲ兼用ス。  
 咽喉ノ結毒、腐爛、疼痛シ、頸項ニ結核(淋巴腺の腫脹)ヲ生ズル者ハ、宜シク鼯鼠丸ヲ兼用スベシ。鼯鼠丸ヲ用フルトキハ、則チ咽喉更ニ腐爛ヲ加ヘ、而シテ後ニ漸漸ニ平ニ復シ、結核モ隨ヒテ消却ス』と。  
 七二説、本方運用上の參考と爲すべし。

四逆散 シギヤクサン (傷寒論方)

甘草 枳實 柴胡 芍藥各二・八

右四味、細末にし、散劑と爲し、一回約四・〇を白湯にて服用す。

或は右四味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服するも亦可なり(通常一日三回)。

『後加減ノ法、(下略)。』

此方、内は熱結を解し、外は四逆を治す。故に四逆散と名くと。

此方は、大承氣湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

四逆散の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○四逆し、其人或は欬し、或は悸し、或は小便利せず、或は腹中痛み、或は泄利下重する證。(少陰病篇)なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の四味より成り、而して其分量は皆同一なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

淺田宗伯氏曰く

『蓋シ此方ハ大柴胡湯ノ變方ニ係ル。邪ヲ疎キ、氣ヲ通ズルヲ以テ主ト爲ス』と。

應用

(一)、下痢の後、精神鬱塞し、少しく心煩ありて、身體倦怠を覺え、腹痛し、四肢微冷し、尿量減少し、尙ほ大便滑痢し、其脈沈小にして力ある症。

(二)、下痢累日止まず、胸腹部微滿し、四肢微厥し、熱性症候著しからざる症。

(三)、熱候なくして手足冷え、心下煩滿し、或は痛み、或は胸脇苦滿ありて、微しく下痢する症。

(四)、虚羸にして氣逆し、熱候なくして下痢し、胸脇苦滿し、或は微痛し、手足寒冷にして、其脈沈緊なり症。

(五)、熱候なく、頭重くして足冷え、心煩し、腹痛し、食慾に著變なく、脈少しく弦、下痢の傾ハある



症。

明醫指掌に云く

『寒邪、熱ニ變ジ、裏ニ傳ヘテ腹痛シ、便秘シテ厥スル者ヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『痢疾、累日下利止マズ、胸脇苦滿シ、心下痞塞シ、腹中結實シテ痛ミ、裏急後重スル者ヲ治ス』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 第十九 赤石脂禹餘糧湯類

此部門に於て説述する藥方は、赤石脂禹餘糧湯、及び其附方なり。

#### 赤石脂禹餘糧湯 シヤクセキシウヨリヤウタウ (傷寒論方)

赤石脂 禹餘糧各六・〇

右二味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、宋板に在りては、太一禹餘糧に作る。今、成本に従ふ。

藥能

赤石脂 (シヤクセキシ) の性能

藥徵續篇に云く

『水毒、下利ヲ主治ス。故ニ兼テ便膿血ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、洩痢、腸澼膿血、腹痛、小便ノ利、崩中、漏下ヲ主ドル』と。

禹餘糧 (ウヨリヤウ) の性能

古方藥品考に云く

『其性收斂ニシテ寒降ナリ。以テ能ク大腸ヲ固有シ、尿道ヲ利ス。故ニ怯煩、及び熱痢等ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘寒、煩滿、赤白ヲ下シ、小腹ノ痛、崩中ヲ主ドリ、大腸ヲ固ム』と。

本方證

赤石脂禹餘糧湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○下利止まず、心下痞鞭し、此利、下焦に在る證。(太陽病下篇)

なり。

本方の作用

此方は、赤石脂、禹餘糧の二味より成り、而して其分量は同一なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『毒、臍下ニ在リ、利止マザル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱候なくして、心胸部に微滿を覺え、口舌乾燥するも舌苔なく、尿澁利し、大便下痢する症。

(二)、汗下の後、心下部鬱塞し、下痢頻々として止まず、下腹部微滿し、尿利困難にして、脈候に著變な

き症。

(三)、下痢頻發し、心下部虛滿し、下腹部に膨滿を覺え、尿澁滯し、其脈浮沈定まらざる症。

(四)、下痢頻發し、或は粘液血便を下し、全く熱性症候を缺く者。

幼科發揮に云く

『大腸ヨリ來ル者ハ、則チ變化シ盡キテ尿ト成ル。但ダ結聚セズシテ下ル所皆酸臭也。禹餘糧湯（即ち本方）ニ宜シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『腸澼、滑脱シ、脈弱ニシテ力無ク、大便粘稠ニシテ膿ノ如キ者ヲ治ス。若シ腹痛シ、乾嘔スル者ハ、桃花湯（次出）ニ宜シ。又二方合用スルモ、亦妙ナリ』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

桃花湯 タウクワタウ (傷寒論及金匱要略方)

赤石脂六・四 乾薑〇・四 粳米四・〇

右三味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、別に赤石脂の末、約四・〇を入れ服用す（通常一日三回）。

『若シ一服ニシテ愈ユレバ、餘ハ服スルコト勿レ。』

赤石脂は、其色桃花の如し。故に桃花湯と名くと。或は曰く、赤石脂は、即ち桃花石なりと。

此方は、赤石脂禹餘糧湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

桃花湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)少陰病、下利して膿血を便する證。(少陰病篇)。(二)腹痛し、小便利せず、下利止まず、膿血を便する證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

○下利して膿血を便する證。(嘔吐臟下利病篇)なり。

本方の作用

此方は、赤石脂以下の三味より成り、而して赤石脂は其量最も多く、粳米之に次ぎ、乾薑は最も少量なり。

即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『腹痛、下利シ、膿血ヲ便スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱候なく、腹虚滿して痛み、手足温にして渴すと雖も舌苔なく、下痢頻々、或は血便を下し、其脈沈にして遅なる症。

(二)、赤痢様疾患にして、屢ば血便を下し、下腹部疼痛し、熱候なき症。

(三)、痔出血等にして、熱候なく、漸やく衰弱加はらんとする症。

類聚方集覽に云く

『久痢ヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『按ズルニ、乾薑ノ分量甚ダ少ナキハ、疑フ可シ。外臺ニ、阮氏桃花湯ヲ載スルニ、赤石脂八兩、粳米(即ち粳米)一升、乾薑四兩ニ作ル。余ハ多ク此方ヲ用ユ。』

吳儀洛曰ク、服スルノ時、又末方寸匕ヲ加フル者ハ、留滯セシメテ、以テ腸胃ヲ固ムル也ト。

便膿血ハ、腸垢ト血ト同ジク出ヅル者ニシテ、病源(書名)ノ痢候中に所謂膿涕ノミ。腸癰ノ下利眞膿血ト同ジカラズ。

痢疾累日ノ後、熱氣已ニ退キ、脈遅弱、或ハ微細ニシテ、腹痛、下利止マズ、膿血ヲ便スル者ハ、此方ニ宜シ。若シ身熱シ、脈實ニシテ、嘔渴、裏急後重等ノ症、猶ホ存スル者ハ、當ニ先ヅ其症ニ隨ヒ、疏利ノ劑ヲ以テ、熱毒ヲ驅逐シ、腸胃ヲ蕩滌スベシ。若シ腹痛、下利、便膿血ノ症ニ執シテ、以テ此方及ビ禹餘糧湯等ヲ用フルハ、猶ホ門ニ鑰シテ盜ヲ養フガゴトシ。其變寧ンゾ測ル可ンヤ。學者之ヲ思ヘ』と。

第二十四 逆湯類

此部門に於て説述する藥方は、四逆湯及び其去加方、其去加方の去加方、四逆湯の變方、並に其變方の去加方等なり。

四逆湯 シギヤクタウ (傷寒論及金匱要略方)

甘草四・八 乾薑三・六 附子二・四 (注意)

右三味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

『強人ハ大附子一枚、乾薑三兩ナル可シ。』  
此方、裏寒を温散し、四肢の厥逆を主治す。故に之を四逆湯と名くと。

本方證

四逆湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

- (一)脈浮、自汗出で、小便數く、心煩し、微惡寒し、脚攣急するに、反つて桂枝湯を與へ、復た重ねて汗を發し、其津液を失へる證。(太陽病上篇)。(二)之を下して下利を得、清穀(完穀下痢)止まず、身疼痛する症。(太陽病中篇)。(三)脈浮にして遲、表熱裏寒、下利清穀の證。(陽明病篇)。(四)自利して渴せざる證。(太陰病篇)。(五)少陰病、脈沈なる證。(少陰病篇)。(六)少陰病、始めて之を得、手足寒え、若し膈上に寒飲有りて乾嘔する證。(同上)。(七)大汗出で、熱(虛熱)去らず、内(腹中)拘急し、四肢疼み、又下利、厥逆して、惡寒する證。(厥陰病篇)。(八)大汗し、若くは大下利し、厥冷する證。(同上)。(九)吐利して汗出で、發熱(虛熱)、惡寒し、四肢拘急し、手足厥冷する證。(霍亂病篇)等。

又、金匱要略に於けるものは

○嘔して脈弱、小便復つて利し、身に微熱有り、厥を見はす證。(嘔吐噦下利病篇。此證傷寒論にも出づ)等なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の三味より成り、而して甘草は其量最も多く、乾薑之に次ぎ、附子は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『四肢厥逆シ、身體疼痛シ、下利清穀、或ハ小便清利ノ者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、此レ甘草君藥也』と。

腹證

腹診配劑錄に云く

『四逆湯、四逆加人參湯、白通湯、茯苓四逆湯、吳茱萸湯、乾薑附子湯ノ六方ハ、腹狀大抵皆同シ。凡ソ四逆湯ノ腹狀ハ、之ヲ按ズルニ力無クシテ腐瓢ヲ探ルガ如ク、且ツ臍下關元(經穴名、臍下三寸の部に位す)ノ邊尤モ力無シ。論中ニ所謂拘急ストハ、但ダ腹内ニ節有リテ張ルヲ曰フ。而シテ皮上ニ潤無ク、下利モ亦清穀也。白通湯ノ下利ハ四逆湯ヨリ劇シ。吳茱萸湯、乾薑附子湯ハ、小柴胡ニ似テ小柴胡ニ非ズ、白虎ニ似テ白虎ニ非ズ、唯ダ心下及ビ腹滿チテ、之ヲ撫ヅルニ力無キ也』と。

應用

- (一)、發汗して後、自汗出で、虛熱あり、腹筋攣急するも、之を按するに軟弱、其脈虛なる症。
- (二)、手足厥冷し、自汗出で、胸内苦悶あり、或は痛み、或は乾嘔し、其脈細なる症。
- (三)、虚羸にして逆上感あり、下痢頻々、汗出で、四肢冷え、語言明瞭を缺き、其脈微なる症。
- (四)、「コレラ」様疾患にして、水瀉すること度なく、尙ほ虚熱ありて汗出で、言語不明、精神朦朧、其脈微なる症。

(五)、「コレラ」様疾患にして、下利頻々、汗出で、惡寒し、語言明瞭を缺き、手足厥冷し、其脈沈にして力なき症。

(六)、吐瀉し、手足厥冷し、脈細にして、吃逆を發する症。

(七)、完穀下痢を發し、熱候なく、所謂虚寒の症。

(八)、慢性胃腸「カタル」等にして、久しきを経るも治せず、脈弱にして四肢厥冷を發する症。

醫林集要に云く

「傷寒ノ陰證、唇青ク面黒ク、身背強リ痛ミ、四肢厥冷シ、及ビ諸虚沈寒ヲ治ス」と。

又、濟生方に云く

「五臟中寒シテ口噤ミ、四肢強直シ、失音不語、或ハ卒然トシテ暈悶シ、手足厥冷スル者ヲ治ス」と。

又、類聚方廣義に云く

「四逆湯ハ、厥ヲ救フノ主方也。然レドモ傷寒熱結ノ裏ニ在ル者、中風（腦溢氣の類）卒倒シ、痰涎湧

スル者、霍亂（吐瀉病）未ダ吐下セズシテ、内ニ猶ホ毒有ル者、老人ノ食鬱、及ビ諸ロノ卒病、閉塞シテ開カザル者ノ如キハ、縱令全身厥冷シ、冷汗、脈微ナルモ、能ク其症ヲ審カニシ、白虎、瀉心、承氣、紫圓、備急、走馬ノ類ヲ以テ、其結ヲ解シ、其閉ヲ通ズルトキハ、則チ厥冷治セズシテ自カラ復サン。若シ誤リ認メテ脱症ト爲シ、遽カニ四逆、眞武ヲ用フルハ、猶ホ經（縊首）ヲ救ハントシテ足ヲ引クガゴトシ。庸工、人ヲ殺スハ、常ニ此ニ坐ス。嗚呼、方技ハ小ナリト雖モ、死生係リ、存亡由ル。高才卓識ニ非ザルヨリハ、難イカナ理致ヲ探ルコト。

霍亂、吐利甚シキ者、及ビ所謂暴瀉ノ症ハ、急ナル者ハ死、朝ヲ崇ラズ。若シ倉皇トシテ措ヲ失シ、擬議シテ策ヲ誤ラバ、人ヲ非命ニ斃サン。其罪何レニカ歸センヤ。醫人ハ當ニ平素討究講明シ、以テ急ヲ濟ヒ、難ヲ靖ンズベシ。

霍亂病ハ、外感ニ因ルト雖モ、蓋シ傷食也。又疝瘕ヲ挾ンデ激動スル者有リ。其吐セズ、下ラズ、胸腹劇痛スル者ハ、當ニ先ヅ備急圓、或ハ紫圓ヲ與ヘテ、以テ之ヲ吐下スベシ。腹痛、悶亂止ミ、而シテ嘔止マズ、藥汁入ラザル者ハ、宜シク小半夏加茯苓湯ヲ以テ、其嘔ヲ止ムベシ。吐下ノ後、頭痛、發熱シ、身疼痛シ、渴シテ嘔吐シ、小便利セズ、脈浮數ナル者ハ、五苓散ニ宜シ。前症ニシテ吐利止マズ、四支微冷シ、熱飲ヲ好ム者ハ、人參湯ナリ。吐下止ミテ、大熱大渴シ、煩躁シ、心下痞鞭スル者ハ、白虎加人參湯ナリ。前症ニシテ頭痛シ、汗出デ、惡寒シ、身體疼痛シ、心下痞鞭セザル者ハ、白虎加桂枝湯ナリ。乾嘔止マズ、冷汗、厥逆シ、轉筋シ、腹痛シ、脈微ニシテ絶セント欲スル者ハ、四逆湯ヲ用フ可シ。苟モ攻伐ノ術、治

安ノ策ヲ精究シ、施設ニ誤無ンバ、其起ツ可キ者ヲ起タシムル、豈ニ其レ難カラシヤ」と。  
此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

通脈四逆湯 ツウミヤクシギヤクタウ (傷寒論及金匱要略方)

甘草四・八 附子二・四 (注意) 乾薑四・八

右三味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す (通常一日二回)。

『其脈即チ出ヅル者ハ愈ユ。後加減ノ法、(下略)』

此方、宋板及び金匱要略に在りては、甘草の分量稍や少なし。今、成本に従ふ。

此方、寒毒を温散して、血脈を通ずるの功、四逆湯より長せり。故に通脈の二字を冠すと。

此方は、四逆湯の去加方にして、即ち其原方に、乾薑を増量せるものなり。

本方證

通脈四逆湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)下利清穀、手足厥逆し、脈微にして絶せんと欲し、身反つて惡寒せず、其人、面赤色にして、或は腹痛し、或は乾嘔し、或は咽痛し、或は利止みて、脈出でざる證。(少陰病篇)。(二)下利清穀、裏寒外熱、汗出で、厥する證。(厥陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○下利清穀、裏寒外熱、汗出で、厥する證。(嘔吐臟下利病篇。此證傷寒論に同じ)なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の三味より成り、而して甘草、乾薑は其量多く、附子は少量なり。

即ち此方は、恰も四逆湯に加ふるに、更に乾薑を以てせるものゝ如し。

故に類聚方廣義に云く

『四逆湯證ニシテ、吐利、厥冷甚シキ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

總て四逆湯を應用すべき諸症にして、更に重態に陥れる者。

類聚方集覽に云く

『葱白ヲ加フレバ大ニ驗有リ。面色ニ拘ハラザレ』と。

又、類聚方廣義に云く

『通脈四逆湯ハ、諸ヲ四逆湯ニ比ブレバ、其症重キコト一等ニシテ、面赤色以下ハ、則チ兼症也』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

通脈四逆加猪膽汁湯 ツウミヤクシギヤクカチヨタンジフタウ (傷寒論方)

甘草四・八 附子二・四 (注意) 乾薑四・八 猪膽〇・八 (水少許を以て和解す)

右四味、水一合五勺を以て、先づ三味を煮て六勺を取り、後、猪膽汁を入れ、一回に温服す (通常一日二回)。

『其脈即チ來ル。猪膽無ケレバ、羊膽ヲ以テ之ニ代フ。』

此方、原本に在りては、甘草の分量稍や少なし。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、通脈四逆湯の去加方にして、即ち其原方に、猪膽汁を加味せるものなり。

藥能

猪膽 (チヨタン) の性能

古方藥品考に云く

『味苦涼、以テ心胸ヲ清フシ、肝火ヲ瀉ス。質滑澤、能ク燥ヲ潤シ脈ヲ通ズ。又穀道中 (直腸内) ニ灌ギテ能ク大便ヲ通ズ』と。

又、古方藥議に云く

『大寒、骨熱、勞極、傷寒、渴疾、小兒ノ五疳ヲ主ドリ、蟲ヲ殺ス』と。

本方證

通脈四逆加猪膽汁湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○吐已み下斷え、汗出で、厥し、四肢拘急して解せず、脈微にして絶せんと欲する證。(霍亂病篇) なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の四味より成り、而して甘草、乾薑は其量最も多く、附子之に次ぎ、猪膽は最も少量なり。

即ち此方は、恰も通脈四逆湯に加ふるに、更に猪膽を以てせるものゝ如し。

故に類聚方廣義に云く

『通脈四逆湯證ニシテ、乾嘔シ、煩燥シ、安カラザル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、「コレラ」様疾患にして、吐瀉の後虚脱狀を呈し、脈微にして絶せんとする症。

(二)小兒の下痢性疾患にして、漸やく衰弱加はり、卒然として失神し、四肢厥冷、脈微細なる症。

類聚方集覽に云く

『慢驚風ニシテ、危篤ノ者ハ、之ヲ主ドル』と。

又、類聚方廣義に云く

「霍亂、吐下太甚シキノ後、脱汗珠ノ如ク、氣息微微、厥冷、轉筋シ、乾嘔止マズ、煩憤、躁擾シ、脈微、脈絶スル者ハ、死生一線ニ繫ル。此方ニ非ズンバ挽回スルコト能ハザル也。服シテ後、脱汗、煩躁俱ニ止ミ、小便利スル者ハ佳兆ト爲ス。若シ猪膽無ケレバ、熊膽ヲ以テ之ニ代フ。諸ロノ四逆湯ハ、其症皆危篤ナラザルハ無シ。而シテ此ヲ最重極困ノ症ト爲ス。查照參究シテ、以テ其義ヲ了ス可シ」と。

此二説、本方運用上の參考と爲すべし。

### 四逆加人參湯 シギヤクカニンジンタウ (傷寒論方)

甘草四・八 乾薑三・六 附子(注意) 人參各二・四

右四味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方は、四逆湯の去加方にして、即ち其原方に、人參を加味せるものなり。

#### 本方證

四逆加人參湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○惡寒し、脈微にして復た利する證。(霍亂病篇)

なり。

#### 本方の作用

此方は、甘草以下の四味より成り、而して甘草は其量最も多く、乾薑之に次ぎ、附子、人參は最も少量なり。

即ち此方は、恰も四逆湯に加ふるに、更に人參を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

「四逆湯證ニシテ、心下痞鞭スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、四逆湯を應用すべき諸病にして、脱汗止み、舌色煤煙の如くにして濕潤し、藥汁、食餌共に咽を下り難く、心下痞鞭し、腹皮虚張する症。

(二)、吐瀉の後、著しく水分を失へる症。

(三)、脱血過多にして、眩暈を發し、或は暈倒する等の症。

景岳全書に云く

「元陽虚脱シ、危キコト頃刻ニ在ル者ヲ治ス」と。

又、衛生寶鑑補遺に云く

「傷寒ノ陰證、身涼シク、額上、手背ニ冷汗有ルヲ治ス」と。

又、醫聖方格に云く



『惡寒シ、脈微ニシテ復タ利シ、飲食スルコト能ハズ、其人疲勞シテ、必ズ踞臥スル者ハ、四逆加人參湯之ヲ主ドル』と。

又、類聚方廣義に云く

『此方ハ、自下利ノ脱症ヲ主ドル。茯苓四逆湯（次出）ハ、汗下後ノ脱症ヲ主ドル。然レドモ執ヒ家ハ、必ズシモ拘泥セザレ。唯ダ操縦自在ナルヲ得タリト爲ス。諸方モ皆然リ』と。  
此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 茯苓四逆湯 ブクリヤウシギヤクタウ（傷寒論方）

茯苓四・八 人參一・二 甘草二・四 乾薑一・八 附子一・二（注意）

右五味を一包と爲し、水一合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日二回）

此方、成本に在りては、茯苓の分量稍や多し。今、宋板に従ふ。

此方は、四逆加人參湯の去加方にして、即ち其原方に、茯苓を加味せるものなり。

#### 本方證

茯苓四逆湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○發汗し、若くは之を下し、病仍は解せず、煩躁する證。（太陽病中篇）  
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下ノ悸、惡寒ノ證有ルベシ』と。

#### 本方の作用

此方は、茯苓以下の五味より成り、而して茯苓は其量最も多く、甘草之に次ぎ、乾薑また之に次ぎ、人參、附子は最も少量なり。即ち此方は、恰も四逆加人參湯に加ふるに、更に茯苓を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『四逆加人參湯證ニシテ、心下悸スル者ヲ治ス』と。

又、尾臺榕堂氏曰く

『四逆加人參湯症ニシテ、心下悸シ、小便利セズ、身𦉳動シ、煩躁スル者ヲ治ス』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

- (一)、發汗の後、虚熱を發し、身體惰痛し、腹筋拘急し、煩躁甚しき症。
- (二)、下痢の後、虚熱を現はし、腹虚滿して煩悶し、手足寒冷にして尿利著しく減少する症。
- (三)、發汗し、或は下して後、惡寒甚だしく、或は煩躁し、或は全身痙攣を發し、其脈微なる症。
- (四) 之を下して下痢遂に止まず、腹虚脹し、少しく渴し、尿閉を起し、時に精神朦朧として、且つ煩躁の狀あり、其脈浮虚なる症。

聖濟總錄に云く

『霍亂、臍上築悸スルヲ治ス』と。

又、方機に、本方の適應症を擧げて云く

『手足厥冷シ、煩躁スル者。』

肉瞶筋惕シ、手足厥冷スル者。

心下悸シ、惡寒シ、腹拘急シ、下利スル者』と。

又、類聚方廣義に云く

『霍亂ノ重症ニシテ、吐瀉ノ後、厥冷、筋惕シ、煩躁シ、熱無ク、渴無ク、心下痞鞭シ、小便利セズ、脈微細ナル者ハ、此方ヲ用フ可シ、服シテ後、小便利スル者ハ、救ヒ得可シ。』

諸ロノ久病ニシテ、精氣衰憊シ、乾嘔シテ食セズ、腹痛、溏泄シ、惡寒シ、面部四支微腫スル者ヲ治ス。産後、調攝ヲ失スル者ニ、多ク此症有リ。

慢驚風、搐搦、上竄シ、下利止マズ、煩躁、恍惚シ、小便利セズ、脈微數ナル者ヲ治ス』と。此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 白通湯 ビヤクツウタウ (傷寒論方)

葱白六・八 乾薑 附子(注意)各二・八

右三味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)

此方、諸家の間に異論ありて、或は方中に人尿一味を脱すと云ひ、或は然らずと云ふ。今、原本に従ふ。

柳田濟氏曰く

『此方ハ葱白ヲ主トス。而シテ白通湯ト名クル者ハ、葱白ハ色白ク、其功能、經氣ヲ通ジ、氣逆ヲ降スヲ以テノ故也』と。

此方は、四逆湯の變方と見做すべきものなり。

### 藥能

葱白(ソウハク)の性能

藥性提要に云く

『辛甘ニシテ温、上下ノ陽氣ヲ通ジ、血ヲ治メ、毒ヲ解ス』と。

又、古方藥議に云く

『味温平、氣ヲ通ジ、血ヲ止メ、表ニ達シ、裏ヲ和シ、小便ヲ利シ、霍亂轉筋、及ビ賁豚氣、脚氣、心腹痛、目眩ヲ治シ、及ビ心迷悶スルヲ止ム』と。

### 本方證

白通湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)少陰病、下利する證。(少陰病篇)。(二)下利して脈微なる證。(同上)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ氣逆ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、葱白以下の三味より成り、而して葱白は其量多く、乾薑、附子は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

雉間煥氏曰く

『按ズルニ、乾嘔シ、下利シ、而シテ頭痛スル者ヲ治ス』と。

應用

- (一)、發汗し、或は下して後、其脈數にして弱、腹中雷鳴を發し、下痢頻發する症。
  - (二)、四逆湯を與ふべき疾患にして、之を與ふるも、下痢尙ほ止まず、尿利なく、手足温暖となれるも、其脈微弱なる症。
  - (三)、四逆湯を服して後、脈却つて浮弱を現はし、手足温暖となるも、下痢甚だしく、全身に熱候なき症。
  - (四)、下痢性疾患にして、衰弱の極に達し、熱候なき症。
- 活人書に云く

『病人ニ讖語有リ、鄭聲有リ。鄭聲ハ虚ト爲ス。當ニ溫藥ヲ用フベシ。白通湯之ヲ主ドル。讖語ハ實ト爲ス。當ニ調胃承氣湯ヲ須ヒテ之ヲ主トスベシ』と。

又、類聚方廣義に云く

『此方ノ症ハ、四逆湯症ニ比ブレバ、下利稍ヤ緩カニシテ、且ツ清穀、大汗、四支拘急等ノ急迫ノ症無シ。故ニ甘草ヲ用ヒザル也』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

白通加猪膽汁湯 **ビヤクツウカチヨタンジフタウ** (傷寒論方)

葱白六・八 乾薑 附子(注意)各二・八 人尿二勺(今之を去る) 猪膽〇・八(水少許を以て和解す)

右四味、水一合八勺を以て、先づ三味を煮て六勺を取り、後、猪膽汁を入れ、一回に溫服す(通常一日二回)。

『若シ膽無キモ、(下略)。』

尾臺榕堂氏曰く

『猪膽無ケレバ熊膽ヲ用フ可シ。更ニ佳ナリ』と。

方中の人尿は、童子の未だ穀食せざる者を佳と爲すと云ふ。然れども大全良方には、已に之を去れるの例あり。故に今、同方に倣ひて之を去る。

柳田濟氏曰く

『按ズルニ、此方ハ、白通湯ニ猪膽汁、人尿ヲ加フ。而シテ但ダ白通加猪膽汁湯ト稱スル者ハ何ゾヤ。凡ソ方中ニ不潔ノ物ヲ伍スルハ、醫人、病苦ヲ救ハント欲スルノ所爲ニシテ、實ニ止ムヲ得ザルニ出ヅ。乃チ人尿ノ不潔ト雖モ、辟ケズシテ之ヲ加フル也。然レドモ其方名ヲ題スルハ、則チ公事也。乃チ不潔ヲ辟ケズンバアル可ラズ。是故ニ方中ニ人尿ヲ加フト雖モ、方名ハ之ヲ忌ミテ書セザル也』と。

此方は、白通湯の去加方にして、即ち其原方に、人尿（今之を去れるも）、猪膽汁を加味せるものなり。

藥能

人尿（ジンネウ）、即ち童便（ドウベン）の性能

藥性提要に云く

『鹹ニシテ寒、能ク肺火ヲ引イテ下行シ、膀胱ヨリ出ヅ。火ヲ降シ、陰ヲ滋スコト甚ダ速カニシテ、吐衄、損傷ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味鹹涼、肌膚、心肺ヲ潤ホシ、血悶、熱狂、撲損、瘀血、運絶、吐血、鼻洪ヲ療ス』と。

本方證

白通加猪膽汁湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○白通湯を與へて、利止まず、厥逆して脈無く、乾嘔し煩する證。（少陰病篇）なり。

本方の作用

此方は、葱白以下の四味より成り、而して葱白は其量最も多く、乾薑、附子之に次ぎ、猪膽は最も少量なり。

即ち此方は、恰も白通湯に加ふるに、更に猪膽を以てせるものゝ如し。

但し原方に在りては、尙ほ之に人尿の作用を加算するの要あり。

雉間煥氏曰く、

『按ズルニ、白通湯證ニシテ、厥逆シ、乾嘔シ、煩躁劇シキ者ヲ治ス』と。

應用

總て白通湯を應用すべき諸症にして、更に煩躁増劇し、若くは虚脱に陥れる者。

類聚方集覽に云く

『葱白ハ倍用シテ可也。上方（白通湯）モ同ジ』と。

此説、本方應用上の参考と爲すべし。

乾薑附子湯 カンキヤウブシタウ (傷寒論方)

乾薑 附子各六・〇 (特に注意を要す)

右二味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、頓服す。

此方は、四逆湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

乾薑附子湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

〇之を下して後、復た汗を發し、晝日は煩躁して眠ることを得ず、夜は安靜、嘔せず、渴せず、脈沈微なる證。(太陽病中篇)なり。

本方の作用

此方は、乾薑、附子の二味より成り、而して其分量は同一なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『下利シ、煩躁シテ厥スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、虚熱去らず、時に煩躁を發し、須臾にしてまた止み、其脈微浮にして弱なる症。

(二)、虚熱尙ほ解せず、時に自汗出で、大に煩躁し、其脈微浮にして虚なる症。

(三)、虚熱、時に盛衰あり、胸内苦悶して精神昏憤し、其脈沈微なる症。

(四)、外表に熱感あり、胸内に苦悶あり、時々汗出で、身體疹煩し、其脈沈なる症。

(五)、外表に熱感あり、口舌乾燥するも舌苔なく、呼吸促迫し、自汗出で、煩し、精神鬱々として悶え、

其脈浮虚なる症。

外臺秘要に云く

『傷寒ノ病、嘔(吃逆)止マザルヲ治ス。擣篩シ、苦酒ヲ以テ丸シ、酒ニテ飲ミ下ス』と。

又、易簡方に云く

『陰證ノ傷寒、大便自利シテ發熱スル者ハ、尤モ之ヲ服スルニ宜シ』と。

又、和劑局方に云く

『暴カニ風冷ニ中リ、久シク痰水ヲ積ミ、心腹冷痛シ、霍亂轉筋スルヲ治ス。一切ノ虚寒ハ、並ニ皆之ヲ治ス』と。

又、景岳全書に云く

『瘴毒、陰證ノ發熱ニシテ、或ハ煩躁シ、手足冷エ、鼻尖冷エ、身體重痛シ、舌上ニ胎生ジ、飲ヲ引キ、

煩渴シ、或ハ自利、嘔吐シ、汗出デテ惡風スルヲ治ス」と。  
又、類聚方集覽に云く

『當ニ下利、煩躁、惡寒ノ證有ルベシ。』

此方、晝日ハ煩躁シ、夜ハ則チ安眠スル者、實ニ能ク之ヲ治ス。大ニ奇也」と。  
又、方機に、本方の適應症を擧げて云く、

『煩躁シテ眠ルコトヲ得ズ、脈沈微ナル者』と。

又、類聚方廣義に云く

『乾薑附子湯ハ、此レ汗下ノ誤施ニ因テ、若キ症ヲ致ス者也。甘草乾薑湯（次出）ノ煩躁ト略ボ似タリ。

然レドモ、彼レハ誤治ニ因テ病勢激動シ、急迫ヲ致ス。此病ハ誤治ノ爲メニ重キヲ加ヘズ、又急迫ノ症無シ。唯ダ精氣ノ脱スルコト甚ダシ。是レ甘草、附子、地ヲ易フル所以カ』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 甘草乾薑湯

### カンザウカンキヤウタウ

（傷寒論及金匱要略方）

甘草八・〇 乾薑四・〇

右二味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す（通常一日二回）。

此方は、四逆湯の變方と見做すべきものなり。

### 本方證

甘草乾薑湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○脈浮、自汗出で、小便數<sup>ひげ</sup>く、心煩し、微惡寒し、脚攣急するに、反つて桂枝湯を與へ、之を得て便ち厥し、咽中乾き、煩躁、吐逆する證。（太陽病上篇）。

又、金匱要略に於けるものは

○肺痿・涎沫を吐し、欬せず、渴せず、遺尿し、小便數<sup>ひげ</sup>く、必ず眩し、涎唾多き證。（肺痿肺癰欬嗽上氣病篇）

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ急迫ノ證有ルベシ』と。

### 本方の作用

此方は、甘草、乾薑の二味より成り、而して甘草は其量多く、乾薑は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『厥シテ煩躁シ、涎沫多キ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱候なくして脈浮數、心悸亢進及び逆上感あり、二便に著變なき症。
- (二)、熱候なく、脈稍や浮大にして、腹部軟弱、頭眩し、煩悶、躁擾し、時に昏愖する症。
- (三)、汗下の後、困悶、擾動して安んぜず、或は嘔し、或は渴し、或は呼吸促迫し、二便に著變なき症。
- (四)、大發汗の後、呼吸促迫し、或は乾嘔を發し、或は心煩し、其脈弱にして數なる症。
- (五)、上は熱し、下は冷え、或は煩躁して安んぜず、其脈弱にして數なる症。
- (六)、發汗の後、脱汗止まず、頭熱し、足冷え、口舌乾燥し、呼吸促迫、心悸亢進を發し、其脈浮弱なる症。

- (七)、發汗し、汗出で、後、頭熱し、足冷え、胸部滿悶し、乾嘔を發し、其脈緩にして弱なる症。
  - (八)、大發汗の後、熱解するも、嘔逆、煩渴し、食物咽に下らず、手足微冷し、其脈微浮なる症。
  - (九)、吃逆を發し、手足冷え、其脈微なる症。
  - (十)、癰疽、及び諸種の炎性腫瘍等にして、熱性症候なく、唯だ疼痛劇甚なる症。
  - (十一)、凍傷等。
- 魏氏家藏方に云く  
 『赤白痢ヲ治ス。末ト爲シ、蜜ニテ丸シ服ス』と。  
 又、類聚方集覽に云く

『久痢ヲ治ス。兼用ハ承氣丸ナリ。大率ネ急卒ニ逆冷スル者ハ、此方ニ宜シク、大病、在薄トシテ愈エズ、而シテ厥冷スル者ハ、四逆ノ輩(諸四逆湯を指す)ニ宜シ』と。  
 又、方機に、本方の適應症を擧げて云く  
 『涎沫ヲ吐シテ咳セズ、遺尿シ、小便數キ者。南呂(兼用)。足厥シ、咽中燥キ、煩躁シ嘔逆スル者。吐下ノ後、厥逆、煩躁シ、如何トモス可ラザル者』と。  
 又、類聚方廣義に云く  
 『老人、平日小便頻數ニ苦シミ、涎ヲ吐シテ短氣シ、眩暈シテ起歩シ難キ者ハ、此方ニ宜シ』と。  
 此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

第二十一 類族不詳の方

此部門に於て説述する藥方は、恰も獨立せるが如き觀ありて、其類族未だ詳かならざるものなり。

瓜蒂散 クワテイサン (傷寒論及金匱要略方)

瓜蒂 赤小豆各二・〇

右二味、各別に細末にし、混和して散と爲し、先づ熱湯七勺を以て、香豉九・六を煮て稀粥を作り、滓

を去り、之を以て散一・〇乃至二・〇を頓服す。

『吐セザル者ハ少加シ、快吐ヲ得テ乃チ止ム。諸ロノ亡血、虛家ハ、瓜蒂散ヲ與フ可ラズ。』

藥能

瓜蒂(クワテイ)の性能

藥徵に云く

『胸中ニ毒有リ、吐セント欲シテ吐セザルヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、水ヲ下シ、痰ヲ吐シ、黃疸ヲ療シ、腦塞熱暈ヲ治ス。病、胸腹中ニ在レバ、皆之ヲ吐下ス』と。

本方證

瓜蒂散の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)脈微浮にして、胸中痞鞭し、氣、咽喉に上衝し、息するを得ざる證。(太陽病下篇)。(二)手足厥冷し、脈緊、心中滿ちて煩し、饑えて食すること能はざる證。(厥陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○宿食、上脘(膈間の謂)に在る證。(腹滿寒疝宿食病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ吐セント欲スルノ證有ルベシ』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、胸中痞シ、心下鞭ク、時ニ痰飲上ツテ咽喉ニ衝キ、息スルヲ得ズ、自カラ吐セント欲スル者ハ、當ニ之ヲ吐スベシ。瓜蒂散ニ宜シ』と。

本方の作用

此方は、瓜蒂、赤小豆の二味より成り、而して其分量は同一なるも、其服用に際しては、更に之に加ふるに、香豉の煮汁若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『溫溫トシテ、吐セント欲スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『胸中脹レテ痞シ、煩悶殊ニ甚ダシ。凡ソ瓜蒂散ヲ與フルニハ、其證ヲ詳カニシ、而シテ後ニ與フ可シ。苟クモ誤リ治セバ、即チ斃ルルニ至ラン』と。

應用



(一)、頭部に熱感あり、心煩し、胸滿して痛み、或は其痛、背部に及び、食慾なく、時に乾嘔し、或は僅に渴を覺え、四肢に微冷を感ずる症。

(二)、胸背部痞滿して安からず、惡心、煩悶ありて飲食を欲せず、既に日を経て治癒せざる症。

(三)、外部に時々熱感あり、胸痛、背に徹し、背痛、胸に徹し、或は乾嘔し、或は心煩する症。

(四)、吐せず、下らず、頭項部に大汗出で、胸部滿悶して飲食を嫌惡し、熱性症候を缺く症。

(五)、咳嗽、咯痰あり、胸背部攣痛して俯仰するを得ず、時に自汗出で、其脈數なる症。

(六)、發汗の後、頭部に熱感あり、胸痛し、煩悶し、或は乾嘔し、微渴し、四肢厥冷する症。

類聚方集覽に云く

『凡ソ瓜蒂(散の略稱)ヲ服スルハ、三分ヨリ五分(約一・二乃至二・〇)ニ至ル。多服スルニ宜シカラズ。已ニシテ、須臾ニ鳥羽或ハ紙繩ヲ以テ、徐徐ニ咽下ヲ摩拂シ、以テ其吐ヲ挑促シテ可也。又亡血家ハ、大ニ之ヲ禁ズト曰フ。然レドモ産後暈倒スル者ハ、是レ瘀血ノ逆攻也。故ニ此方ヲ服ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『卒中風、狂癇、暴厥、眞頭痛、風眼、雷頭風、痰癰、肩背臂膊ノ疼痛、霍亂、胃翻等、病毒胸膈ニ在ル者ハ、之ヲ用フレバ皆效有リ。但ダ精氣虛乏スル者、腹力脱弱スル者ハ、之ヲ與フ可ラズ』と。此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 十棗湯 ジツサウタウ (傷寒論及金匱要略方)

芫花 甘遂 大戟

右三味等分、各別に細末にし、混和して散と爲し、水一合を以て、先づ大棗十枚(一二・〇)を煮て六勺を取り、散二・〇を入れ、頓服す。

『若シ下ルコト少ナク、病除カザル者ハ、明日更ニ服スルニ、半錢(約二・〇)ヲ加ス。快下利ヲ得テ後、糜粥ニテ自ラ養フ。』

此方、大棗十枚を以て之が先と爲す。故に十棗湯と名くと。

又曰く、此方の古名を朱雀湯と稱す。朱雀は則ち四神の一にして、其大棗の色赤きを以て、之が方名を立つと。

#### 藥能

芫花(ゲンクワ)の性能

藥徵に云く

『水ヲ逐フコトヲ主ドル也。旁ラ咳、掣痛ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、欬逆上氣、喉ノ鳴喘、咽腫、短氣ヲ主ドリ、水氣、脹滿ヲ瀉シ、蟲ヲ殺ス』と。

大戟（タイゲキ）の性能  
藥徴に云く

「水ヲ利スルコトヲ主ドル也。旁ヲ掣痛、咳煩ヲ治ス」と。  
又、古方藥品考に云く

本方證

十棗湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○滲滲として汗出で、發作、時有り、頭痛し、心下痞し、鞭滿し、脇下に引いて痛み、乾嘔、短氣し、汗出で、惡寒せざる證。（太陽病下篇）。

又、金匱要略に於けるものは

（一）懸飲（水飲胸間に懸り、咳唾引痛する證）の證。（痰飲欬嗽病篇）。  
（二）咳家、其脈弦なる證。（同上）。  
（三）支飲家、欬煩し、胸中痛む證。（同上）なり。

本方の作用

此方は、芫花以下の三味より成り、而して其藥量は等分なるも、其服用に際しては、更に之に加ふるに、大量の大棗を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「胸腹掣痛シ、息迫スル者ヲ治ス」と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

「心下痞滿シテ痛ミ、而シテ其痛、脇下ニ引ク。故ニ呼吸短息ス」と。

應用

（一）、熱候なく、胸部滿悶して、時々痛み、痛を發すれば俯仰する能はず、二便減少し、其脈緊なる症。

（二）、胸肋部疼痛し、腹筋攣急し、尿利減少し、其脈稍や浮にして滑なる症。

（三）、濕性肋膜炎、及び其類症にして、強實なる者。

（四）、「ロイマチス」性疾患にして、虛候なき症。

（五）、水腫性脚氣等にして、強實なる症。

外臺秘要に云く

「久シク癖飲ヲ病ミ、停痰消セズ、胸膈ノ上ニ在リテ液液、時ニ頭眩シテ痛ミ、若クハ眼睛、身體ニ攣キ、手足十指ノ甲盡ク黄ナルヲ療ス。亦脇下支滿シ、飲（水飲）輒チ脇下ニ引イテ痛ムヲ療ス」と。

又、類聚方廣義に云く

『支飲、咳嗽、胸脇掣痛シ、及ビ肩背、手脚ニ走り痛ム者ヲ治ス。

痛風、支體ニ走注シ、手足微腫スル者ハ、甘草附子湯ヲ與ヘ、此方ヲ兼用スレバ、拮据ノ功有リ。丸ト爲シテ用フルモ、亦佳ナリ』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

### 酸棗湯 サンサウタウ (金匱要略方)

酸棗仁九・六 甘草〇・四 知母 茯苓 芎藭各〇・八

右五味、水一合六勺を以て、先づ酸棗仁を煮て一合二勺を取り、後、諸藥を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、類聚方に在りては、酸棗仁湯と名く。今、原本に従ふ。

#### 藥能

酸棗仁(サンサウニン)の性能

藥徵に云く

『胸膈煩躁シ、眠ルコト能ハザルヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味酸平、心腹寒熱シ、邪結ボレ、氣聚マリ、煩シテ眠ルコトヲ得ズ、臍ノ上下痛ミ、虚汗久シク洩ルルヲ主ドル』と。

#### 本方證

酸棗湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○虚勞、虚煩して眠ることを得ざる證。(血痺虚勞病篇)なり。

#### 本方の作用

此方は、酸棗仁以下の五味より成り、而して酸棗仁は其量最も多く、知母、茯苓、芎藭之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『胸中煩躁シテ、眠ルコトヲ得ザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、眠ルコトヲ得ズシテ、虚煩スル者ハ、酸棗湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

#### 應用

(一)、病後の不眠症等。  
(二)、神經衰弱様疾患にして、身體羸瘦し、不眠の傾向あり、故なくして心悸亢進し、細事に驚き易き等の症。

類聚方集覽に云く

『晝夜昏睡シ、數日覺メザル者モ、亦間マ此方ニ宜シキ者有リ』と。

又、方機に、本方の適應症を擧げて云く

『煩シテ眠ルコトヲ得ザル者。』

煩悸シテ、眠リ寤メザル者』と。

又、類聚方廣義に云く

『諸病久々ニシテ愈エズ、<sup>ワケルキ</sup>疝<sup>コシ</sup>、困憊シ、身熱シ、寢汗シ、怔忡シテ寐ネズ、口乾キ、喘嗽シ、大便溏ク、小便澀リ、飲啖味無キ者ハ、此方ニ宜シ。證ニ隨ヒテ黃耆、麥門冬、乾薑、附子等ヲ選ビ加フ。

健忘、驚悸、怔忡ノ三症ハ、此方ニ宜シキ者有リ。症ニ隨ヒテ黃連、辰砂ヲ擇ビ加フ。

脱血過多、心神恍惚シ、眩暈シテ寐ネズ、煩熱(虚熱)シ、盜汗シ、浮腫ヲ見ハス者ハ、此方合當歸芍藥散

ニ宜シ』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

### 三物黄芩湯 サンモツワウゴンタウ (金匱要略方)

黄芩二・八 苦參二・八 乾地黄五・六

右三味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二、三回)。

『多ク蟲ヲ吐下ス。』

此方、原本に在りては、黄芩の分量稍や少なし。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

#### 藥能

苦參(クジン)の性能

藥性提要に云く

『苦クシテ、濕ヲ燥カシ、火ヲ瀉シ、風ヲ祛リ、蟲ヲ殺ス』と。

又、古方藥品考に云く

『氣味極メテ苦ク、涼降ナリ。故ニ其能、伏熱ヲ除キ、痞塞ヲ開キ、以テ煩熱及ビ小便難ヲ療ス』と。

#### 本方證

三物黄芩湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○四肢煩熱に苦しみ、頭痛ますして、但だ煩する證。(婦人産後病篇附方)  
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心胸苦煩ノ證有ルベシ』と。